

旅舎内の點火は天然瓦斯の鑛泉の傍に噴出せるを取りて料となす。又茶店、揚弓店、

玉突場等あり。附近神代塚、人穴、烏帽子岩

等の奇勝あり。停車場よりの順路は、稍爪先

上りなれども、極めて平坦なるが故に、徒歩

に適す。浴後、座して三保、田子の浦々芙蓉

の峰を望むべし。

●●● 島田町 藤枝町を距る三里、町は島田停車

場の北方にあり。地は志太郡島田町にして大

井川の東に位し、人口一萬餘、市街の繁昌は

藤枝町と相伯仲す。町に島田銀行、綿絲紡績

所等の建物あり。古來對岸の金谷との間には

燈台渡しありて東海道中の一名所とせられたる所なり。町内に大井神社あり。町の産



志太の温泉

燈台渡しありて東海道中の一名所とせられたる所なり。町内に大井神社あり。町の産

土神にして、毎月十五日例祭を催し、又寅巳申亥の年を以て大祭を行ふ。祭典は古來奇異の式典あり。帶祭、又は大奴といひて弘く世に知られたり。

●●● 大井川 島田町以西は、臺地連りて北には丘陵起伏し、その間を有名なる大井川は

流れて東南、海に注げり。川は源を甲信の境なる白根山に發し、安倍郡より南に流れ

て駿遠國界に入り、志太郡及び遠江の榛原郡を東西に分ち、途中關の澤、寸又の諸水

を併せ、志太郡の吉永、榛原郡の吉田二村の間にして始めて海に入る。その延長凡そ

四十七里、沿岸平地に乏しく、水勢又急にして、灌漑の便なく、又交通の便なし。此

の河平時は水少く、殆ど徒歩して渉るを得れども、一度豪雨の來る時は、河水忽ち汎

濫して、兩岸相辨へず、旅人は徒らに足を島田金谷に止めしなり。今は鐵橋にして、

瀛車は島田驛より直ちに遠江國金谷驛に至る。戯曲「朝顔日記」はこの川に材を取り

て趣味あり。芭蕉「さみだれの雲吹きおとせ大井川」

甲斐國

三六八

駿河國の北に位し、西は駿河信濃に接し、北は信濃及び武藏に界し、東は武藏相模に對して、全く海岸線を有せず、地形全く東海道の諸國と其趣を異にす。東西二十里十九町、南北二十二里二十二町、面積二百八十二方里餘を有し、一市九郡を置く。甲府市及び東山梨、西山梨、東八代、西八代、南巨摩、中巨摩、北巨摩、南都留、北都留即ち是なり。山梨縣これを管す。山岳重疊して四境を劃り、平坦の地は僅かに國の中央なる甲府盆地に限れるを以て、地形概して四方に高く、中央低窪して、其形恰も摺鉢に似たり。而して此間を流走なる諸川は、其の上流の大部はいづれも甚だ急流にして、狹隘なる溪谷を奔下し、中流以下稍と緩となる。これ即ち國名の由つて來るところ、甲斐は峽の意なりといふ。國の西境には一條の山脈北方信濃諏訪郡の南方にある諸山嶽より延亘し來り、南方に走りて二千米以上の高距を有せる一連の屏障をつくれり。

仙丈嶽（二二六九米）北嶽（三二五二米）荒川嶽（三二二九米）最も高峻なり。七面山（二七七三米）はその最も南方に位す。これと連亘して閃雲花崗石より成れる一山脈なり。駒ヶ嶽最も高くして三千米を有せり。鳳凰山（二九一二米）鞍馬山（二四八三米）等これに次ぐ。國の北部及び東部に群起せる山岳は秩父山塊の一部にして、國の西北隅信濃との境に入ッ嶽火山あり。この東に鎗峯山あり。其の東横尾山と大双里山との間に甲府盆地あり。釜無川の大支流鹽川に沿ひて北方千曲川上流地方に通ずる黒森嶺（一四七七米）あり。これより金峯山（二五五一米）と相連り、甲武信三州に跨れる、甲武信嶽（二四五八米）に達す。甲武の境に大洞山（二〇四八米）雲取山（二〇〇一米）あり。甲武信嶽と大洞山との間に秩父甲府の兩盆地を連續せしむる唯一の交通路雁阪嶺（二〇八二米）あり。この南方に一山塊孤狀を成して南方遠く甲府の東南に延び、東山梨郡の中央に二三の小山嶺を起伏せしめ、北都留、東山梨の間に雁ヶ摺股山（一九九八）木咲山（一八三八米）等を起し、更に東八代郡の北部に駒ヶ嶽

(二三五四米)釋迦ヶ嶽(一五九六米)を生ず。而して田野山、京戸山間に西方甲府盆地と東方桂川流域地の交通路なる笹子峠(一〇五八米)あり。北都留郡の大部は小佛古生層より成り、其の著しきものに大菩薩嶺(二〇二六米)初鹿野山、大峯山等あり。この山群南方桂川の谷を隔て、南都留郡に起伏する山嶽は、高峻の度大に減じ、高距概ね千米内外に過ぎず。又此南方、富士の山陰には、御阪山脈蜿蜒として東西に延亘し、西湖の盆地桂川上流地方と甲府盆地との分水嶺を成せり。富士火山脈は略々國の中央を貫きて東南々より西北々に走り、茅ヶ峯火山八ヶ嶺火山皆これに屬す。茅ヶ峯火山は甲府盆地の北隅に方り、西半は八ヶ嶺火山の裾野に相接す。河川は釜無川笛吹川富士川等最も大なり。而して富士川は諸水を集めて山間を流れて東海に向つて流る。甲府盆地は高距二百五十米を有し、面積約二百平方軒を占む。釜無川、笛吹川に由りて灌漑せられ、地味豊沃にして田園よく開け、甲府市を始めとして、勝沼、韭崎、市川、大門、猷澤の名邑發達し、人口の密度最も大にして、實に國の中心を成せり。

この地は往時は曾て湖底たりしといふことは眞に近く、今日なほ地下より腐蝕せる芦荻の類を出し、周圍の山腹往々にして段丘を存すといふ。この地方の地質が水中の沈積物より成れるもまたその一證たり。郡内と稱するは南都留北都留の地にして、主として桂川の流域に沿ひて發達す。機業の盛なるを以て知られ、谷村町その主邑を成せり。

沿革 古へ國府を八代郡(今の西山梨郡)に置く。源頼朝の治世武田信義をして當國及び駿河を管せしめ、後ち信義の子信光を守護とし、傳へて八世信滿に至る。信滿足利持氏に譴責せらるゝや、巨摩の逸見有直、持氏の命を矯て信滿を殺し、以て當國を奪ふ。既にして將軍義持信滿の子信元を當國に封じ、五世信虎治を躑躅ヶ崎即ち今の古府中に徙す。子晴信に至り大に兵を用ひて四隣を併吞し、天下の強國と稱せらる。其子勝頼暗愚にして讒を信じ、功臣之が爲めに多く戦死す。時に織田信長父子大舉し來りて當國を攻め、勝頼終に天目山に戦死す。後ち織田氏徳川氏相尋で之を領し、徳

川氏の關東に徙るや、加藤、淺野の二氏封を此地に受け、後ち家康其子義直を封ず。其後四世將軍弟綱重を封じ、幾ばくもなく綱重罪ありて死を賜ふ。廿餘年を経て五世將軍綱重の子を養ひて世子とし、其地を擧げて柳澤原吉保に賜ひ、尋で郡山に徙封し城番を置きて之を治す。戊辰の亂東兵柵を勝沼驛に設けて官軍を防戦し、敗れて東に奔る。

●交通 中央東線は相模より來り、桂川の溪谷に數箇のトンネルを穿ちて上野原、鳥澤、猿橋を経て大月驛に達し、これより笹子峠に大隧道を穿ちて、甲府盆地に出て、鹽山、日下部、石和を経て甲府市に達し、これより西北、釜無川に沿ひて、韭崎、日野春、小淵澤を経て信濃に入る。これ、國の交通路の主脈たり。甲府より南は甲府市より楸澤町に達する山梨輕便鐵道あり。道路は富士山の山陰を御阪、籠阪を越ゆる道路最も重要なり。

●産業 米は甲府盆地を主とす。されと氣候地味共に海岸地方に比して良好ならず。耕地又甚しく森林地に壓迫せられたるを以て、米産地としては見るに足らず。麥、大豆、粟、稗等多少の産額あり、特用農作物には三極及び葡萄あり。前者は西八代郡を主産地となし、年産額平均十八九萬圓に達す。後者は食用及び葡萄酒の原料に供し、縣下各地これを栽培せざるなしと雖も、勝沼附近及び東八代、東山梨の兩郡をその最とす。林業は溫帶南部の兩區に屬し、四周山を遶らし、松、杉、樅等の森林に富む。森林の大部は御料林にして國有林民有林は甚だ少し。八ヶ嶽の白須御料木は松樹を以て鳴り、其林相實に縣下に冠たり。生糸業又盛にして、長野縣に次ぐ。織物には南北都留郡に於ける甲斐絹あり。其主産地谷村町には染織學校あり。又夜具地に用ゆる郡内織を産す。又、御嶽山の地方に水晶を産す。

○中央東線沿線 中央東線は東京飯田町驛を起點として、武藏甲斐を横斷して信濃に入り、尾張名古屋市を起點として木曾山中に入れる中央西線と相合するものにして、未だ工事中に屬し、東線は信濃鹽尻に達し、西線は同木曾山中野尻驛に達せり。一二年の中には、全く連絡を完うして、木曾の山中も全く汽車の便によりて旅行すること

を得るやうになるべしといふ。甲斐國にあつては、この線路は相模武藏の境なる小佛峠に大隧道を穿ち、與瀬驛を経て上野原驛に至る。線路桂川の峡谷に沿ひ、到る處に隧道を穿つ。この間の驛名は上野原、鳥澤、猿橋、大月の四驛なり。大月驛より桂川に離れ、笹子川に沿ひて、笹子峠に大隧道（一萬五千餘呎）を穿ち、これより天目山の古戰場をその附近に有する初鹿野驛に達し、全く甲州街道を北に離れ、鹽山を過ぎて青梅街道の一驛日下部に達し。甲府盆地の東端を繞ひ、笛吹川の流に沿ひて再び甲州街道の石和驛に至り、遂にその首府甲府市に達し、甲府市より西して信州街道に沿ひ、釜無川の峡谷に沿ひて西北に向ひ、龍王、韭崎、日野春、小淵驛四驛を経て信濃諏訪地方に入る。上野原初鹿野間は主として峡谷の間を走り、鹽山、甲府間は甲府盆地の平坦なる間をすぎ、甲府以西は次第に釜無川の峡谷を繞ひて漸く高原臺地の間を駛る。南都留地方に赴かんとするものは、大月驛より下車すべく、河口地方に志すものは石和驛より下車すべく、鵜澤身延地方に赴くものは甲府驛より下車すべし。

上野原驛 中央線は八王寺驛より淺川驛を過ぎて、小佛峠の隧道を穿ち、相模國津久井郡なる馬入川の上流桂川を渡り、與瀬驛を経て當驛に入る。即ち舊甲州街道なり。八王子街道は隧道となり、地平線限なく續く關東大平野なりしも、與瀬を過ぎ上野原に入れば、葦の上山影重疊して、始めて峽中山岳國の底深く分け入るを感すべし。驛は北都留郡の東端に位し人口六千を有する一名邑なり。郡の東北部に發する都留川その西を流れ、街道を横ぎりて北の方桂川と合す。驛に區裁判所出張所あり。商工業隆盛にして、所謂郡内縞と稱する甲斐絹特産地の一たり。因に郡内とは、當驛より西、鳥澤、猿橋、大月の諸驛より笹子峠に至る桂川の沿岸數里及び大月驛より南都留郡谷村町を経て、富士山麓の吉田村に通ずる地方を併する名稱なり。

猿橋驛 左に桂川の溪間、赭色の絶崖を峙てたる處、奔流響をなして下るを見つゝ、汽車は峯巒の中腹を走りて、鳥澤の小驛を過ぎ、猿橋の町に入る。甲州街道中有名の古驛にして、中央線開通以前は、旅客の東京より甲斐に入るもの、必ず足を止むる所な

りき。町は停車場の東方約八町許の處に在り。人口は三千餘を有し、北都留郡役所、警察署、税務署等の所在地なり。盛町は毎月三七の日に於て甲斐絹市場を開き、盛んなる取引をなす。



猿橋 古來日本に三個と數へられたる奇橋猿橋は、町の中央、警察署の前桂川の兩岸相迫る所に架せり。奇 即ち桂川は驛の中央を斷てるもの、その流、此處に至りて幅窄まり、斷崖高く水面を抜いて壁立十餘丈、古昔暗く淵水に望む所、水は油の如き碧藍をなしてその底を走る。橋は下に一柱を用ゐず、長さ十七間、兩岸より巨材を重ねて突出せしめ、その

稍と接近せる所より梁を架したるもの、飛驒の匠の造る所なりと傳ふ。橋より水面まで百五十尺、水深亦二十尋に下らず。南岸、老樹の茂生せる中に一瀑あり。橋の南に白猿の祠あり。此の地未だ此の架橋なき時は渡船を以て往來なせしが、嘗て老猿の藤蔓を傳ふて對岸に達するを見て始めて橋を架すと傳ふ。荻生徂徠著峽中紀行は、その風流使者記の中に、よくこの奇を傳へたり。因に驛は『るんけう』にして橋は『さるはし』なり。

大月驛 大月停車場の所在地にして、谷村方面に往來するもの、要衝なるが故に、旅客貨物の集散常に多く、自ら郡内の中心たり。町に縣立工業學校、中學校等あり。工業學校は明治二十九年の創設にして、本科、別科、專攻科を置き、専ら染色と機械とを教授せり。地は桂と笹子川との相合する處、二流恰も丁字をなし、白色の木橋を架す。囑望亦捨てがたし。馬車鐵道は此の驛より南折して桂川の本流に沿ひ、南都留郡谷村を経て富士登山の吉田口に到る。

岩殿山城址 大月停車場の西北、桂川の流を隔て、絶壁數十丈東より西に回りに巨巖一基、恰も桶を立てたるが如く峙つ、上に城址あり。登路七町にして岩殿権現の祠あり、更に登ること七町にして頂上に達す。一の湍、二の湍、牙城、馬場、大門口等の名今猶存せり。甲陽軍鑑に駿河に久能、甲斐に岩殿、上野に吾妻、三所の名越とあるもの即ち之なり。天正年中武田氏の臣小山田備中守信茂此處に居り、勝頼の織田氏の大軍に攻められて、斐崎の新府城をさゝいかね、逃れ來りて此の城に入らんとする時、小山田氏は已に織田氏と内應して之を入れざりければ、武田一族は終に天目山の下に自盡して、氏族茲に全く滅亡したる所なり。頂に方六尺許の池あり。大旱と雖も、事なしといふ眺望頗る展げて、郡内の山河全く雙眸に落つ。地は賑岡村岩殿なり。

大月驛より桂川の東岸に沿ひ、高尾山を右に見て、田野倉、廿倉、四日市場、姥澤等を過ぎて南都留郡谷村町に至る。約二里半の間都留鐵道馬車の便あり、

笹子驛 中央線は大月を出で、尚、桂川の本流に沿ふて。初狩村を経て、笹子峠の東麓、笹子驛に着す、笹子、黒野田勝沼等は往古より山麓著名の驛なりしが、中央線開通後は全く舊態を失ひ、往時の繁昌を見る事能はず、只旅客貨物の集散あるのみ。驛の人口は二千許を算す。

笹子峠 郡の西隅、笹子村に屬し、東八代、北都留の二郡に跨る。海拔三千四百六十九尺、甲州街道第一の高嶺にして、之れが山腹を貫ける中央線の隧道は長さ實に一萬五千二百四十六呎、本邦未曾有の大隧道にして、汽車の通過するに約十分を要す。此の工事日子六年十ヶ月、工費二百二十一萬圓なりといふ。中央線開通以前までは駕籠馬車なるものを通じ、山道曲折、満山に樹木尠く、峠の道西北に下る時、眼を上ぐれば、甲信の分界嶺たる赤石山大山脈西方に聳え渡り、甲府を中心とせる平野は眼下に横はり展く、西麓は日影村駒飼驛なり。中央線は初鹿野村に停車場を置く。即ち初鹿野驛なり。

江戸より入りて笹子峠を越え、甲府に入らんとする時、中仙道口の官軍の江戸に向つて進軍するあり。信州諏訪に於て軍を甲州街道に分ち、因州、土州の諸藩兵一千二百人、甲府を略取し、勝沼を経て東上せんとするや、此所に此等の幕軍と衝突し、官軍參謀板垣退助、軍を二隊に分ちて前後より之を攻むるに、東軍衆寡敵するに由なく、笹子の嶮をも棄て、敗走し、何等の抵抗なくして、八王子より新宿に入り、東海、中仙二道の官軍と共に、三方江戸に迫り、戦はずして江戸城を受取る。

勝沼町 初鹿野驛より下り、甲州街道、鶴瀬村を經、日川に沿ひて行けば勝沼町の麓は見ゆ。著名の古驛にして、町の四面は満目之れ一帯の葡萄園、甲州葡萄の本場、國道の要衝に當り、商業又繁昌を極むと雖も、初鹿野勝沼の間、坂路急なるが爲、中央線は初鹿野停車場より直ちに北走して、初鹿野山麓を迂回し、菱山、奥野田の小村を經て、七里村鹽山に至る事となりたるより、今はその盛況昔日に如からず。戸數凡三百五十、人口二千五百を有し、町に山梨銀行の支店、警察分署、郵便電信局あり。

又附近岩崎には葡萄酒の醸造場あり。これより北方四里の間、馬車鐵道の設ありて、甲府石和に通へり。芭蕉に句あり、『勝沼や馬子も葡萄を喰ひながら』市況は西方垂崎と伯仲せり。

大善寺 勝沼町の北方、休息村に通ふ街道にあり。眞言宗にして、養老二年行基僧正の開基、創建に係り、聖武帝の勅願所にして郡中第一の巨刹なり。境域二萬五千坪、後山は生藥嶽にして前を流るゝは日川、正面に石陵あり、登ること數十級にして仁王門に達す。更に三十歩にして樂堂あり、正面に本堂あり、中に藥師如來の丈三尺、行基僧正の作に係る座像を安置す。明治三十八年國寶に定めらる。本堂の右なるは行者堂にして前に三會の松あり。平清盛筆の書翰、巨勢金岡不動の圖、理慶尼の著述、信玄の袈裟、山本勘助の軍刀等を什寶とす。境内は、杉檜松柏の類、奇石の起伏するが上に茂りて、古色の身に迫るものあり。行基僧正の舊跡と稱するもの多し、附近に立正寺あり。序を以て一見すべし。

鹽山驛 七里村大字上於會に屬す。鹽山の町は驛より西方に續きて相應の繁昌をなせり。町の風俗は概して淫靡にして料理店、銘酒屋の類殊に多し。停車場の北に續くは即ち鹽山温泉にして、更に北方數町なる鹽山（小丘）の麓及其の南一帶平坦地なり。温泉は華氏の六十四度位、わかし湯なり。質は微かなる硫氣を含み、痲疾或は婦人の子なきに效ありといふ。浴場の驛に近く、また眺望よろしきが故、夏時來浴するもの多く、一ヶ年平均一萬を下らずといふ。町の北なる鹽山は周圍約一里、圓錐形の山にして、古へ鹽を産したりと傳ふ。山に松多く眺望また快濶なり。上に秋葉社、國見岩等あり。

向嶽寺 鹽山の西にあり。青梅街道は西山梨郡里垣村より日下部村七里村を経て東方柳澤峠を超え青梅町に至る。寺は禪宗に屬し、開山は得勝和尚なり。康曆二年武田刑部太夫信成の創建する處、開山大圓得勝禪師曾て富士山に對して法を問ふと夢みしによると傳ふ。寺の境域は二十三萬四百坪、堂宇の構は悉く宋の佛刹に模し、堂中又

磚を敷て疊に代ふ。本堂、開山堂等はその重なるもの、開山堂には得勝及び第二祖峻翁の像を安置したり。

惠林寺 同じく秩父街道、笛吹川の鼓川と落ち合ふ處、鍛冶屋橋の東岸にあり。地は松里村字小屋敷にして、南方には遙かに富嶽と連稜の波の如く連れるに對し、栗林、藤等の茂生する笛吹の溪谷を控え、瀧ありて深淵に響き、巨巖の急流に叫ぶもの、淙々峽間に湧けり。鏡ヶ淵、男瀧女瀧、又は高き鍛冶屋橋の眺望等見るもの多し。寺は乾徳山と號し、元徳二年夢窓國師の開基にして武田家累代の崇敬深く、縣下第一流の巨刹なり。永録元年武田機山（晴信）寺領三百貫を寄附して、壽藏所とし、改めて臨濟宗古規關山派となす。天正十年近江の佐々木承禎等こゝに潜伏せるを織田信長の知る所となり、大舉して當國に入り、武田氏の遺族の當寺に匿る者あるを疑ひ、又その憎む所の承禎を亡さんが爲め、火を寺門に放ち、時に快川國師以下皆燒死す。徳川家康僧瑞曷をして之を復興せしめ、享保年間國守柳澤吉保、修理を加へて稍舊觀を復す



るに至る。境域宏濶にして伽藍堂塔の古雅にして壯麗なる又國內無二なり。山門は形を日光の皇嘉門に規り、本堂には釋尊の像を安置す。靈殿二あり。一は信玄の不動尊、一は柳澤吉保夫妻の像を安せり。客殿の後なる假山は夢窓國師の築く所、頗る風致あり。又兩袖櫻、横月梅、惠山水、士峯雪、兩股杉、松間反橋、林抄浮圖等の勝區あり。明治三十八年二月、火災に罹り堂塔の大部を烏有に歸したるも、已に大庫裡は再建せられ、復舊又遠からず。

●●●●●
 武田晴信祠 惠林寺の境内にあり。元龜

四年武田晴信卒して此處に葬り、論して惠林寺殿機山大居士といふ。京師の佛工弘清の刻にかゝる晴信の像を祀る。不動明王に似たるを以て里人之を武田不動と呼ぶ。

●●●●●
 永昌院 平等村字矢坪の北方にあり。曹洞宗にして、東八代郡八代村、廣嚴院の末寺なり。文明年中武田信昌の開基にして僧文英、即ち前廣嚴院第二世にして神嶽通龍禪を開祖とす。明治四十二年八月十日焼失す。同村岩下に岩下温泉あり。

●●●●●
 要害澤古戰場 春日居村御前、兜雨山の間にある。或は夕狩澤又は木綿刈澤に作る。寛正年中武田信昌、逆臣跡部景家と戦ひたる處、寄せ口、隠れ里、勝負澤等の地名殘存す。今尙土を穿てば、弓箭、刀劔の類を發見すべし。

●●●●●
 日下部驛 鹽山驛より中央線は日下部驛に入る。驛は加納岩村大字神内川にあり。小原町は停車場を距る北方十二町、戸數四百、人口四千を有し、東山梨郡役所所在地なり。青梅街道の一驛次にして、街衢繁昌にして、警察署、稅務署、郵便局、區裁判所出張所等あり。又驛前には加納岩合資會社、甲府運送會社出張所等あり。街路平

淨古寺城址 諏訪村の西南に在り。往古此處に一巨刹ありて常牧山淨古寺といふ。天正年中徳川家康寺を窪平に移し、甲信二州の役夫を使用して、城を築き、内藤氏をして之を守らしむ。今尚涸濠の跡を存す。

小山田城址 中牧村の西、西保村の境にあり。安田遠江守義定の要害城なり。山頂に櫓跡、荒壘等残存せり。而して西保川その南を流る。城を西の御所と呼び、碑あり。山下に生害石あり。

水晶山 西保村の西北三里、入會山の内字倉澤に在り。嘉永五年、礦物を發見し、爾來良質の水晶を出す。安政年間一度休山す。

放光寺 松里村字藤木に在り。惠林寺に程近し。新義真言宗にして、賀賢僧都の草創なり。もと黒川山麓高橋村に在りしを壽永三年安田義定此の地に遷す。本堂には藥師如來を安置せり。

龍山庵址 放光寺の北方三十町にあり。地は松里村字下柚木にして、地は夢窓國師の曾て僑居せし處なり。

川浦温泉 笛吹川の上流三富村字川浦にあり。泉質硫氣を含み、皮膚病に効あり。

附近奔湍に一の釜、二の釜、又は上釜口、下釜口の稱あり。兩崖悉く岩石より成る深淵にして、淵の暗きが中に飛瀑數條をかけて、水聲溪を鳴動して急端白沫を飛ばすさま、壯觀といふに耐えたり。

笛吹川 源は東山梨郡の北境國師ヶ岳に發し、徳和、琴、鼓、重、日川等の諸川をあつめて、東西山梨を経て荒川を合し、東西八代中巨摩の各郡より市川大門町に至り、釜無、蘆川の二流を合して富士川となる。一の釜、二の釜、鎧ヶ淵、差出の磯等の風景はその笛吹の上流に屬せり。

山梨岡神社 東山梨郡の西南隅、岡部村字鎮目に在り。式内の郷社にして大山祇命、別雷命、高靈神三座を祀る。崇神天皇の御宇の創立にして、社殿は飛騨内匠の造る所

と傳ふ。扉の前に木彫一本足の奇獸あり。龔と稱へて、里人の崇敬する所なり。正月には筒粥祭を行ひ、又舊曆三月初午の日には神輿を御室山へ渡御す。

石和町 甲州街道中甲府市より東京間第一驛にして、又吉田へ通ふ鎌倉街道の首驛なり。中央線石和停車場は町の北方八町にあり。日下部驛よりは笛吹の鐵橋を渡りて川に沿ふて西に下れば直ちに町に入る。地は東八代郡石和村に屬す。古來交通の頻繁に而も中央線開通以來は市街の繁昌舊に倍し、甲府との間一里二十二町、石和を経て勝沼町に達する山梨鐵道馬車あるが故に、殆ど甲府つゞきといふの觀あり。戸數凡そ千、人口凡そ五千を有し、東八代郡役所、警察署、區裁判所出張所等あり。又石和銀行、郡立山梨蠶業學校あり。後者は甲種實業學校にして本科別科を設置せり。その般盛眞に峽東第一なり。市街の西端を流る、笛吹川に一橋を架し、甲軍橋と稱す。又町の東方を北より南に流る、は鶺鴒川又石和川といふ。盛夏の夕、涼を慕ふて甲軍橋上に立たば、黃紅の炬火水を送り、水に映じて、鶺鴒の奇觀を見るべし。日蓮上人の奇蹟

中一悲劇と傳はれる『鶺鴒の勘作』の亡魂濟度の事あり。謠曲『鶺鴒』に『都留の郡の朝言を、日たけてこゆる山道を、すぎて石和につきにけり……抑も此のいさ小河と申すは云々』とあり。川は又流盤を以て甲斐八景に數へらる。河流の變遷著しき處にして現今、鶺鴒川といふは石和驛の東方にして、その西端を流る、を石和川と稱せり。近年甲斐大水害によりて石和は被害最も甚しく、中央線の車窓より左手のある處は尙、一圓の小砂黄色を呈して荒廢せり。

遠妙寺 石和町の東方に在りて寺門直ちに街路に接す。日蓮上人を以て開山とし、文永十一年石和五郎の開基にかゝる。日蓮上人舊蹟の一として最も著名なる佛刹なり。開祖につきて日朗、日白相繼ぐ。三僧の木像は今尙本堂にあり。日蓮上人會て、鶺鴒勘作の亡靈濟度の爲法華經一部の文字一石一文字づゝ書きて鶺鴒川に流し供養を營みし事あり。後徳川家康が十石の朱印を賜ひたりといふ。七石今尙存し寺の境内にあり。本堂、庫裡、二王門、普賢堂、七面堂及び鶺鴒勘作の墓あり。毎歳の會式には境



甲府市

市街の北端にありて、南は直ちに町に連り、北には大工場の煤煙、蓮岡の麓に昇る。驛前に笹子大隧道開通紀念碑あり。直ちに山梨馬車鐵道會社の馬車ありて甲府各町、中巨摩、南巨摩、西八代方面行の乗客を待てり。右手に元監獄署の址を見て行くこと二町、錦町に山梨縣廳、縣會議事堂、地方裁判所、師範學校、縣立病院、警察本部あり。左折して、柳町に甲府市役所、常盤町に郵便電信本局あり。西青沼町に甲府測候所、錦町に山梨縣農事試驗事務所、舞鶴城内に縣立第一中學校、壽町に縣立高等女學校、

東青沼町に市立甲府高等學校、櫻町に私立幼稚園、山梨教育、書圖書館等あり。此他御料局支廳、電話交換局、鐵道作業局出張所、銀行には、第十、山梨農工、有信貯金、甲府商業、若尾貯蓄、漸進等の株式組織、若尾、大森、杉浦等の合名組織あり。甲府電力、甲府米穀取引所、山梨農事等の株式會社、山梨土木請負、甲府水産、山梨運輸甲府運送等の合資會社、奥村織物、土屋食料品、甲府博品館等の合名會社あり。公園に南北二個、劇場には櫻座、巴座等、穴切新地には遊廓あり。若松町には藝妓屋、待合軒を列ぬ。日刊新聞社には、山梨日々、峽中日報、山梨民報、甲斐新聞、山梨時報等あり。最も市街の繁華なるは、柳町、櫻町、八日町、緑町、相生町、太田町にして就中柳町、八日町は、縣下の百貨の一度輻輳して、更に四方に分散するの中心なるが故に、富商軒を並ね、櫻町、魚町、三日町、相生町等之に亞ぐ。地は西山梨郡の西南部に位し、西は荒川を隔て、中巨摩に界し、東西三十二町、南北一里六町、戸數九千人口五萬を有す。市街を圍繞して煤煙の上るは多く製絲工場なり。目下一萬五千の工

女と、新式の器械によりて盛んなる作業に従事す。市は國內唯一の中心なるが故に、國産の繭、生絲の取引は殊に盛大にして、海外に輸出するもの多く、その産額、繭は年々三百五十萬圓、生絲は七百萬圓を下らず。又特産の水晶は質の良好なる事宇内稀にして、就中金峰山中に産するもの最も美し。竹森山中のもの之に亞ぐ。金峰山に産するもの一年十萬圓を下らず。又重石原名タングステンは水晶と同坑に産し、世界に比類少き礦物にして、最硬の鋼よりは硬しといはる。されば甲府の市場に集散する物産の主なるものは、米麥、大小豆、馬鈴薯、甘藷、葡萄、柿、繭、生絲、用材の栗杉松等、製紙原料、經木、水晶、重石、紙、甲斐絹、葡萄酒の類なり。明治三十九年十月一日より四十一日間、甲府市に於て一府九縣聯合共進會を開催せり。地は、文祿三年淺野長政の甲斐に封せられし時、始めて城を築き武田信玄の居城たりし北方一里を隔てたる古府の居民を移し新市街を興し、寛永二年柳澤吉保甲斐守に任せられて來り治むるに及び、儒臣荻生徂徠を聘して商工業を奨励し、市街の改革を起したるより、

全國の殖産漸く隆盛を増し、柳澤氏の封を大和の郡山に移されてよりは、首府甲府は幕府の直轄に屬し、明治維新の後、附近村落を加へて市街を増加し、山梨縣廳を設置して、甲斐一國を統轄す。

甲州街道 市の錦町より、石和勝沼駒籠笹子猿橋上野原及び相模の津久井を経て東京市に入る。勝沼まで山梨輕便鐵道の便あり。

駿州往還 市の柳町より起り、小井川嶽澤石切南部萬澤及び駿州夫原を経て、興津町に達す。甲府より嶽澤までは山梨輕便鐵道、以南は車馬の便なきに非るも、旅客の少數は富士川通船による。

信州往還 市の錦町より、韭崎臺ヶ原風來及び信州葛木を経て上諏訪に達す。車馬の便あり。

駿州中道往還 市の伊勢町より、西八代郡上九一色村を経て駿河の大宮に至る。

岡屋往還 甲府市より、北巨摩郡鹽崎村に至りて、信州往還に合す。

葡萄と水晶 葡萄は古來甲州八珍果の一にして、今より七百年前にその培養を始む。即ち文治二年八代郡祝村城の平の山中にて、村人兩宮勘解由之を發見し、私園に移植して數代に傳ふ。徳川家康の時、甲斐の名醫、徳本なるもの、棚架法を案出して之を教ふ。明和四年、市川大門、大宮、相川、甲連の諸村に移植す。祝、勝沼兩村の民之を喜ばず、遂に慶應の末年に至るまで、兩村の外他國に之を輸出するを禁す。維新後、西洋種の輸入ありて兩々佳味を競ふ。就中勝沼地方より産出するものは、所謂本場葡萄にして、房は長さ一尺に。

餘り、粒をつくる一百、外皮は紫綠色に白粉をつけ、保存の久しきに耐へ、眞に天下の逸品たり。大なるものは一房の價普通一圓なり。産額は一年、甲州葡萄酒は八萬圓を下らず、西洋種にして六萬圓を下らずといふ。水晶は、金峰山、竹森山、増富村の乙女坂等に産するもの最も良質なり。紫、黒、水入、草入、茶等の種類あり。製作の種類は、玉、珠數、指輪、印材、文具、置物、婦人裝飾等なり。製作と販賣と共に市内柳町に最も多く、常磐町に甲斐物産商會、八日町に上原商店等あり。産額に於ては乙女坂、金峰山品最も多く一年十萬圓を下らずといふ。

東京府	廿五里十五町	神奈川縣	三十三里三十町	埼玉縣	四十一里卅二町
静岡縣	廿七里十七町	長野縣	四十三里〇六町	日下部村小原	三里十三町
石和村	一里二十二町	市川大門村	三里二十四町	鯉澤村	四里二十五町
龍王村	一里二十町	河原部村葦崎	三里十七町	谷村	十一里〇五町
大原村猿橋	十一里廿七町	若神子村	六里〇三町	睦合村	十三里〇四町
岩間村	六里二十一町	上野原村	十六里十七町	勝沼村	四里〇一町
小笠原村	三里〇四町	南部村	十三里〇四町	吉田村	十里〇五町
富士山頂	十六里〇六町	身延山身延村	九里〇八町	宮本村御嶽山	三里三十町

舞鶴城址 即ち甲府城址は市の北端、甲府停車場前通と蓮花咲く濠を隔てたる東隣

に在り。而してその一半は今中學校、一半は停車場の一部となりて存す。城の城、東西五町南北三町半、境内今は舞鶴城公園と稱せられて、眺望の佳なること、遙かに太田町公園に超えたり。勸業試験所の用地にして、又舊天主臺には信號柱を立て、中央氣象臺制定の氣象報信號を掲げ、毎年晩春の候結霜の患ある時は、各所へ警戒を電達すると共に、市内愛宕山頂に於て號砲二發を連射して急を告ぐるの設備あり。氣象臺下には又正午號砲用の大砲一門を据ゑたり。正門は遊龜橋によりて櫻町一丁目の街路に接し、裏門は停車場構内より間道を上るべし。天主臺よりの眺望は、甲府市街一圓の、西南漂渺の間に一條の白布をかけたる荒川、停車場を越えて武田古城址の夢山を負ひたるも見ゆ。西は白根、鳳凰、駒ヶ嶽の打續き峙つありて、一帶の盆地に臨む。地は古へは、巨摩郡青沼郡に屬せしが、後世山梨郡に編入され、北山筋一條庄と號し、一條忠賴此地に居館を設けて、小山と稱せり。その歿後、子孫等追福の爲に、一條道場即ち今の一蓮寺を建て、文祿慶長の頃に至り、淺野長政道場を稻門村即ち今の太田

町に遷して、再び築城。慶長八年徳川義道此處に封せられ、平岩親吉を以て相とせり。元和二年徳川忠長の封せられたるも、罪ありて國除せられ、大久保忠成を以て城代とし、慶安年中之を廢し、後徳川綱重及綱豊の二人を経て、寶永二年柳澤吉保に至る。吉保大ひに明政を布き、土木を起して城廓全く完備す。かくて再び幕府の直轄となり、享保十二年火災に罹り、米廩、兵器庫、壘壁、樓櫓等を殘して烏有に歸す。天守臺下に

●●●●●
 機山館 あり。明治三十九年十月の一府九縣共進會の紀念として、同會敷地と相接したる處に建設せられたり。館に多數の集會又は貴賓來甲の折、宿舍に充つるの目的を以て設計せられたるものにして、階上は大宴會に供せらるゝ巨室、階下に球室、食堂、書房、寢室、浴舎、庖厨等の九室に分たれ、皆相應の美を盡したり。而も眺望最、も之に適ひ、正面富嶽に對し、直ちに下は甲府全市に臨み、東は笹子峠より南方御阪、右左口の山脈、西は富士の急流を越えて白根山脈を見晴し、甲府を繞れる六郡の村里

も尙よく指點すべし。北は長禪、圓光、要害、積翠、和田の峯嶺、東南より北に走り、更れ西南してその形自ら鶴の翼の如し。兩翼のおさまる所即ち武田古城址なり。眼を上げて打續く山又山を追は、和田嶺の後方に重疊するものは、近きは帶那、獅子平太刀岡山、茅ヶ嶽二山更に之に續く。二山の間、烏帽子の如き危峯一基、倒れむとして靜かに白雲を圍らすものは、御嶽山の一角なり。金峰、玉壘、瑞牆の靈峯は此より一溪を隔て、その後方に霞む。翻へつて西の方、銳峯峻嶺の牙の如き、雲を衝き天を噴まんとするは駒ヶ嶽、地蔵ヶ嶽なり。之れは前面一帯の高原は西南に傾斜して、四世紀の前名將信玄が喝破せる甲州の鎖鑰地たる龍王なり。館の四圍、まことに十里の囑望を滿すべし。

●●●●●
 豐受神社 横近習町に在り。舊は、伊勢兩宮の總社にして、府中柳小路の大神宮、同袋町の大神社、柳町の大神社の三座を支配せり。國內舊社の一にして、天照大神、豐受大神の二靈を祀り、この城の北積翠寺村一の森に在りしを、後の世市内の山田町に遷

し、焼失後更に今の地に遷したるものといはる。

●**穴切神社** 市の西北部、飯沼村字穴切に在り。今は近傍に遊廊の移轉し來りたる爲
幾分風色を傷けられたれども、境内廣く、就中觀月、雪見に佳し。郷社格にして、須
佐男命、大己貴命、少彥名命を合祀し、社は明暦二年の棟札を存する壇ありて、優に
數百年の古社なる事疑を容れず。

●**愛宕山** 停車場を距る東方數町にあり。山の高さ約一二町、登れば富士白根の峯々
を始め、幾多の巒影重疊して東南西の三面に迫り、笛吹釜無荒川の諸流、田野の黄緑
に輝き、甲府市の莖又一望の中にあり。春は更に櫻咲きて、丘の上、岡の腹、霞に酔
へる人々の集るもの多し。山上に不動尊の堂あり。花の中に山梨英和女學校あり。丘
の西愛宕町には

●**三藤温泉** といふ鹽類泉あり。冷泉にして白濁、硫化水素を含有す。地は富士川を
隔て、境町に對し、泉は北岸の地に涌出す。浴舎の近傍には客舎、茶店等ありて、繁

昌を極む。これより東に三町、

●**長禪寺** 臨濟宗に屬し、夢窓國師の開基にして、府中五山の一なり。元巨摩郡鮎澤
村(今の大井村)に在りしを信玄の遷したるもの、彼嘗て之れに住せる賜紫岐秀に歸依
して禪を學ぶ。信玄の母大井氏を葬る。碑は寺の後山にあり。創立は正和二年に係り
本堂には一尺三寸の釋迦如來を安置す。境域廣く、東北に長禪寺山を負ひ、北は相川
山、南は富士川の清流を見る。武田信玄の書牘二通、長禪寺殿即ち信玄の母の畫像、
天神の畫幅、織田信長の花挿等を什寶とす。

●**尊體寺** 今中町にあり。地は市の東隅、甲州街道の入口の南に當れり。寺は淨土宗
に屬し、大永元年武田信虎の創建、本尊は、唐の善導大師が眞筆といはる、阿彌陀佛
の畫像なり。寺の境域千三百五十坪、毎月十六日を以て賽日とす。天正十年徳川家康
の當國に在陣するや、之を本營となし、器物の多くを寄附して、崇敬深く、又世々の
國守よりも、或は田畑、金員を納めたるもの多しと。

の木像を各安置す。されば武田氏が世々の寄進頗る多く、什寶古文書の類は従つて豊富なり。信虎の笈、信玄の笈、茶臼、日蓮上人眞筆の紺紙金泥の法華經等はその重なるもの、毎年陰曆四月十二日之が衆庶の縦覧を許す。

●夢山 又夢見山といふ。市の東北に當る、要害山麓一帯の高地にして、甲府市の北端に連れる畑地の傾斜、荒川西を流る、舞鶴城はその南に屹立せり。一帯の高地、東部の東光寺山、南部を二本松、長禪寺山、北部を大荒山、之に南し、茶道越と稱する古の官道を距て、夢山はあり。夢窓國師が胡蝶の歌をよめる所、信虎が信玄の出生を夢みし所、『きのふまでみなれし雪は夢の山ゆめとぞ霞む春の曙』と中院中大納言通躬卿の詠せしところ。

●武田古城址 相川村字古府中に在り。甲府停車場を距る北方約半里なり。又躑躅ヶ崎の城址と稱し又古城ともいふ。東西約百二十間、南北約七十五間、廢渥朽礎の今尙存するあり。その端門は東面して躑躅ヶ崎に對す。永正六年武田信虎石和の石和館を

移して此處に築き、晴信勝頼又本城にあり。文正九年七月勝頼織田の兵を防がんとし、新に韭崎に城を築き之に移る。新城或は新府城之なり。かくて古城は廢されたり。之れ實に天正九年十二月、後勝頼の亡ぶるや新舊二城共に荒廢に歸し、荆叢徒らに蔓りて、興亡の跡、客をして佇立するに忍ばざるものあらしむ。明治三十一年城の東北隅に一基の征清記念碑を建つ。

●梅屋敷 又古府中梅林ともいふ。園の廣さ八百坪、内に百餘株の梅樹を栽培せり。春至れば梅園の門を開きて、人の入りて樹下に春日を過ぐすに任す。來り遊ぶ者少からず。

●武田信玄墓 武田古城址の東、大泉寺の西南、相川村岩窪にあり。市を距る北八町、田圃の中老松の茂生するが中に三間半の石柵を繞らし、南面して石門を開く。内に一碑あり。安永八年國人の協力して建設する所、高さ一丈二尺、『法性院機山信玄之墓』の十字を刻す。尙一墓、古碑あり。『法性院殿機山大居士神儀天正元年癸酉四月

燥にして松樹繁茂し、境の中央に本殿、拜殿、神樂殿、東照宮、及び社務所あり。東は富士の細流を距て、大泉寺の山門古城要害山と相對し、風趣甚だ幽靜なり。應神天皇、神功皇后、媛大神の三神を合祀し、縣社格に列す。文祿年中淺野長政、今の舞鶴城を築くに際し、躑躅ヶ崎の武田城内より遷座せしものにして、古來武田家累代の鎮守氏神なり。社の東方に華光院あり。地高くして快濶櫻樹に豊富なり。

善光寺 甲府停車場を距る東方二十町許、西山梨郡里垣村板垣に在り、甲府市より東方に町續きなる板垣の往還より凡そ八町を距つ。境域凡そ三千坪、後山直ちに聳え登れば遙かに甲斐の八景を雙眸の中に收め、風色の掬すべきものあり。本堂は二重屋根三方向拜の御所棟造りにして、元龜三年に落成せるもの、即ち永祿元年武田信玄の信州善光寺より本尊を遷し以て營むところ、後寶曆四年祝融に罹り、堂宇悉く烏有に歸す。安永年間再び工を起して舊形に従ひ造營、天明四年にして竣る。近年又修覆の敷を重ね、壯麗を加へたり。本堂の外、大佛、藥師堂、不動堂、鐘樓、山門等あり。



古來由緒に富める巨刹にして、古文書什寶等頗る多し。

酒折の宮 甲府停車場を距る二十餘町、西山梨郡里垣村、善光寺の東南にあり。社殿は丘陵の上に鎮座して、石磴一條之に通ひ、岡の上は森々たる雜樹茂生して、古色の蒼然たり、もと之れより四五町北方なる山間にあり。されば、今を尙石祠の跡を有し、里人之を古天神といふ。地は日本武尊が、景行天皇の四十年、東夷征討より凱旋の途上、軍を駐められたる行宮の址にして、古へ九條の道路は皆此處に起る。かの『新治

筑波をすぎて幾夜かねつる日々並べて夜には九重日には十日を』の詠を留めたる所なり。本居宣長の撰文、平田篤胤の書に係る酒折宮壽詞あり。又勤王の士山縣大貳の建てし碑あり。社に燧燹、唐鏡三面、刀負、烏布等を神寶として藏す。皆千年の古物たる事疑なし。

●王諸社 酒折の宮の南方、國道を距てたる西山梨郡國里村字國玉に在り。郷社にして大己貴命を祀る。成務天皇御宇の創立ともいひ、景行天皇四十一年日本武尊の創立なりともいふ。古人の三の宮にして、代々の國守の造營する所、美觀比少なかりしと元正十年兵火に罹りて烏有に歸す。現今の社殿は天正十一年の再興にして、構造を大に舊社に劣るといへり。毎年四月、十一月の亥の日には、大祭を行ひ神輿、中巨摩郡龍王村に渡御す。東御幸といふ。又三月、十一月の兩度には板垣村御室へ渡御あり、當日は賽人、族集して、境内途上雜沓を極む。

●要害山 甲府停車場を距る北方約半里、西山梨郡相川村上積翠寺組にあり。躑躅

ヶ崎城址を北に約二十町なり。山甚だ高からずと雖、帶那、西保、和田の山脈を圍らし、西南展ぐる所に躑躅崎を望み、山に松樹森々として茂り、崖の懸る溪湖、相川の源をなす。西南より登れば、腰郭、帶郭等の遺趾あり。牙城の長さ三十七間廣さ十九間、城背東より北に回る所を堀切跡といふ。大永元年今川氏の將福島正成當國に攻入りし時、武田信虎の夫人、會ま懷妊中にして、信玄は取りもなほさず、戦亂の中此處に生聲を擧げたるなり。

甲府より西方一里十町にして、

●龍王驛 あり。中巨摩郡役所々在地にして、舊龍王、龍王新町、龍王下河原、篠原等の小村を併せ、戸數約七百、人口三千餘を有す。中に、新町、下河原は、信濃往還に衝るが故に商舖擔を並ねて、稍々繁昌なり。扱は中央線停車場の西方數町、釜無川の東に位し、街路平坦にして、甲府韭崎の間に馬車の便具はれり。附近煙草の殖産盛んに、龍王煙草と稱するもの、中、『四つの水道』は香味殊に優れたり。此の他郡中、

玉播、豊、明穂、在家塚は煙草栽培の特許地にして、飯野村には、專賣局支所あり。一年の産額平均十萬圓に達す。

慈照寺 龍王町の字龍王にあり。曹洞宗に屬し、眞翁宗見和尚の開山にして、延徳元年諸角昌情菩提の爲めに武田信玄の草創する處なり。現在の堂宇は、本堂、庫裡、書院、開山堂、衆寮、鐘樓等にして、これ等と龍王の地とを圍りて石壁あり。構造恰も城廓の如し。本尊の釋迦像は行基僧正の作にして長け四尺の座像なり。

山縣大貳の墓 龍王停車場を去る八丁許、中巨摩郡龍王村字篠原組なる、金剛寺の内在り。明和二年八月、王室の式微を慨き、回天の志ある大貳の異圖發覺して、幕府の爲めに斃さる。明治十三年聖駕御巡幸の際、その功を嘉し給ひて、祭料を賜ひ、二十五年特に正四位を追贈せられ、三十一年更に從三位に陞叙せらる。

永岳寺 釜無川の西南、大草村字下條西割に在り。臨濟宗妙心寺派に屬し、文永十七年大覺禪師の草創なり。不動堂あり。明暦の頃信濃より此の地に來りし一老婆の死に

臨みて、秘藏せる弘法大師自筆の不動尊の影像を寄附せり。堂中に之を祀る。その靈驗あらたかなりとて遠近より來り賽するもの多し。本堂には穴山伊豆守信友の位牌を安置す。

穂見神社 大草村の西方なる旭村上條南割村の苗敷山の頂にあり。境域東西一里、南北二十六町程、賽路には一町毎に石標ありて、十三町目に石の華表、二十二町目に西行上人の腰掛石といふあり。二十五町にして社前に達す。現存するものは、樓門、神樂殿、拜殿、本殿等にして、又、古苔幾百年の色を帯べる西行上人の碑は本堂の傍にあり。郷社格にして神龜元年の草創、國建神を祀る。上古國建神、南山を開き、湖水を涸乾して、惡龍毒蛇の類を亡し、こゝに稻苗を栽えて米穀の繁殖を教ふ。山の名ある所以なりと傳ふ。往昔は非常の大社なりしも、一度天正年間の兵火に罹りて又舊に復する事能はずといふ。東麓里高の舊趾あり。

斐崎町 中央線龍王驛の次驛なり。町は須玉、釜無の二流の合する稍西北甲信往

晴信寄附の大薙刀は神寶として社に藏せらる。

窟観音 葦崎町、雲岸寺の境内に在り。七里岩の東に盡くる所、數丈の斷岸をなし中腹に龕くわんなして觀音を安置するもの之なり。又大士洞たいしだうともいふ。傍らに五百羅漢ごはくわんあり。洞の長さ六米、東西に通ず。傍らに石階せきかゐありて、七里岩頭に導くなり。岩上の眺望絶佳なり。

白糸瀑 北巨摩郡清哲村青木あきにあり。高さ十三丈幅二丈餘、避暑客の來遊するもの多し。附近青木温泉あり。

精進瀑 北巨摩郡新富村黒澤くろさわにあり。源を西方鳳凰山ほうわうざんに發し、石虚川いしとろがはに注ぐ。高さ七十丈、幅二丈五尺、層をなせる巨巖三段に激して落下するもの、壯觀を極む。

實相寺 信州往還の武里村宮脇みやわきより西方凡そ三十町、鳳凰山の麓ふもとに在り。地は北巨摩郡新富村字山高、寺はもと武田氏四世の孫一條忠頼ただよりの城趾じょうぢにして西は峯巒ほうらん重疊して迫り、東方釜無の長流ちやうりゆうを望み、又麓に大武川小武川のおほむかひ小流を圍らせり。日蓮宗に屬し

承和元年の創建さうわげんに係り、開山は實相院日應上人即ち波木井六郎實長が四世の孫伊豆守實氏まねうぢなり。一塔兩尊本跡の二士を以て本尊ほんそんとなし、別に四天王を祭る。現在の堂宇は

本堂、七面堂、鐘樓、書院、庫裡等每歲四五月の頃は花を訪ねて來るもの多し。

山高の櫻 前記實相寺の境内にあり。高さ五六丈幹の周圍約四丈、枝の廣さ、東西十五間、南北十七間、國內著名の大樹なり。地上より凡そ一丈、枝の八方に分れ、幹の自ら洞腹たうぶくをなせる所平坦へいたんにして疊二三疊を敷くべし。花は八重のうすくれなる、舊曆二月下旬より三月上旬まで、即ち穀雨の節より七八日前を開花の候とし、僻地なれとも花時に到れば四方より杖をひくもの多く、又樹上宴えんを張るの奇觀を見る事あり。

兼光『咲匂さきにほふ千本の花をひを本にあつめて見する心地こそすれ』
藪の湯温泉 上記實相寺より更に西方の山道二十餘町、大坊新田に在り。地は大武川の上流にして、四面山を以て圍まれ、温泉は溪上樹林の間に湧出す。鹽類泉にて無色透明、温度は四十二三度、火力を假りて浴用に供す。行路頗る不便なり。

梯瀧 北巨摩郡、駒城、菅原二村の界、尾白川の上流にあり。高さ三十六丈幅二丈四尺、源を鳳凰山に發して尾白川に注ぐ。瀑の下流約一里にして、仙娥の淵あり。溪湖飛沫の雪を亂る、又一奇觀なり。

日野春驛 日野春停車場所在地にして、北巨摩郡日野村地内新開と稱する七里岩上にあり。新開の地なるを以て、交通機關の如き、昨今漸く整ふが如きも、邊見、武川の二筋に通ずる要路なり。地に、邊見銀行、日野春倉庫等あり。戸數四百、人口二千五百を有す。

若神子驛 信州佐久郡に通ずる往還の一驛にして、日野春停車場を去る一里弱、須玉川を越えたる東方にあり。地に警察分署、郵便局、登記所等あり。

海岸寺 若神子驛より北方約二里、往還の東方津金村字寺入にあり。寺域廣濶にして東北に津金山を負ひ、老松古杉鬱乎として之を圍み、本堂、書院、客殿、庫裡、文庫、經堂、觀音堂、地藏堂、三尺坊、半僧坊、鐘樓等あり。觀音堂の背後には百體

の觀音石像を置けり。寺は臨濟宗に屬し、養老元年行基僧正の開基、天平九年聖武天皇の勅願ありて、光明殿三字の勅額を賜ひ、新羅三郎の當國に封せられしや、深く之を信仰し、時の住僧玄觀を扶けて堂宇を修輔す。天正年間織田氏の兵此地に入りしより一度荒廢に歸せしを、同十一年徳川家康寺領を寄附し、再興を計り、爾來京都妙心寺派に屬す。本尊の觀音菩薩は行基僧正の作にして、長二尺八寸の立像なり。寺は甲斐國第十三番の札所に當る。

花水阪 日野春驛北方約二十町に在り。日野春より臺ヶ原へ下る阪路の稱にして、又日野阪ともいふ。富嶽は遙かの東天にかゝり、釜無の清流、石に激し、白沫を飛ばしてその麓を過ぎ、眺望頗る勝れたり。

谷戸城趾 大泉村谷戸にあり。城地は逸見黒源太清光の舊跡にして、附近一帶は已に八ヶ岳の裾野なるが故、平城をなせる所に登れば、奥逸見一帶は一望に集まる。澁渠の類今尙多し、又時々土中より兵器の朽たるもの、米穀類の燒焦せるものを發見

す。附近八幡社は甲斐源太明神を稱し、清光の靈を合祀する所なり。西麓に高さ一丈に餘る五輪塔あり、清光が墓跡と稱す。

臺ヶ原驛 日野春驛より西方釜無川を距で、約一里、菅原社に在り。古來信州往還の要驛にして、佐久往還の若神子と伯仲して、韭崎に次ぐ名邑なりしかど、中央線開通して、旅客の皆な日野春を過ぐるに至り、漸く衰頹するが如し。街衢は、商業稍繁昌を呈せり。附近に産するところの米は所謂武川米と稱しその品質良好なり。地に警察分署、郵便局、登記所等あり。

白須松原 北巨摩郡菅原村白須地内に在り。七里岩の下菅原村と鳳來村とに跨り、廣茫凡そ百町歩、國內有數の御料林にして、竹の花、馬飼場、向林、兩松原、片松原等の稱あり。古松の鬱生せる間古來松茸の名産地にして初秋此の地を過ぐれば香氣鼻をつく。向を釜無の清流、白砂青松を縫ひて行く所、七里岩の景を負ひて風色殊に愛すべく、古來著名の勝區なり。松原の中に、白須の一つ松と稱する老樹あり。

大龍神社 北巨摩郡篠尾村に在り。老杉古松畫尙ほ暗く、社背に飛瀑の一條かゝるあり。瀑大ならざれとも、清冽を極めたり。又無數の細瀧は樹間に隠現し、試みに杖を以て附近の岩層を突けば、清水の淙として迸るあり。又峽北の一勝地なり。

小淵澤驛 日野春驛の次驛にして、中央線の將に信州に入らんとする境驛なり。戸數四百餘、人口二千五百、信州富士見驛北南の旅客貨物は多く此の地に集まり、人馬の往來も頻繁なれど、旅館の如き稀なり。地は八ヶ嶽裾野の中間にして、驛を去る數町にして字宮久保に北野天神あり。境内大樹茂り社殿の古色蒼然たるあり。周圍七尋といへる樺の大樹あり。又驛の東北一里半に古荒間の古戰場あり。天文九年村上勢と武田勢との合戦地にして、八ヶ岳祝野を横斷して、信州大門嶺に通ずる上棒道に沿へり。

白根山 北嶽を最高とし、間の嶽、南嶽の三大主峯及び幾多の支峯を總稱して白根山といふ。南巨摩郡の西北に聳え、中巨摩郡及び信濃、駿河の二國に跨り、最高峯北

方は海拔一萬〇二百十二尺、富岳に亞ぐの高山なり。山麓に蘆安村あり。登山者はこゝに獵夫を雇ひ、糧食を負ひ、山道を行きて霧焼と稱する樵夫小舎に達し、登る事更に三里、野呂川の水源に沿ひて、廣河原の小舎を過ぎ、オカムバ谷の左岸に出で、更に攀登して頂上に至る。絶嶺の眺望は、北に信飛の堺を走る山岳を望み、北に駒が嶽東北に鳳凰山、東南に地藏ヶ岳、野呂川の深溪、遙かの山麓を繞る。風色眞に偉大なり。絶頂に小詞あり。石を以て之を圍む。内に石造の鶏を藏すといふ。

鹽澤温泉 北巨摩郡の西端、小淵澤驛より釜無川を距てたる南方里餘の處にあり。地は鳳來村字下敷來石の西方なり。泉は山巖の間より湧出する冷泉にして、浴舎は岩室を穿ちたるもの、道路又甚だ不便にして、近傍農民樵夫等の外、來り浴するもの少し。

○南都留郡附近 谷村町を中心とせる南都留郡の一郡は中央東線路及び甲府盆地と全く地區を異にす。概して桂川の谷に沿ひて市街村落發達し、機業地として世に聞え

たり。南部は全く富士山裏裾野の地にして、山中湖、河口湖等あり。中央東線の大月驛より谷村町を経て吉田まで馬車鐵道あり。又富士行者の爲めに設けられたる吉田須走間の馬車鐵道あり。

谷村町 甲斐東部に於ける商業の中心地にして、その繁華は正に甲府市に亞げり。人口六千を有し、郡役所、區裁判所、稅務署、警察署、御料局出張所、及び、銀行に有信貯金支店、谷村商業等、又桂川の支流家中川を利用する谷村電燈、谷村委託等の株式會社あり。又盛大なる甲斐絹取引場あり。大月驛に下車したる富士登山者の通路に當るが故に、夏時は殊の外繁昌を呈す。民は多く養蠶を以て業とす。

田原の瀑 谷村町を距る七八町、桂村との界に在り。桂川の急流茲に來りて大瀑を作すものにして、兩岸の峭壁に水は怒號して飛下七丈幅三丈、水勢變々として、遠雷の如し。谷村より十日市場に至る間に一橋あり。瀑布を眺むるに佳なり。又瀑に面して觀瀑亭あり。地もと僻なりと雖、古來文人の來遊せるもの少からずといふ。又谷村町

の東方道志村には七瀑といひて、峽中第一の大瀑あり。源を瀧山に發して道志川に注ぐ。直下百尺幅四尺、惜むらくはその名未だ大に著れず。

●山中湖 富士八湖の一にして、大牛山、矢筈山、籠澤峠等を圍らして、中野村に屬す。周圍三里半、東西に長く南北に狭し。西岸に山中村の民家散在し、北岸に長池、東端に平野の小部落あり。湖の形牛に似たるものありとて古來又臥牛湖の名あり。湖中には鮪鯉多く、冬期は野鴨の來りて浮べるもの多し。里俗の傳ふる所によれば、早歲驛牛を湖中に驅り入れて、零すれば忽ちにして効驗ありといふ。

●西湖 南都留郡の西部西湖村にあり。東方なる河口湖とは小丘を隔てたれども、西八代郡なる精進湖とは、往昔相通せしものならんとの説あり。三代實錄に所謂剗海にして、東西一里餘、南北は之れより稍狹し。周圍三里十八町、富嶽の望に勝れたり。

武田氏の頃には西湖衆といふ者あり。土著の士にして國境を衛りたりき。

●河口湖 西の湖の東方にあり。富士八湖の中の最も大なるものにして、東西二里、

南北一里、周圍四里二十六町、南方裾野の彼方に富岳の時つあり、東西北の三方に山を圍らし、河口、大石、勝山、小立の諸村を湖岸に點在し、村民の湖魚を漁りて家計を立つるもの多し。湖中周遊の船あり。柔櫓旅客の逍遙に備ふ。湖形靴の如く、靴の甲に類せる所稍せばまり、こゝに一島嶼あり。鷓鴣島といふ。東岸に大盤石ありて湖中に斗出す。形乳房に酷似するを以て乳ヶ崎と稱す。又胞ヶ崎、産屋ヶ崎、子轉ヶ崎等の盤石ありて名勝をなす。就中産屋ヶ崎を以て富岳眺望の好適地となす。湖の古へはその尾東に流れて桂川に合し。河口の稱ありしが、貞觀の天災、沙石の之を塞斷したるなり。

●淺間神社 河口湖の東北岸なる河口村の南端にあり。貞觀七年十二月の創建にして木花開耶姬を祭る。此地の往古、八代郡に屬せし頃、勅ありて淺野明神祠を建て、官社に列せられたるものなりといふ。又、湖の南岸、湖中に突き出でたる小立村の東端に

妙法寺 あり。日蓮宗に屬し、皇國無双二十八祇大本尊の靈蹟なりといふ。現今の堂宇は、本堂、庫裡、鎮守堂、鐘樓にして、又本堂の背後には法華堂奥の院あり。境内廣く快濶なるが故に眺望殊に勝れ、西には十二ヶ岳、鬼ヶ岳、節刀ヶ岳、北には三峠山、三峯山、毛無山等の翠影を望み、顧みれば、富岳は吾と湖中にその影を浮べたるを思はしむ。上流の人々、或は外人等の避暑或は探勝に來るもの多し。

十二ヶ岳 西湖村の北方、東八代郡との界に、前掲の鬼ヶ岳、節刀ヶ岳を負ひて、十二の峻嶺屹々として聳てり。同村よりは登路約一里、頗る峻峻を極めたる丈けありて、絶嶺、直立五千百五十尺の上は、河口、西の諸湖を下瞰し、芙蓉の峯は掌上にあり。身の脱塵羽化せるを思ふ。東の山腹に、往昔役の小角が富士山登攀の行を修めたりといふ古蹟、行者堂あり。

御阪峠 河口村より、東八代郡金川に沿ひて黒駒へ行く國道、二郡の界にあり。峠は河口村に屬し、富士見三景の一なり。景行天皇の御代に、日本武尊、足柄より此の

嶺を越え給ひて甲斐に入るを、故に御阪といふか。山上に墨堡の跡あり。天正十年八月、北條左衛門佐氏忠、兵三千を率へて、味阪の城より黒駒へ押出すと古記に見えたるは之れなり。此處より富岳を背景としたる河口湖を望めば、玉蓮の華花湖面に落ちて、碧鏡波靜かにして、風色眞に畫圖も及ばず。

吉田 大月驛よりは谷村町を経て約五里、馬車鐵道の便あり。南都留郡瑞穂村に屬し、戸數八百、人口凡六千を有す。甲斐絹市場のある所にして、村内に尾垂鑛泉ありて、霞ヶ池の湯、乙女の湯等の稱あり。單純無色無味の冷泉なり。附近明見村に明見湖の小池あり。周圍三町二十五間、小なれども、亦富士八湖の一なり。湖に鮒鯉の類住めり。附近、月江寺、西方寺、福原寺、如來寺等あり。水は溢れて桂川に注ぐ。因に吉田は上下の二部に分れ、下吉田は即ち上述のものにして、上吉田は之れより南方更に一里餘にあり。

吉田口 即ち上吉田にして富士山の北口なり。驛は山麓の古驛にして戸數六百、人

口約四千を有し、人家には旅店宿坊最も多し。玉の如き清流、宿の中央を貫流し、近く諏訪の森の御料林あり。由來吉田口は、駿河の大宮と、須走と共に、富士登山路の主なるものにして、關東よりするものは多く此の北口によるを以て、夏季は宿を擧げて頗る繁昌を極む。富士山の甲斐に屬する部分は、東南麓坂より西北裂石に至る直徑十三里の山麓にして地質の變化、植物の分布の状態、史乘の古蹟を探らんには吉田口を最も適當とす。曾て日本武尊東夷征伐を終りて、此の地を過ぐる時、遙かに富嶽を拜し給ふ。今淺間社の背後なる塚はその遺蹟なりといふ。扱て、登山者は、垢離をなし輕装して強力を伴ひ、未明にして此處を發す。北口教聽の前を左折して、富士嶽神社に詣で、廣漠たる裾野を行く事一里半にして、洞窟二個あり。新胎内、舊胎内といふ。皆人體に模して、或は上頤、骨肋、或は盪石、胞衣石、腹帶等の名を有す。之れ淺間大神出現の古蹟なりと傳へたり。是れより道は漸く爪先上りとなり、尙進む事里餘、裾野の將に終らんとする、此の一帶を鈴ヶ原又は馬返しと稱す。石の鳥居を潜り、細逕

を二町許も行けば、先づ登嶽の第一歩、一合目なる大日如來といふに出づ。かくて樹木漸く森々として深密に、暗き森の底を行く事暫くにして、一合五勺目に、役小角が修法したりといふ定禪院の遺蹟あり。二合目には小室淺間神社あり。結構はさまで大ならざるも、山中第一の古社にして、内には國主武田信玄の祈願書を藏す。二合五勺目には林室といふあり。三合目には飯綱、秋葉、道了の三神を祀れる小祠あり。地も已に漸く高く、裾野を越えて遙かに別れ來し吉田の市街、又は過ぎ來し村落の點々散在せる、山は波の如くに起伏し、山中河口等の湖面も見ゆ。扱て四合目には大黒天を祀れり。針葉樹は稍疎らにして石楠の花、樅の林に匂ひて、駒鳥等あざやかになく。四合五勺目には、昔角行尊師が道法を修めたりといふ御座石あり。五合目には富士森稻荷明神を祀る。もはや雜生せる草も乏しく、地は燒石に焦砂の混せるが如く、歩々深く没して、漸く困難なり。之より右に十八町、小御岳神社あり。岩長姫命を祀る。大天狗曾て神明によりて此地に來り、天斧を揮て此の靈場を開くと傳へ、巨斧も巨刀

も今猶その内に存せり。再び五合目に返り、二三町にして經ヶ嶽及不淨ヶ嶽あり。前者は日蓮上人百日修法の道場といひて、自筆の名號六字を刻したる自然石あり。後者は登山者の不淨を穢ふ山伏の道場なり。六合五勺の穴小屋より七合五勺に至るまでは只磊塊たる火山礫或は熔岩あり。俗に加満岩又は鎌岩と稱するものなり。舊記によれば永正八年八月富士山鎌岩の燃ゆる事ありしなり。小祠あり、聖徳太子の像及銅馬を祀る。聖徳太子甲斐の黒駒に跨りて絶頂に登るとの口碑あり。登路これより益々峻岨にして殆ど一步に一憩を要す。七合五勺目に烏帽子岩あり。岩石の洞室を爲す内明神を祀る。その傍に行者の遺骨堂あり。昔富士講の元祖角行尊六世の行者食行身録尊師、享保十八年六月此處に定室を構へて三十一日間の斷食をなし、定に入る時は已に再び起たず、今、堂中に在るもの即ちその骨なり。かくして最早定路なく満山草木の色香を見る事能はず、只焦砂の深く足を没するあるのみ。真に崎嶇羊腸として白衣の人間の點々匍匐するが如し。八合目には四、五の石室あり。此處にて須走口の登路と

相會し、大行口と稱す。登山者多く此處に一宿す。宿を得たる夕、暮色の蒼然として來り、銀砂の色の青紫と移り行く時、試みに室外に立ちて宏大無際涯なる天地の夕に面せば、夕日は黄紅の雲を殘して西に沈み、無數の星光滿天にちらばめて、寂寥、陰森の氣空際より迫りて、身の悲しくも人界を遠かれるを思ふ。されど銀黄の大輪一度東天に差昇りて、隈なき光流を無極に放てば、世界は夜に蘇りて悉く銀光を浴び、大景再び人と面して宇宙の大靈に接するの思あらしむ。九合目に大圓石あり、裂けて五階をなし、白色にして滑かなり。太陽東海より出づれば、石面之と映じて金光燦然たり。時に彌陀三尊の景髣髴として之に浮ぶと傳ふ。是より路は奇岩の上怪石の下、即ち胸突八町の登攀にして、直ちに絶頂に達す。頂上の事は駿河の部に詳記したれば略す。歸途は走り道により、須臾にして五合目に至り、前路に合すべし。吉田の地は海拔四十尺を越え、他の登路の凡そ三四合目と高さを等しうし、尙富士の北麓は、裾野一面に樹木密生したる處多きが故、登路中最も易く、便利なるものなり。吉田郵便局

支局は富士山郵便局と稱して、八合目にあり。一日二回の書信小包の發送をなす。

富士嶽神社 福地村字上吉田村に在り。即ち宿の南端富士裾野に續く處なり。縣社

格にして、木花開耶姬を祭り、延暦七年の創建なり。當初は一小祠に過ぎざりしも漸

次改造して、今の社殿は末社二十餘座を有し頗る壯麗なり。社前の大華表には三國第

一山の大幅を掲ぐ、良恕親王の眞筆にして、寛文十三年秋元但馬守の寄するところな

り。

○御嶽と金峰山 甲州奇勝は御嶽を第一とす。紅葉の美殊に卓絶す。甲府の北方三

里餘の處に位し、路は荒川の谷に添ふ。新舊の二路あり。新路殊に山水の妙に富む。中央

線の甲府驛にて下車せば、三時間餘にして達すべし。金峯山はこの裏山の趣を成し、

高距二千九百九十米を有する高山なり。

金峯山脈の勝 甲斐の奇勝を述ぶるもの、先づ御嶽を數へて以て終れりとなし、奇

勝を之に限ると雖も、もと御嶽は金峯山脈の内容の一部を前面に表はしたるもの、年



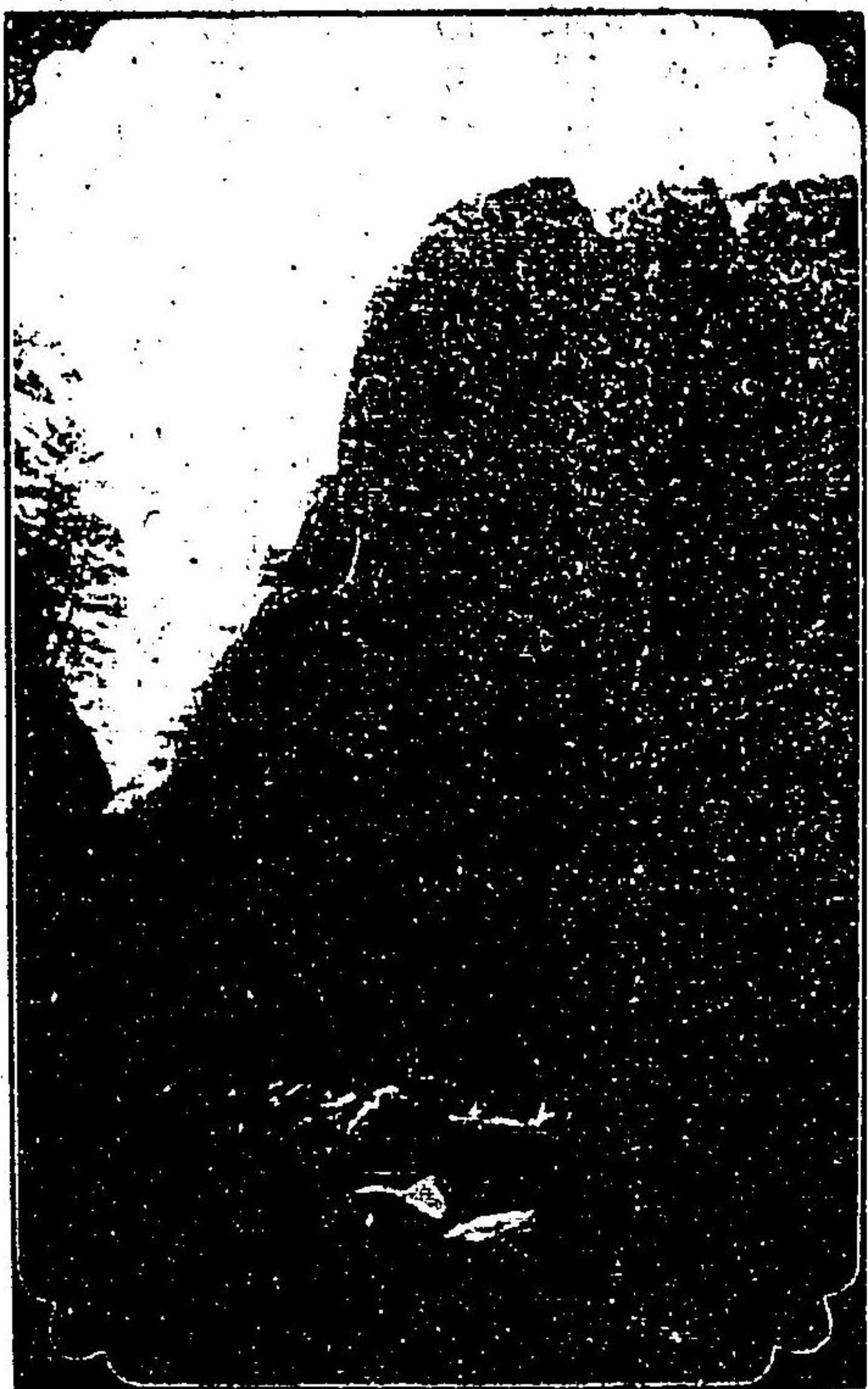
御嶽新道仙道

を經るに従ひ、御嶽の奥の
又奥、金峯山脈の勝は獨り
これに止まらずとて、人跡
の未だ稀なる、人煙の尙靡
かざる、自然の變化は深く
藏されて限なし。茲に御嶽
の勝を述ぶるに當り、近年
又新に仙境の繪卷物を展開

したる瑞牆山の奇勝を案内すべし。御嶽の勝は甲府市を去る北方三里二十餘町なる御
嶽山金櫻神社及びその附近と、所謂御嶽新道の途上、千代田村は北の溪澗に散在する
ものにして、尙一路ある下道は北巨摩郡の地を過ぎて之に入るものなり。然れども後
者は行路甚しく難澁にして、嶮は到底新道の及ぶ處に非ず。文化四年の頃、猪狩村の

農人長田圓右衛門なるもの、單身工を起し、實に三十七星霜を閲して、天保十四年、西山梨郡に登路を開く、之れ今の新道なり。今は新道につきて探勝を説くべし。扱て甲府市を發して武田古城趾の傍を過ぎ或は北の方鹽部、大宮村湯村温泉を過ぎ、更に北して羽黒村に至れば、道は漸く爪先上りとなり、老幹密葉の鬱蒼たる路を行く事十町にして和田峠の絶頂に達す。顧れば、甲府の全市は笛吹川の白蛇を横たへて東南に開け、晴れたる日、芙蓉の峰は雲霄に浮びて、玲瓏天半に群臨するが如し。峠を下る事數町、坂の半腹に高砂山あり。山甚だ高からずと雖、雪の如き花崗岩質の石砂に青松を飾り溪流の清冽麓を洗ひ、自ら御嶽の關門を任するに似たり。再び東南の風景を顧るべし。これを越ゆれば、一條の奔流突如として北より轟々走るあり、源を金峯に發する荒川之なり。地は千代田村に屬し、天神平といふ、路傍に天神の石籠あり。茶店につきて一憩し、行く事僅にして道は漸く狭く、これより荒川の沿岸約一里半、猪狩村までの間を昇仙峽の絶勝となす。唯見る白沫と碎け、碧潭となりて瀾々荒川の急流

まり、巖山の數十峯、連りてさながら二重の屏風の正に落ちかゝらむとするが如き處、古昔何十年の花崗岩の物凄き龜裂より生じたる翠松の點綴するありて、野の鹽原、豊の耶馬溪に比するも決して遜色ある事なきを思ふ。或は望鷹石の急湍に斗出せるあり、攀ぢて、天表に峙てる鷹巢山を望むべし。荒川の激流の潭をなすところ、長瀨といひ、對岸の山勢將に伏して人に逼らんとす。かくて兩岩漸く相蹙り、水石相擊つて奔騰し、不動瀑を作る。河身に磊塊せるもの、猿岩、富士岩あり。之等の大岩を屈曲して下るものに又輻輳瀧あり。附近の岩は益々奇にして層々重疊し、直裂、横折するもの、鏡石、五月雨岩、瀧見石、寒山拾得岩、駕拔岩、蝦蟇岩等あり。地に路傍一碑ありて前述圓右衛門の像と林鶴梁の贊とを刻す。景勝愈密に、峯は轉じ、溪は廻る。水聲の兩岸に響く事漸く烈し。巨巖の水を抜く百尺、羅漢山の前面に聳ゆるは覺圓峯なり。大小の斧劈、或は斜に縫ひ、或は直ちに龜裂する岩山の面に、奇怪なる松や楓や、生々點綴して、現に造化の妙と怪とを思はしむ。御嶽新道絶勝の中心なり。更に



峭立せる奇巖の下、突兀たる石道を辿れば、右方の巨巖倒まに首をのばして懸るところ、河中の一尖巖の突起するありて、偶然の抱擁、僅かに一寸餘の隙を以て危く之を支ふるが如く、今將に共に頼れて行人を壓

せんとするの下、洞門豁然として之を穿つ。有名なる石門なり。過ぐれば荒川の流れば一層の急瀬をなして搏擊山を動かすものあり。中に浮石あり。上面坦かにして二十人の座を有す。更に進みて、屏風岩、重筥岩、滑岩を眺めて西折すれば、前面の溪澗水珠を跳らすの前、一橋を架す。橋邊に至れば、一條の飛瀑、懸崖の中を直下して、

河床の深く鳴動するを覺ゆべし。高さ十丈幅一丈二尺、即ち昇仙橋、仙岨瀧なり。顧れば危ふき覺圓峯は左方遮雨岩と相對し、宛ら二巨溪の肩を昂げて將に闘はんとするが如し。此の邊り昇仙峽中最も奇を極むる所、山は即ち悉く巖の、重疊限りなし。仙岨瀧の側なる洞門を過ぐれば、奇景頓に終りて、猪狩の村落に入る。これより更に一群の人家を見るまでには約半里、宮本村御嶽に達す。旅舎數戸ありて蕎麥を名物とす。直ちに御嶽山金櫻神社に詣づべし。

御嶽山金櫻神社 中巨摩郡の北隅宮本村に在り。境内老杉多く、遙かに富岳を隱見す。社前に古櫻樹あり、金櫻と銘し、採つて社の名となす。礎は村の北端より通じ、階上樓門あり。金櫻神社四字の扁額を掲ぐ。正面なるは本社、左なるは神樂殿、寶庫、悉く金銀に五彩を交へて燦爛、殿宇の結構壯麗を極む。郷社格にして、日本武尊、少彥名命、素盞鳴尊を合祀す。往古は金峯山に鎮座せしもののみなりしが、雄略天皇十年此處に草創して、神靈を分つ。日本武尊東夷征討の際登山して國家鎮護を祈り

し。而して地は極めて僻遠、動もすれば食物を絶ち、金仙湯温泉の如きは、客は皆自ら炊がざるべからず。若し夫れ牧場なる牧夫の如きは米盡き、雨息まざる時は、山に葛球を堀り、鹽をなめて食を馬群と共にすといふ。又面白からずや。村は北巨摩郡の東北隅の大村にして、而も交通の隔絶するありて、仙境の鍵深く閉されたるが如き、黄塵萬丈裡に棲息せる都人士の如何に驚嘆に値するものに非ずや。此の勝の世に汎く紹介せらるに至りたるは、山梨日々新聞社小林氏の著『山梨縣案内』及び同縣々廳の出版にかゝる本縣名勝寫真帖『甲山峽水』の二書の致す所なり。

瑞牆山 北巨摩郡増富村の東北隅に在り。御嶽より荒川に沿ひて行けば壁頭先づ、天狗山我貴山の奇巖の突如として峙つを見る。峻坂瀧の尾坂を越ゆれば、樹林深く茂れるの中、窈々として水聲を聞く、名會利の一の瀧なり。これより瀧澤川を渡り六郎澤を過ぎ、猫坂峠の頂に到れば、巨巖あり。倚りて脚下に湧き來る白雲の中、太古日本武尊が東征の時、佩劍を置いて前路を案じたりと傳ふる上太刀岡下太刀岡、富岳の如

き黒富士を見るべし。峠を下れば、前面には畫の如き夢香山、翠昌山の嬌態座を列ぬるが如きあり。蟒蛇澤、湯川を涉り、右に鳥居峠の袴越を見て行けば、端座合掌の姿を現はせる法師岩、寶珠山、左手には天狗岩、樹形山、鉢石山等の諸山各奇態をなして峙つ。土地此處に少しく展げ人家の四五を見る。黒平なり。住者の姓の悉く藤原氏なるは——承久の役藤原氏亂を遁れて此處に隠るといふ傳説と併せて極めて興味ある事に屬す。山は再び之より重疊し、遊人は森々たる群山の麓を廻り猪澤川を涉り、山口岩、又は夫婦木の奇を見、更に木戸岩赤城岩を眺めて寒澤峠より黒平峠の頂に至る。こは之れ北中兩巨摩郡の分水嶺にして山嶺一小高原を形成し、夏去り秋訪る頃、柔草山風にさやぎ、花は色香の媚を競ひ、朗々見る大氣、蒼天に連り、眺め愈々遙かにして峽北の絶勝悉く雙眸に集まる。峠を下れば二里にして北巨摩の増富村に達す。地に金仙湯温泉あり。暗灰色の鹽を帯べる泉質なり。直ちに本溪川の溪谷に沿ひて遡れば、瑞牆山の支景漸く展げ、溪間突として高き劔ヶ峯、或は銚子岩、奇岩の上一場を架し

丸木橋といふ。峭立せる懸崖數百尺の自ら磴を作れる賽の河原、矢竹岩、碧潭の巖下より溢れて走る蒼龍洞、辨慶力石、玉簾の瀧、曲り淵、又は白雲溪、比翼岩、龜造ヶ淵等應接に遑あらず。本溪川の流の溪谷を出で、盡きんとする處、一大高原を展ぐ。地は古へ武田信玄の金鑛を開く處、坑夫の住家一千、娼家酒輔等軒を並べて優に峽北の名邑たりし金山新開地なり。當時を忍ぶべき遺物を、空しく残れる山河の荒蕪たると共に轉た旅人の心を正む。眺望は此處に一度全く開けて、瑞牆山、さては五麗山のやさしき、緑なる關伽平、落日銀に映するが如き御鷹巢山、大日時、蠶々として天をつくザン岩、之等の連山を圍らして、金峯山の高嶺遙かに白石をひきて雲に聳え、高山の青き松とところ／＼朝日に榮え、月光には女の如くふし沈む。山上に巨巖あり、遙かに望めば、堅城の峯頭に礎するが如し。登れば、巨巖は高さ二十五間、廣さ十八間、上部は凹狀なし、天空に向いて千古の水を湛ふ。山伏の如き聖岩、明玉の如き圓石、山腹の不毛を雉子の吹上といふ。弘法岩は、弘法大師の一度此地を見舞ひ

愛勝の念堪へ難かりしの紀念となす。又子負岩あり。之より北方十餘町にして釜無川の源に至る。満山の紅葉、秋は錦繡を織り、夕陽を漲らす。中に七級の飛瀑あり。此地眼界の變化、極まりなく、一步一景殆ど枚擧に遑あらず。附近の山中、水晶、重石を産するもの多く、又杉松栴等の良材に富めり。

●岩穴觀音 北巨摩郡増富村に在り。峽北三十三ヶ所第一番の觀世音なり。

○甲府市以南 釜無川富士川二流の灌漑する處にして、甲府盆地の南部に位し、最も豊饒なる地即ち是なり。道路は甲府より小井川を経て鰍澤町に達するものを駿州街道となし、中央線の汽車未だ成ざる時にありては、この道路は、交通主要路の富士川舟路の起點鰍澤町に至る爲め、旅客貨物相集り、頗る殷賑の趣を呈したりき。今、甲府市より鰍澤町まで輕便鐵道あり。平野の西方、釜無川の西に、駿信往還の一路南北に通し、韭崎町より來りて小笠原、青柳を経て鰍澤に至る。其他小金井より岐れて市川大門を経、一度東して又南し、精進、本栖の二湖の間を過ぎ、割石峠を経て駿河國に

入るの道路あり。鵜澤町以南は全く山地を成し、毛無山脈と白峯山脈との間を大なる峽谷をなして富士川流る。日蓮宗の巨刹身延山は其西岸にあり。

●義清神社 中巨摩郡西條村字西條に在り。甲府市の西南約半里に當る。地は古への城趾にして、社の背後に甲斐源氏の祖刑部三郎義清の墳墓あり。方十間を圍みて中央に墓碑を立つ。社は即ち、久安元年公の卒去するや、造營して之を奉祀する處、社前に一碑の立つありて、『いとしく埴生の小屋の淋しさに千鳥なくなり市川の里』といふ公の歌を刻す。地に境内、手植の櫻、片枝の松、池中に隻目の魚棲息す。

●長遠寺 馬車の小井川驛より西方半里程、釜無川の對岸鏡中條村にあり。法華宗に屬し、加賀美遠光の開基にして、建治三年戸田村に草創し、弘安三年今の地に遷したるもの、開山の日心上人は、もと大心房と號し、眞言宗に屬する名僧なりしが、建治年間日蓮上人に歸依し名を日心と改めたる人なり。堂宇二十一棟、結構凡て壯大、非常の古刹なり。地は村の西部、近來漸く繁昌に向へる村の民家の中にあり。村に、鏡中

條銀行、山梨製絲會社等あり。

●法善寺 鏡中條村の南方約半里三惠村、加賀美と藤田村との間にあり。寺の地はもと加賀美遠光の館址にして、南に通ずる一路は、東方釜無川の渡船に接し、西は小笠原村の官道に通ず。古義眞言宗に屬し、紀伊國高野山如意輪寺の末寺なり。弘仁二年僧空海の開山にして、又後年加賀美遠光が靈夢を感じて、承久三年再建する處なり。金堂には本尊の阿彌陀佛を安置し、御影堂に弘法大師自筆の影像を掲げたり。

●小笠原宿 韭崎より市川大門を経て、青柳、鵜澤、切石、下山等及び駿州岩淵方面に出づる官道の要衝に當り、警察分署、郵便局、登記所等ありて郡中屈指の繁昌を呈せり。

●三輪神社 小笠原宿より官道を北に進めば、宿のはづれにあり。地は大井村字下宮地村にして、又神部神社と稱す。祭神は大己貴命、社は垂仁天皇の御宇、大和國大三輪神社より遷し奉りしもの、毎年四月の卯の日には神輿渡御の式ありて、里人之を西

の御幸といふ。現今の祭典は唯社典に於てのみ行へども、維新前までは、行列には國守より武器兵杖を賜ひ、神輿は小笠原宿の御所庭に駐まりて、神符献上の式を行ひ、頗る盛況を極めたりといふ。

弘法大師古蹟 小笠原宿の北、荊澤宿の東方八町五明村字大師村に在り。地に一株の柏樹ありて、往昔弘法大師が、護摩壇の具足を埋めたる處なりと言傳ふ。甲陽隨筆に、『中込氏なるもの、屋敷の池に鉦一枚あり、大師用ふる處の具なり。若し之を池中より出す時は水清からず』字清水村には又一清泉ありて獨鈷水と稱す。又弘法大師古蹟の一と傳へたり。

傳嗣院 少しく官道を歸りて、小笠原宿より西方柿平を経て、柳村字上宮地村に到れば、西方山を重疊せしめ、少しく距たりたる一の瀬山なる妙了堂と並びて壯觀を森林の上に隠見せしむ。寺は曹洞宗州安派の本山にして、寺領六石を有し、後柏原院の文龜年中三輪の神主今澤貞重家職を其子右近三郎に譲り、佛法に歸依し、後茅屋和尚

に此の山を興へて、寺を建て、師なる祖鑑和尚を聘して開山とす。此寺もとは前記三輪神社の山宮なるが故に、神山とも稱す。

椿城址 傳嗣院の南方半里弱、野々瀬村字上野村、妙了堂の近傍にあり。小笠原長經の七男上野盛長の城址にして、その椿と稱するは山中椿の花の紅白に富めるが故なり。墟は山の半腹に位し、北方一の瀬川を望み、三方の地全く展けたり。近傍二三町の間には、城壘、濠湟の跡依然として舊の如く、本丸には石祠及び五輪塔十四五基あり。北面する方は數十丈の絶壁崩壊し、土を穿てば、今猶ほ古瓦の碎片を發見すべし。

穗美神社 柳村なる傳嗣院より西方里餘、柳村字高尾村、高尾山の山腹に在りて、傾斜の中に境内廣く、就中六本松は、南東の二方打開きて、眺望殊に優れたり。社は御社格にして、國建神を祀る。これ鷹尾山權現と稱せしものにして、享保三年の洪漲に、此の山腹崩壊して、古碑の土手より露出せるものなり。面に穗見神社と刻し、左

側に文治三云々の文字ありしを以て、里人之を穂見神社の舊蹟なりとし、新に社殿を營みて之を祀る。毎歳十一月朔日の祭典には、授福の神として、參詣者遠近より雲集す。殊に夜詣りと稱して階路を昇降するもの多く、燈火の樹間に隠顯するもの亦一美觀なり。社内に飛騨甚五郎の作にかゝる木馬を藏せり。

御救使川 中巨摩郡の中央なる蘆倉山の源を發し、東流して源村有野に至つて二支となり、中に御影、百田の二村を挟みて釜無川に入る。長さ五里餘、有野以東北方の一支は河幅濶く、平素は廣き干石の磧となりて、殆ど水を見ずと雖、夏日の大雨一度來れば、河水俄然として激怒をなし、田園の害須臾にして止むべからず。古來治水の事を司らしむる爲、幾度か此の地に勅使を下したる事あるを以て、河の名とせり。爾後武田晴信、大ひに河川の修築に努め、巨石を碎き、堰堤を造りて、河水を整へ、汎濫を禦ぐに至れり。故にその堤防を稱して里人は將棋頭と稱す。又南方の一支は古來原七郷と稱して水利殊に乏しき十四ヶ村の、その疎通を水田の開拓に努むる事、殆

ど三百年、然れども作業の困難なる、百歳今にその趣きを同くせり。明治三十八年八月、疏水組合を設け、傳來の宿志を以て作業を起すに至れり。川の全流域の落差二千七百尺、水力五萬馬力を得るに難からずといふ。

須澤城址 御救使川の北岸、駿信往還より西方約半里、中巨摩郡蘆安村に在り。往昔、御救使十郎、鹽谷三郎の二人之れに據り、又高師直の弟師冬の據城となしたるものなりと傳ふ。

義丹瀧 中巨摩郡の南端、平林村にあり。山梨輕便鐵道南湖驛より南方約二里、瀧の高さ十丈幅一丈二尺、又近く拘留村瀧あり。高さ六丈幅一丈二尺、共に水源を鴉森官林に發す。又無名瀧あり。高さ三丈幅一丈、西山に水源を發し、義丹と共に利根川に注ぎ、拘留村瀧は下流戸川に注ぐ。

淺原の長橋 山梨輕便鐵道の小井川驛より釜無の本流を越えて三輕家驛に至る間に架せり。木造黒塗の粗末なるものなれども、轟々たる釜無の碧流白砂を縫ひて走る幾

條、四顧山骨の崑々たるもの、急河の上流下流、遠くそれ等の山裾に消え、東南晴天に富岳の之等の上に壓し立てるを見るべし。末遠くして見はてもつかぬ長橋の上を馬車はゆるやかに、轍の音を奔流の響にまじへて行くに、小さき馬車、長き橋、荒漠たる河原、碧色全く人界の色にあらぬ激流、突兀たる巒影の相迫れる、真に凄まじき自然の半面に對するの思あり。若し、旅人一汽車を遅れて、長橋、月を仰ぐに至らんか、黒き山影をはなれて昇る銀光の鏡は、美にあらず慈悲にあらず、只之れ恐嚇、凄慘の氣の身に沁み入るを覺ゆるのみ。さて、馬車は南湖の宿場を過ぎて、増穂橋を渡れば直ちに

青柳の宿に入る。古來駿信往還の衝に當り、著名の驛邑たり。豪商數多く、商業殖産亦盛況を極めたり。

南明寺 これより西北約半里にあり。増穂社字小林區。寺は曹洞宗に屬し、能登永光寺の末派にして、開山は明峯素哲和尚、創建は正慶二年大井明春に依る。徳川家康

の再度當國を巡視せし時、當寺に宿し、舞臺一棟を造營せしめ、堂内に御座の間を存せしも、延享二年火災に罹り、今は家康の靈廟のみを存せり。本堂には明春の位牌を安置し、墓は堂後にありて、面に南明寺殿親岩淨陸居士と刻す。

市川大門町 南巨摩郡の南湖、五明、青柳等を富士川と距て相對する一市街にして、西八代郡の北端、蘆川の西の畔に位す。此の地甲府を去る南方約四里、戸數一千五百人口六千餘、人家稠密、商業隆盛にして、古來又、青島の庄といひて製紙の業の盛んなる處、所謂肌吉の糊入紙を名産とす。一郡二十二村の首腦たる名邑にして、西八代郡役所、區裁判所出張所、警察署、郵便局、登記所等の外、納税銀行その他、二二三の銀行會社もあり。また地は南に山を負ひ、北方は甲府に續く釜無富士笛吹流域の盆地を望み、笛吹、釜無は町の北方に於て相合し、蘆川亦邑の中央を流れて之に注ぎ合す。附近一帯の地は灌漑に便にして、又水力發電所の設備あり。

蘆川 源を西八代郡上九一色村に發し、河流長大ならざるも傾斜甚だ急なるが故に、

水力に適す。明治三十二年一月、甲府電力株式會社は、之に發電所を設置し、更に三十八年中、資金を増し事業を擴張したる爲、今は新舊二個の發電所より供給するもの、凡千六十馬力、附近五六里四方の農家の低き軒の中に白き笠の電燈を見るもの珍しからず。

表門神社 上野村字御陣場にあり。市川大門町の東方、又御崎明神、御陣場御宮と稱す。孝靈天皇二年の草創にして、倉稻魂命、天照大神、瓊杵尊を合祀する郷社なり。天正十年徳川家康會て境内に陣所を設けたるが故に此の名を残すといふ。毎歲三月三日、十一月上旬の酉を以て大神事を行ひ、逸見冠者義清此處に館邸を有せし頃の古例にならひ、酉の日の神樂、神輿を迎へ、諸人群れ参りて、賑ひ夥し。

薬王寺 古義眞言宗に屬し、高野山金剛頂院の末寺にして、開山を尊證阿闍梨となす。古來當國眞言の檀林中、その首位を占め、代々武田氏の祈願所なりしといふ。境内に東照宮の祠あり、寺の鎮守神にして、天正十年徳川家康市川口に在陣の時、屢々

當時に祈願せし事あるに基くといふ。逍遙軒の畫きたる十二天の像、川中島信玄謙信合戦の古圖等を什寶とす。

一條氏砦址 上野村の西北、諏訪の森に在り。南方は山によりて民家に續き、北は三層の斷崖を受けて壘を自然に求め、或は馬場門前、物見塚等の名を存す。武田晴信の舍弟一條右衛門太夫信龍の構へたる砦の跡にして、阪路の上には義光明神祠あり。
平鹽岡 市川大門町の南方、四尾連湖への途上にあり。松一帶に原をなし丘岡の上に平鹽寺あり。建治より永仁の頃までは夢想國師之に居りしが、今は全く廢寺となれり。明の完濂が撰にかゝる國師の碑文に、『依平鹽教院以居、後更名疎石字夢想』とあり。又刑部三郎義清朝臣の館址にして市川の森ともいふ。地の傍に松を饒らせる熊野權現の祠あり。御馬冷場、古井等今尙存せり。南方の畑中なる巨石を朝臣の墓なりと傳ふ。東方に溫泉あり。鹽澤の湯と稱し、その東には湯の洞あり。寺の内、今に琵琶池といひて、國師の手になれるものあり。

●●●● 四尾連湖 市川大門町の東南一里、蛾ヶ嶽の頂きに在り。富士八湖の一にして、その形は正圓、直徑凡そ十三町、周圍約一里、鯉鮒等の魚類多く、春冬、鴨雁等の水禽多く群れ來り、里人こぞつて網を投じ之を捕ふ。蛾ヶ嶽の半腹に武田氏烽火臺の址あり。蛾ヶ嶽の山容は蜀の蛾眉山に似るといふ。

●●●● 淺間神社 市川大門町の南方高田村字高田宿の南端に在り。境内、古松、老杉鬱蒼として晝も尙暗く、中央に本殿拜殿、正面には樓門、周圍に攝社末社等總て四十八座あり。樓門の額は良純親王の筆、本殿の額は御勅額なりといはる。村社格にして、木花咲耶姫命を祀り、貞觀年中の創建なりと傳ふ。境地幽靜、内に弓削塚、御詞の松、野中清水等の古蹟あり。

●●●● 千波ヶ瀧 市川大門町より蘆川に沿ひて東南に進めば、川浦、榎田を経て畑熊に至る。水源地下九一色村なり。行程約一里、瀧は直下四十五丈幅五丈の大瀑、流れて蘆川に注げり。その雄大壯觀人をして正視する事能はざらしむ。

●●●● 鰍澤町 輕便鐵道によれば、青柳宿より一川を距て、隣りし、富士の本流を距て、市川大門町と南北相對する古來の名邑なり。南巨摩郡の東北端富士河の西岸にして、甲府を距る約五里弱、市街は流れに沿ひて南北に延び、戸數一千、人口五千五百餘を有し、南巨摩郡役所、區裁判所、警察署等の外、御料局出張所、郵便局、市川銀行、秋山銀行、甲合資會社（運送）、富士川運輸合資、等あり。地は恰も甲斐大盆地南方の咽喉を扼するもの、徳川家康が、富士川開鑿の事を角倉了以に托して、大ひにその修築を致してより、明治の近頃に至るまでは、駿河岩淵停車場に至る通船の發着所として最も重要なる地點なりしも、中央線開通以來は、爾來の交通も殆どその用の半ばをなさず。従つて貨物の集數も舊の如くはあらず。唯、身延參詣の要路として、東西河内の咽喉として、尙峽南第一の市街たるを失はず。

●●●● 妙法寺 鰍澤町の西北約一里、穂積村字小室村の西北端にあり。日蓮宗の古刹にして日蓮上人の舊跡たり。文永十二年日蓮上人、身延山に赴くの途次、僧善智なる者と

佛法の論議をなし、善智克く勝つ能はず、上人に服し、徒弟となりて名を日傳と改む。即ち當寺を草創す。堂中に法論石あり。之れ、當時日蓮上人の跣座して法を説くの跡なり。又境内に蛭石あり。上人、佛力をかりて蛭の人血を吸ふを禁じたるの遺蹟となす。本堂に日傳手刻の日蓮像を安置す。

源氏山 妙法寺附近より西方約三里餘、五開村字十谷村の北に聳え、一里餘にして巔に達す。頂に古城址あり。今尙二の廓、馬賣場等の名を存し、近年まで古刀、古鏃等の武器を發掘せしといふ。曾て新羅三郎義光の占據する處なりといへども疑はし。

道路峻峻にして、地の遠きが故に行く者甚稀なり。されど之より山を越ゆれば直ちに早川の岸に出で、大原野、新倉を経て川に沿ひて北すれば

湯島、奈良田 の兩温泉に至るを得べし。郡中第一の僻地にして、維新後數年までは、全く宇内千年の文明を知らず。山一つ越えたる隣村の言語を解せず、松皮を著して、甘藷をのみ食し居るものありたりといふ程なり。湯島は、早川の上流西岸にあり。温

度は華氏の五十五度内外、單純冷泉にて微白色、村に接する山脚より湧出す。天正年中徳川家康の小林村なる南明寺に宿せし頃、屢々此に浴して英氣を養ひたりといふ。奈良田は湯島を距る北方二十五町、字西川上の田圃より湧出する鹽類泉にして淡江色半透明なり。共に西山村に屬し、又西山の温泉、山の湯とも稱す。道路は狹隘にして、甚しく峻悪なれども、強力と稱するものあり、樽を負ひ、婦女子老幼は之に腰かけて行く便利あり。都人士最も稀に、唯時々外人の徒歩して來り浴するものあり。浴槽に乏しく多くは溪間の岩窟に浴するなり。

慈觀寺 猷澤町より西岸富士川に沿ひて進み、鬼島、箱原を徑て、西島に至れば、字道村に慈觀寺あり。明徳四年行基僧正の開基、創建に係り、本尊には、同僧正一刀三禮の作なる聖觀世音を安置す。寺は山腹にありて、羊腸の阪路之に通じたり。壯大なる本堂と、庫裡、方丈、經藏等あり、皆宋の天章山寺に模したるものなりとい

ふ。鐵玄版大藏經全部、大般若經六百卷、玄界和尚古錦欄の袈裟等を什寶の重なるものとす。更に東方、芝草、木船を徑れば、古關村瀬戸に

方外院 あり。地は恰も右左口往還にあたり、市川大門町の東南三里餘なり。曹洞

宗に屬し、文永年間の草創にして、本堂には子安觀音の像を安置す。之れより直ちに東して精進、本栖の二湖を訪ふべし。即ち東すれば途上

八阪峠 の阪路を過ぐ。溪流をわたる事十數回、崎嶇羊腸たる道の幾つゞき、或は

危橋、或は絶壁、景趣の深邃にして密なる真に世塵を擺脫す。その嶺は即ち海拔五千

尺の釋迦岳にして、山頂に奄然法師が釋迦の尊像をまつりたる舊址ありて礎石今尙存

せり。峠を又阿難阪とよぶは、下蘆川村の北なる迦葉阪より來りたるものならむ。峠

を下れば眼下直ちに

精進湖 を展く。湖は富士八湖の一にして、甲府、大月、或は市川大門町より行く

を最も便とす。甲府よりは上九一色村古關まで七里三十二町、阿難阪登り十八町なり。

大月よりは谷村、下吉田、船津より河口、長濱を経て鳥居阪を越え、青木ヶ原を過ぐ

れば、乃ち精進湖なり。青木ヶ原は富士山麓に於ける一大森林にして、樹長整一、遠

く望めば、真に一條の青帶、秀嶺の腰を纏へるが如し。湖は又一に石花湖と稱し、往

古は西湖と同一なりしかども、貞觀六年富士山噴火の時、中斷して二分せしものなら

んと憶測さる。東西一里、南北一里弱、富岳は之が東南に聳てり。湖水の清澄なる、

天晴るゝの日、風なき波上に俯して湖底を見れば、鮎、鮠の類點々指摘すべし。美味

膳に上すべく、又湖上舟を浮べて、倒影岳上に遊ぶべし。湖畔ホテルあり、旅館あり。

而も近年外人の來遊殊に多く、又冬季間は結氷の一大水晶盤、上に氷滑をなすもの

年々増加す。

本栖湖 精進湖より北して鳥帽子岳の東麓を回れば、古關村本栖にあり。湖は北に

城山、鳥帽子嶽、南は金山、龍嶽、兩岳を経て直ちに駿甲の界なり。方一里、周圍三

里五町、稍南北に長し。往昔は此處に甲駿間の關門を置きたりといふ。天正の年織田

信長、凱旋の時此處に宿する事ありと信長記に出づ。

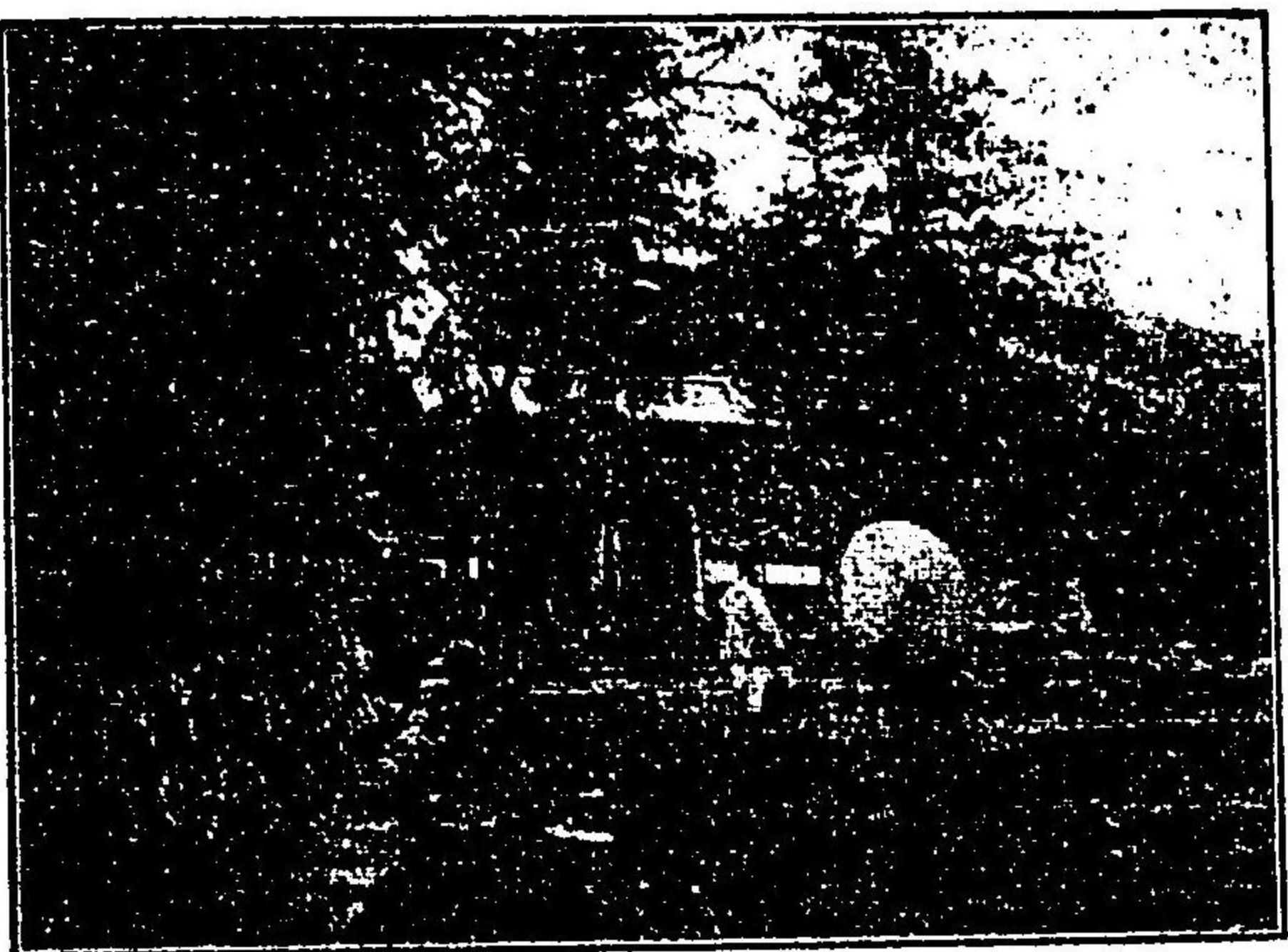
下部温泉 富里村字下部にあり。郡中著名の温泉にして、地は群山峭立の中、東に河流を帯び、西北は山麓を負ふ。浴舎七八戸あり。道路甚だ不便なれども、温泉の清潔と效驗の著しきによりて、浴客一ヶ年平均二萬五千人を下らずといふ。鵜澤町よりは舟によりて福井下山に下り、對岸の八木澤より、常葉川に沿ひて山に入るべし。

大聖寺 南巨摩郡八日市場村の富士川沿岸にあり。眞言宗に屬し、醍醐の報恩院の末寺なり。新羅三郎義光の本願によりて大治二年の早創なり。本尊の不動明王は嵯峨天皇の御宇、弘法大師に勅を下して手刻せしめ、清涼殿に安置しありしを、承安元年加賀美遠光禁中守護の功によりて之を賜はり、即ち此に遷して、長光院大聖不動明王寺と號す。寺内に義光、遠光の木像をまつり、又義光の佩刀、晴信の太刀を藏す。

身延山參詣路 日蓮宗の總本山たる身延山久遠寺は獨り甲斐三絶中のものたるのみならず、苟くも日蓮宗の信徒たるものは、道の遠近を顧みずして、一度は參詣する所、また參詣すべき大靈場なり。東京より之に至

る里程は悉く幾種の交通機關ありて、大なる不便を感じる事なし。先づ、甲府より驛前の輕便鐵道に乗じて町の西南端なる千秋橋を渡り、中巨摩郡の四條、小井川を経て、釜無川に架せる前述、淺原の長橋を渡り、川の西岸に沿ひて、藤田南湖等を経て、南巨摩郡に入り、青柳の増穂橋を渡り、直ちに鵜澤に至る。但し鵜澤に至る間、小井川より分れて、花輪、藤巻を経て、笛吹川に架せる桃林橋を渡りて、西八代郡の上野村に入り、蘆川を超えて市川の大門町に至り、高田より、富士川の青柳橋を渡りて、同じき宿を過ぎ、鵜澤に入るの道なれども、小井川以南青柳までは、前者は後者に比して遙かに十五町餘の捷徑にて、而も甲府より直通の馬車ありて一日三十回餘の往來あるが故、無論之によるものなよしとす。さて、鵜澤より富士川を降る船は、恰も西八代、南二巨摩二郡の界を行くものにして、町の南端なる舟場と稱する處に客を待てり。身延山までは舟行約五里、之れも陸上舟によらざるものあれども、他に目的のなき限り、富士川の勝も、行程の時間も、無論舟によるをよしとす。鵜澤を發する船は毎日數回あれど、黎明に發する時間船といふに乗せば最も早く行く事を得べし。町より下る事三里にして下山、次で八日市場を過ぐれば忽ちにして身延山の麓に出で、波木井に至りて船を下る。(途上の事は、別項富士川に就て見るべし。)

身延山久遠寺 富士川の通船より、川の西岸なる波木井に上れば、一里半弱の阪路を経て久遠寺に達す。途上、西北方なる山上は波木井城即ち峰ヶ城の趾なり。大永年



身延の總門

中波木井義實讒を蒙りて武田信虎の爲に毒殺さると身延鏡に見ゆるは之なり。波木井川に沿て身延村の入口に至れば『開會關』の三字を録せる大額を掲ぐる總門あり。門の内は老松列をなして生茂り左側の丘上に淡島祖師堂あり。二町にして大平橋を渡れば、左右は商家軒を並ねて一市街をなす。身延村なり。字狐宿、下町、中町、上町を過ぎて三門跡より右に折れ、三百八十三級の石磴を登り盡せば、正面に祖師堂、眞骨堂、位牌堂の三堂、甍を列ぬ。傍らに鐘樓、寶淨龕、諸侯納骨堂、水明樓、奥殿、大庫裡その他支坊の數の枚擧に追あらざるなり。正面石階の下を左に折れて行く事十

五町許、西ヶ谷田代には日蓮上人の塔あり、傍らに八角堂、廟所等を設く。廟所は即

ち日蓮上人が草庵を始めて結びたる處なり。文永十一年甲戌五月、日蓮上人は南部六實長の請に應じ、始めて入山して西谷に一庵を營み、居る事數年、弘安四年に到り別に一堂を構へて身延山久遠寺と號す。后文明六年には第十一世日朝上人、寺を此地に遷して大伽藍を建立す。山間に入谷あり、之に堂塔の無數星散す。鶯谷、西谷、東谷、醍醐谷、蓮華谷、金剛谷、中谷、南谷之なり。寺域凡方七十八町、創建以來火災に罹る事前後七回に及ぶと雖、堂塔伽藍今尙壯觀を存して、金碧の燦爛たる、山色の清淨深邃、眞に日蓮宗總本山の大靈場たるに耻ぢず。今方に山門の再建中にあれば、工成るの日は山内更に大壯觀を加ふべし。往古武田信玄書をよせて、國中諸寺の進退を許し、又豊臣秀吉の姉、瑞龍院殿日秀は本宗に歸依して堂塔の修増をなし、豊臣、加藤、淺野の封國たりし時も、凡て保護の到らざるなく、元録六年には日脱、同十四年には日省寶永三年には日享の如き、紫衣して參内する事を許され、正徳元年には御祈禱所たる事を仰出さる。毎歲、十月十二日、十三日の兩日を以て、本堂に大法會を

等の諸堂を建立寄附せしものなりと傳ふ。隣村和田村に日遠の隠棲せしといふ草庵の舊趾、時雨澤あり。養珠院殿「來て見れば袖の涙の時雨澤なき遠き日の跡と思へば」南部城址 南巨摩郡陸合村南部にあり。南部三郎光行の館趾にして、今村の西を城山といひ、竹林中の稍平坦なる處を本丸の跡なりといふ。村の南端に木戸と稱する字あり。更にその北を城の澤といひ、富士川にて沿ひたる處に佛刹圓藏院なり。之れを城主穴山信友の法號なれば、此の邊一帶はその城地なりしならん。

内船寺 西八代郡の南部なる榮村字内船に在り。寺は村落の北に當り、富士の急流を前にし、西南、篠井山の峻嶺をその上に見る。寺地の中央に本堂、開山堂、七面堂鬼子母神堂、題目堂、鐘樓、庫裡あり。本堂には題目寶塔を安置して本尊とし、又釋迦佛、多寶佛、四菩薩、二大士の像を安す。寺門の傍には古木の枝垂櫻、牡丹等多し。寺は日蓮宗に屬し、弘長元年四條金吾頼基の開基、日頼上人の開山なり。

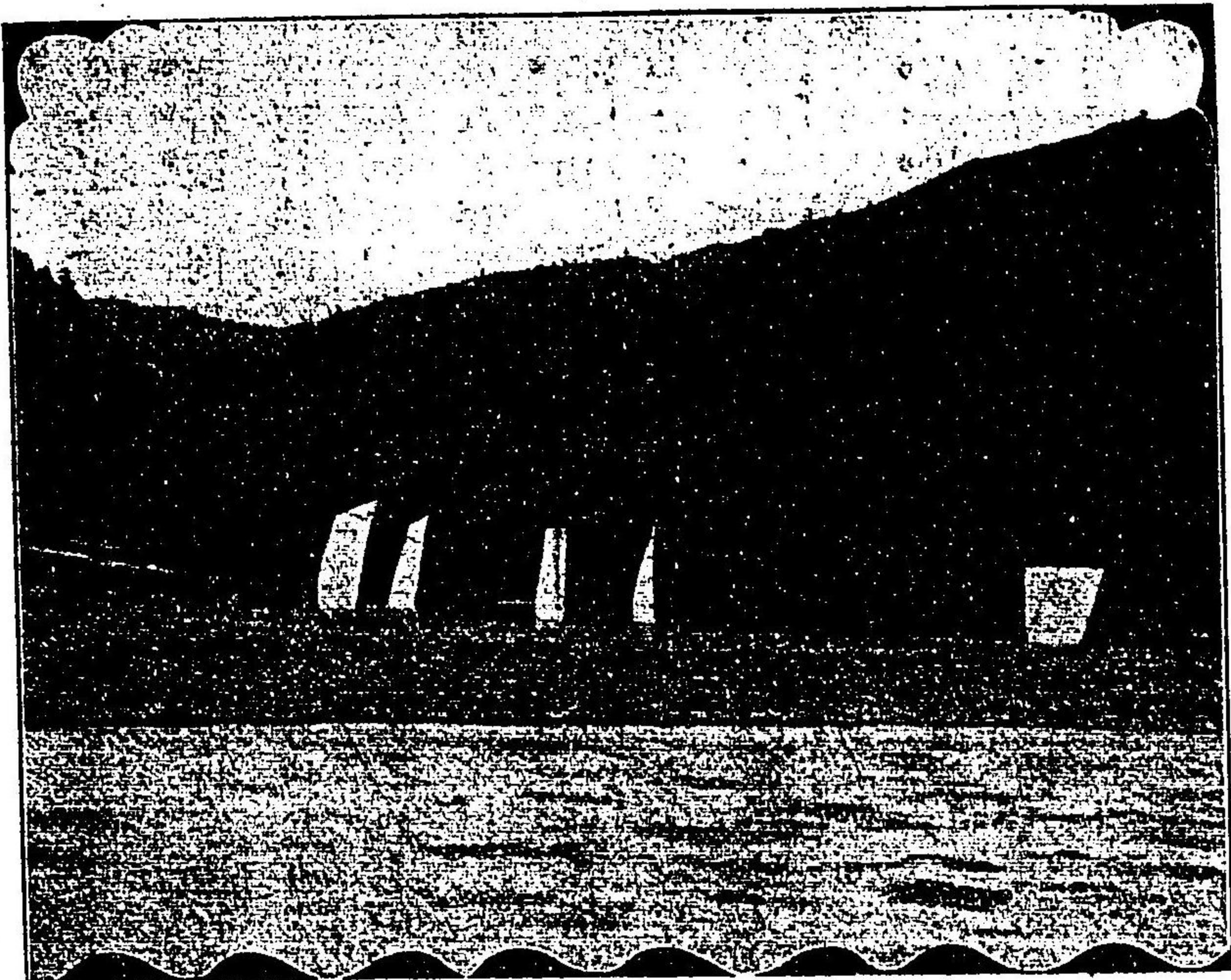
釜口温泉 同村にあり。無色無味の單純冷泉にして、老樞の樹根より涌出す。道路

不便、地の邊僻なるが故に浴客甚少し。

西行阪 南巨摩郡の最南端、萬澤村字西行にあり。阪路の曲折する所、古松一株あり。西行法師の曾て草庵を結びたる地なりと傳ふ。古へは阪の東山より、富岳を遠望するに優れて、富士見三景の一に數へられしが、今は石切越の新道ありて、阪は只その名のみを存す。

白鳥山 萬澤村の南端、駿州興津へ通ふ街道の東に聳てる山なり。即ち甲駿二國の界をなす。山上に陣場、太鼓打場等の字を存するは、永録十二年武田晴信が、駿州討ちの時、物見をおきし處なり。北の麓には又、御屋敷なる字によりて、昔時國境の守護たりし萬澤君泰の館址なるものあり。

富士川 東山梨、東八代二郡を貫流して南下し來る笛吹川、北巨摩、中巨摩二郡を貫流して南下し來る釜無川、之れに西八代郡の東北部より西流し來る蘆川を、同郡市川大門町近傍に合せ、茲に宇内三急の大流を形成するもの即ち富士川なり。その猷澤



以南は、甲府一帯につらく盆地と
 分れ、岩石多き峽流をなして、赤
 石、毛無二山脈の間を流れて、駿
 河國岩淵に至りて駿河灣に注入
 ものなり。慶長十一年中京都の人
 角倉了以、幕府の命により數年を
 費して、稍く、危岩嶮礁の主なる
 ものを除き、漸く舟行の便のみは
 得たれど、鵜澤の河底にして、已
 に海拔七百六十八尺といへば、そ
 の流れは全く瀧と別つべからず。
 舟は縁高く、底は只一枚の薄板を

以て張り、その形状、恰も薄き一片の花弁の如く、下りは彼の京の保津川の如く、一
 本の竿を一挺の舵との技により、上りは船頭二個の圓き穴に太き竿を貫き、數人の船
 子は數町の長き綱を肩にして曳く。船客と船子等とは全くその所在を異にするなり。
 鵜澤より岩淵まで十八里の水上、下りは僅かに八時間、上りは優に數日を費すべし。鵜
 澤より二里にして、靜川村切石に至る。途上五開村箱原に、箱原天神といひて、川岸
 に斗出せる岩上に鎮座せる一祠あり。近傍は青松鬱蒼として、急湍下を走り、風色奇
 とすべし。之を天神岩と稱し、又古へは舟行の一難處たりし天神ヶ瀧、俵石として數俵
 の俵を積み重ねたるが如きもの、及び舟繋石の三奇勝ありしも、今はその一二を失
 ふに至れり。切石より更に一里にして福井村字下山に至る。有名なる屏風岩は、對岸
 共和村字宮木にあり。絶壁の直ちに水底より峭立せるもの、けづれるが如き幾角の面
 はさながら屏風の半ばひらかれたるが如く、紫黒の岩の頂に翠松少しく之を蔽ふ。岩
 は即ち西北南巨磨郡を貫流し來る早川の流端に面するもの、下りの舟は一髪をさしは

さんで、將に此の嶮岩に碎けんとする時、一葉の風に翻へるが如く、風光の勝と、舟
 行の危と旅客の忘る能はざる處なり。下山宿は河の南岸に瀕す。下山より一里半許に
 して身延山道なる波木井に至り、更に下りて、大河内村に近き藪ヶ瀧を過ぐ。川幅甚
 だせまき早瀬の稱にして、右岸より斗出せる斷崖によりて、水流轉じて勢更に加はり、
 流れを支ふる幾多大石の内、舟は石面を滑り、岩間をすりぬけて、矢の如く、葉舟の
 如く、富士急流中の最難所を過ぎて睦合村の南部に着す。地は鰍澤よりは約九里、全
 水路の中央にして、水上警察署の檢閲ある所、上りの船客は大抵これに宿泊す。地は
 又甲駿往還の要路にして、峽中屈指の名邑とす。

伊豆國

伊豆國は相模、駿河の兩灣の間に介在する伊豆半島及び伊豆七島より成る。伊豆半
 島は南北に長く、東西に狭く、南端石廊岬より北端佐野に至る長さ十八里餘を有す。
 面積九十八里を有し、分ちて賀茂、田方の二郡となし、半島の全部は静岡縣に屬し
 伊豆七島は東京府これを管す。地勢山岳重疊し、河流の沿岸にも平地甚だ乏しく、
 沿海の地又多くは危岩削立して徒崖を成せり。天城群山路々半島の中央部に蟠踞し、
 萬三郎嶽(一四五〇米)萬二郎嶽(一三〇〇米)を起し、更に東南に延びて帯木山(一〇
 二八米)を起す。この東北に側火山遠笠山(一一九七米)を聳立せしめ、其東北に矢筈山
 (八一〇米)を屹立せしむ。其他大室山小室山等皆なこの火山群に屬す。熱海火山は一
 個の單純なる層狀火山を成し、其東方の大部は爆烈作用及び海岸の強風怒濤によりて
 破壊せられ、高嶽(七六九米)日金山等の東方火口壁を残して全く海中に陥没し、以て

今日の如き状態を呈せり。かの熱海の間歇泉は實に其火口底に湧出せるものなるを知らば、人は其往昔に盛なりし火山の光景を想像するに餘りあるべし。其他天城火山郡の西方に猫越火山あり。最高峯三蓋嶽山は千十二米の高距を得つ。又其西に達摩火山あり。半島の南部は峻嶺高峯なく、丘陵の起伏するに過ぎず。かくの如き地形なるを以て長流大河に乏しく、諸水概ね奔放急下して直ちに海に到るを以て、其間に平野をひらくこと少く、僅かに河口に於て少許の平地を有するに過ぎず。其中狩野川の流域に發達せる平野は稍大にして、韭山三嶋の名邑こゝにあり。

沿革 上古は國府を田方郡に置きて之を統治す。降て鎌倉政府の初めに至て山名義範を以て守護となして國守を兼ねしむ。文治年中、後白河法皇の特旨を以て當國を總追捕使源頼朝に賜ひ其子孫に傳へしむ。其後ち足利基氏鎌倉の管領となるに及んで其執事上杉憲顯を以て守護となし憲顯足利氏に背くに及んで畠山義深をして代つて守護たらしむ。義深守護を罷めて西歸するに際し憲顯又足利氏に降り當國再び其管する所と

なれり。長祿元年山内房顯、扇谷定正等將軍足利義政の弟政知を擁し北條郷堀越の館に奉じて主帥となし以て關東に號令す。幾ばくもなく政知死し内亂起るに當つて韭山城主北條長氏堀越を襲撃して之を陥れ、政知の遺子茶々丸を殺し當國を併吞す。天正十八年豊臣秀吉大舉して東征し北條氏を滅す。是に於て地徳川氏に歸し内藤信成を韭山に戸田忠次を下田に封じ、其餘の地は州人江川英長を以て代官に任じ郡政を知しむ。既にして戸田氏、内藤氏共に封を轉じ、而して江川氏は後ち又大島、八丈の諸島を兼知し、其職を世襲す。明治中興、革新して韭山縣を置き、幾ばくもなく廢して足柄縣より兼治す。尋で又之を廢し静岡縣の管治内に隸せり。

交通 國內に於ける鐵道は伊豆鐵道と熱海輕便鐵道との二あり。伊豆鐵道は官設東海線の三島驛より岐れ、北伊豆の狩野川流域を南北に貫通す。三島、三島町、大場、原木、北條、南條、田京、大仁の八驛を有す。熱海輕便鐵道は小田原より門川に來り、これより伊豆山を経て熱海に達す。道路は三島より熱海に至る路、大仁より伊東に至

る路、其他下田街道あり。西海岸には沼津下田間の汽船あり。海岸各港に寄港す。東海岸には東京下田間の汽船あり。伊東國府津間の航路あり。大島に渡らんとするものには伊東港より出船するを便とす。

●産業 米は狩野川、河津川の谷に産するを最も良好とす。特用農産物にわさびあり。静岡縣の名産として名高し。林業は天城御料林頗る著名にして、杉、檜の林相頗る美なり。水産は西海岸東海岸共に著大なる漁區を有し、産額頗る多く、沿海航行の汽船は主としてこれ等の漁獲物運搬を主とするに似たり。礦物には伊豆石を産す。

○北伊豆東海岸地方 小田原熱海間を通する輕便鐵道の走る海岸と、伊東町を中心とせる海岸平野の地即ち是なり。伊東以南は天城山の大山脈東西に連亘して、全く地形と交通を異にせり。輕便鐵道の門川驛以南は田方郡に屬し、附近に相模國に屬する湯河原温泉あり。伊豆山にも温泉あり。熱海の間歇泉は陸前の鬼首温泉と共に日本に於ける有名なるものとして知らる。熱海、伊豆山より日金山を越えて箱根に至る路

あり。此路を半より折れて北伊豆狩野川流域地方に出るを得べし。即ち三島街道なり。伊東町は熱海と全く區劃を異にし、數箇の村落掌大の海岸に發達し、全く温泉區を成す。國府津熱海伊東間の汽船あり。又東京より下田に至る汽船は日毎に此處に寄港す。此町より柏峠を越ゆれば、三里にして豆相鐵道の太仁驛に達す。

●伊豆山神社 縣社兼郷社にして、輕便鐵道停車場附近より八町餘、石磴七百七十餘を登りたる所にあり。本社は古來走り湯の權現と稱し、祭神大牟須比命、相殿伊邪那岐命、伊邪那美命にして、昔は關八州武門の總鎮守として、武士の崇信厚く、源賴朝伊豆流寓の折この社に日參せりといふ。創建は承和三年なるも文祿元龜兩度の兵燹及び明治八年重ねて祝融の災にかゝり、寶物の多くを燒燼せりといふ。この地はまた古へ古々比の森と稱し、時鳥の名所にして、枕の草紙その他の古歌にその名多く著はる。後拾遺集藤原兼房の歌にも『五月闇こゝひの森のほとゝぎす人しれずのみ鳴きわたれるかな』その返し大貳三位の歌にいふ、『ほとゝぎすこゝひの森に鳴く聲は聞く夜ぞ

人の袖もぬれける』境内古樹多く、眺望また愛すべし。ことに幽邃の趣に富む。伊豆山温泉よりはこの社の左を日金山に至る。

伊豆山温泉 熱海を東に距る約十八町、温泉宿八戸ありて各海濱の石垣上に軒を連ね、輕便鐵道停車場より一町餘、石段の坂路を下りたる所にあり。日金山の麓、伊豆山祠を後にして、前面相模灘に面し、伊豆七島を西南に望みて、房總半島を東南に眺む。明礬及び硫黃質の温泉にて、婦人生殖器諸病胃腸病肺病癩麻質斯等に効ありと稱せらる。ことにその湧泉は海岸に接する空洞中より湧出して古往走り湯と稱へ、海拔僅かに四十二尺なり。萬葉集以下この地を詠する和歌多し。源賴朝の歌にも『走り湯の神とはうへもいひけらし速きしるしのあればなりけり』伊豆の國山の南に出づる湯の速きは神のしるしなりけり』和田つみの中へ向ひて出づる湯の伊豆のをやまとむべも言ひけり』などあり。

伊豆山より輕快なる輕便鐵道は或は海波にのぞみ、或は山峽の茅舎を眺めて、西南を指し、約十七八町にし

て熱海停車場に達す。

熱海 熱海温泉は伊豆温泉中の冠たるものなり。その地三方山を負ひ、東南の一隅獨り海に面す。氣候中和を得て、冬暖かに夏涼しきを以て、自ら避寒と避暑とに適し、加ふるに國府津との間輕便鐵道の便あるを以て、浴客甚だ多し。近來肺病患者の來浴増加し、従つてその繁華や、衰退せるが如き傾向なれど、なほ半島東海岸に於ける一別區をなし、戸數九百、人口六千を算し、街衢甚だ殷賑なり。温泉は鹽類泉にして、二分の一ペルセントの食鹽を含み、温度は湧出の際は常に沸騰點以上にあり。往昔は大湯、清左衛門湯、小澤湯、風呂の湯、河原湯、左次郎の湯、野中の湯の七湯なりしが、元來海岸の田圃いたる所に泉脈あるものなれば、地として之れを穿ちて熱泉の湧出を見ざる所なく、今は二十餘湯を數ふるに至りたり。然れども中に就きて最も名高きは大湯なり。大湯はこれ即ち一の間歇噴泉にして、陸前鬼首温泉と共に本邦稀に見るところ、頗る奇觀なり。今大湯を記せる日本鑛泉誌の一節を引かんに『大湯は定期噴泉

にして、海上凡七十四尺、湯池壘石の間、縦凡五寸、濶一尺ばかりの湧口あり。湧期にいたり熱湯と蒸氣とを交互噴出す。初め沸騰の聲地底に起り、宛然轟雷の如く、漸々熱泉を噴出し、その盛なるにあたり丈餘を距る石壁に注射す。少頃にして勢漸く減じ、繼で蒸氣を吐出し、地底また轟鳴忽ちにして沸烟四方に瀾漫して殆ど咫尺を辨せず。既にして蒸氣衰へ、再び熱湯を吐き、而してまだ蒸氣となる。かくの如きこと凡一時半にして故態に復す。湧時一晝夜凡五次、所謂定期噴泉にして、即ちガイシル泉なり。時ありて長湧と稱し、三旬中凡一次十二時間湧き、また十二時間涸るゝことあり。また一泉竅あり、大湯噴口を距る南方二間ばかりにして三尺ばかりの石造圓筒あり、その中より熱湯及び蒸氣を交互噴出す。その蒸氣噴出の度数は二十四時間に四回、熱湯噴出の度数は二十四時間中九回して噴出時間は一時半ばかりとす云々』明治十八年二月此大湯の傍らに噏氣館なるものを開設す。故岩倉公の建設にかゝり、中噏氣場最も壯麗にして、中央に機關を設け、大湯沸騰の度毎に蒸氣を場内に導き患者をして噏氣せし

むるの仕掛けなり。また別に浴室の設けあり。また館内に浴醫局の設備ありて、患者を診斷し、浴法を指圖す。地の前に開けたる海はさして風景に富まざれども、浴樓皆な高き丘陵に凭りて建てられたれば、いづれの二階よりも、多くは其の初島の畫くがごとき青螺、網代岬の海中に突出したるさまを見るべく、晴日には三浦半島の海中に突出せるをも指點すべし。大島に於ける三原山の噴烟も亦指顧中にあり。地はまた海上より來るべき便あり。即ち東京京橋區船松町より東京灣汽船會社の汽船に乗すれば、七時間ほどにて達すべし。

故高山樗牛の『わがそでの記』は熱海を描きて情景並びいたるの文なり。その一節にいふ「熱海のみた月は、まことに樂しき、あはれ深き冬の暮らしなりし。よそならば吹雪にとぢられて、日かげもうすき冬の眞なかも、名にし負ふ暖地なれば、こぢふく風もさむからず。むつきはじめの梅か香は、はやくも春をつげそめて、野邊のやけあとの綠なすは、人のこゝろも時めくこそか。とまやどにも岩海苔のかほりせるもなかく、声のやに心ほそく立のぼる烟ものどかなりや。海原とほく見わたせば、相模、安房の山々、雲がかすみのすがたおもしろく、大島がねにたつけふりの、春風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰

かよみたりし、はつ鳥わたり漕ぐふならその、寄る浜ごとに聞ゆるも味しく、魚見が崎のこなたより、清
 をつたふて砂白ろく、松青きほとり、濱千鳥のむれとぶさまをかしうや。うしろには日金、十國の山々を
 貫ひて、前には天空海瀾の間に、一海の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかくに及びがたし。月あかき
 一夜、われひとり浪打ぎわに佇みき。濱千鳥聲絶えて、浦風すめるそなれ松、浪の音のみいとさえたり。夢
 の如き水けぶりは、山の端白ろくとうちこめて、空には星の影まれなり。われ岸邊の松にうちもたれて、
 ふるさと遠く思ひかへしぬ……またのゆふべ、われ『はいね』を携へて磯邊の丘のこだかきのにぼりぬ。夕
 日は山のあなたにかたぶきて、半天の雲は残むの光に色づきたり。大島山の夕けむりは、薄むらさきにたな
 びきて、山光水色入日とともに黒みゆくにつれ、目もはるかなる帆かげの空に入るを、わか心ゆくも知ら
 すなりぬべう、恍然としてうちまもりぬ。わが手は思はず『はいね』にまかれて、わがめでよめる『望みなき
 人』は開かられぬ。想へば、望や、戀や、残りなうやれば、吾れはわたつみの情なく打ちよせたらむ屍の
 こと、是荒れすさびたる、冷やかなる、磯邊に横はるなり。吾前には海岸あり、吾うしろには苦しみと悲し
 みとあり、かのなやましげに覺束なくも空行く零は吾一生にも似たるかな。浪のよる見、鳥のなく聞けば、
 流石にも過ぎにし年の忍ばれて、忘れし夢の今更に繰返さるなり。靜なれ浪よ、鳥よ、わがこの世のいの
 ちは早く已に往々にして知らざるか。われは巻をとち面を掩ひぬ。見わたせば、日は名残なくくれば、
 里には燈火がやけり。山も島も限りなく少さく、遠きこちにして、脚下にひびく浪の碎くる音も、租はる
 かにきこえ、身はややく是世にはなれて、奈落の底にも沈まむ覺えたり。われは心細そさに後たえて、

急ぎ歸り、きわひき被きて臥しき。

熱海公園 町を離ること北方八町にあり。明治十八年の經營にして、地は一帶の高
 丘より成り、古松巨楡は蔚然として一隅に林樹を成し、清泉淙々その東を流る。而し
 てその間點綴するに梅の清なると桃の妖なるとを以てし、幽靜の致と淡雅の趣とを兼
 ね備へしむ。大町桂月氏のこの地を叙していふ『熱海は冬暖き地なれば、梅早く開く、
 極月大晦日、われ梅林を訪ひしに、二分通りは開きたりしが、なほ例年に比すれば、大
 に遅しと云へり。地は三面山に圍まれて、一面わづかに扇の海を開き、小なれど、い
 と清き溪流、潺湲として流る。梅はその間に列植せらる。その幾千株なるを知らず。
 たい惜むらくは新植にかゝり、樹皆小也、疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏の觀はあ
 れども、老幹槎枒、蒼龍雲に臥するの態なし。東都附近の諸梅園は、みな言ふに足ら
 ず。水戸の梅は、われ未だ之を見ず。杉田に比するに、形勝の幽雅なるは、或は之に
 軼ぐ。梅林を一目に見渡す所、亭々たる老杉の下に、一の茶亭あり。就いてやすめば

老嫗ひとり、澁茶汲みて出すなど、所にかなひて、『太だ風流也』と。また園中に碑を建て、長興專齋の梅園記を刻せり。

●●●●● 温泉寺 熱海宇新宿にあり。臨濟宗妙心寺末にして淨水山と號し、開基は授翁宗弼

和尚即ち萬里小路藤原藤房卿と稱し、寺内に卿手植の松あり。その枝四方に廣がり、幽翠人を襲ふ。また庭前に開祖の碑あり。傳へ言ふ、天授六年藤房卿この地に没せりと。

寺寶として藤房卿の傳衣絹金七條一肩及び中興の僧雲居の九條衣及び念珠等を藏す。

また門前に三點水と稱する古井あり。支坊慈照庵は上宿にありて、湯河原堂と號し、

治承年中源頼朝公の草創にかゝる。

●●●●● 日金山 伊豆賀茂郡伊豆山村に屬す。山に二道あり。箱根より熱海に達するを十國

峠といひ、三島町より熱海に至るを熱海峠といふ。中、十國峠の眺望も奇なり。峠に

達する阪路なほ二條あり。一は湯河原温泉よりし(その道程五十町)一は伊豆山温泉よ

りす。(その道程二里十町)いま、伊豆の名湯熱海より登臨すとせんが、まづ路を上宿

北來の宮に取り登ること十町許りにして四面塔あり。僧真然の在住せし所といふ。そ

れより右折して登ること十一町にして、果隣大徳の開創せる地藏堂あり。これより屈

曲せる山壁を攀づること四十餘町にして日金山東光寺に達す。寺一に日金地藏堂とも

呼び、僧聖算作丈一丈餘の地藏尊を本尊とし、脇士の二童像は弘法大師の作なりとい

ふ。堂前に閻魔王及び生死河婆の石像あり。古色蒼然一覽すべし。また堂後に仙人塚

あり。松葉、欄脱、金地三仙人の墳なりといふ。堂より更にこと八町、禿山の頂上に

達す。これを丸山即ち十國峠と稱す。海拔實に二千二百三十八尺、石碑あり。詳らかに

にその方位を記す。曰く『伊豆國賀茂郡日金山頂、所觀者十國五島、自子至卯、相模

國、武藏國、安房國、上總國、下總國、自辰至申、其國所隸之五島及遠江國、自酉至

亥、駿河國、信濃國、甲斐國、天明三年東都林居士諸島出雲光英源諸侯等、應熱海里

長渡邊房求之需建之』と。頭を回らせば限界洞達一望際なし。窈窕たる富岳は淡掃し

て半空に聳え、足柄、箱根の諸峯はその北に連り、信濃、甲斐の諸山その間に隱見し

富士川一帯の流れは蜿蜒として白蛇を走らし、三保の松原の白沙青松、田子、清見の清澗澄波、三島、沼津の諸村、天城、真城の諸峯、熱海、網代の諸勝、房總の山、初島、大島、利島、新島等水烟雲霞の間に出没して、まことに東海有数の壯觀と稱するもまた溢美の言にあらず。大槻盤溪詩あり、『群巒環遠海成澗、隔海青螺一帶山、忽覺飄然換凡骨、神馳五島十州間』

初島 熱海の南、海上三里を隔てたる所にある一孤島にして、東西凡て八町、南北四町餘、戸數四十二戸を有す。島民は皆な質朴にして、重に漁業と農業とに従事す。古來の制度にて島中の戸數これより増すことを許さず。故に人口割合に多し。且つ島治商賈等皆な島民の協定になり、決して財産の不平均を許さず、従つて火災盜難の憂あることなく、四十二の家族相共同して自ら一別天地をなせり。また古來陸地との交通を絶ちしため、近世に至るまで種々の奇習を殘存せりといふ。島は到る所水仙花及び桃樹多く、茶、麥、桃實等を産物とせり。島に曹洞の寺院二字あり、一を東明寺とい

ひ、他を慈福寺と稱す。また島の二方老樹鬱蒼たる間に木花香初木神社あり。鎌倉右大臣この島を詠めるの歌あり『箱根路を我越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ』沖の小島は即ち初島を指せるなり。熱海より舟を僦ひていたるべし。

錦浦 念佛山の麓をめぐれる海岸の總稱にして、魚見岬より錦巖まで海上半里舟にて到るべし。絶壁の下奇巖突兀として連なり、俗に兜岩、鳥帽子巖、碁盤石、霞石五色石、胎内寶、狗寶等の目あり。殊に奇觀なるは窟の觀音にして、潮干の時内に入れば窟廣くして中に白色の蝙蝠住み、その突當りに觀音の石像を安置せり。その隣の洞を錦巖と稱す。早朝その洞によれば、旭光岩壁に映じ海水に反射してその色錦の如し。故に取りて以てこの海岸の總稱とはなせりといふ。

魚見岬 は錦浦に到る途中海上に斗出せる岬の名にして、熱海の東北端なる横磯と相對して、澗形をなせり。岩頭に一茅屋ありて、番人を置き魚の來集する毎にこれを漁船に報せしむ。故にその名あり。この他和田山は熱海の南方に蟠踞せる元山の

名にして、その麓に和田村あり。山中秋は松茸を産し、冬は其頂きに登りて雪中の景を賞するもの多し。以上梅園の春曉、來宮の杜鵑（來宮は梅園の北湯前神社の西にある熱海町の鎮守社にして、境内に二株の老樟あり）温泉寺の古松、横磯の曉涼、初島の漁火、錦浦の秋月、魚見岬の歸帆、和田山の暮雪を併せて、熱海八景と稱す。故成島柳北野村文學の撰するところなり。

故樽牛『わがそでの記』にいふ『熱海より南のかた、にしきの浦をつたうて網代のみなとに連る所の一角、之を魚見が崎と名く。嶮然海を抜くこと一百丈、段崖直に下りて斧もてけづりたらむが如し。ある日の夕、われ友と共にこゝに上りて『さつげな』讀む。是女詩人が入水せしと傳ふる『リゆかていあ』の岩は、この魚見がさきのそばにも似たらんかと想ひたればなり。……日はすでに西にかたふて、海づらひるくか、やまわたる。われは思に沈みてがけの上に坐しぬ。見わたすかきりのあなたより、靜かにゆるやかなるうねりの岩ちかくうち寄するさまは、われに一種のおこそかなる感情を起さしめぬ。何所よりともなくわが耳ちかくさやくものあり。起ちて脚底をみおるせば、名にし負ふ魚見ヶ崎の深淵は、暗々としておるちの口を開きたらむ如し。われは慄然として覺えず巻を落したりき。空には三日月の光あり。われ天を仰で嘆息するもの多し。これよりわれは永く『さつげな』を讀まざりき』

熱海より西行、輕井澤峠を越えて間宮なる地に出で、以て三島に達する街道あり。その間五里、駕籠あり。鸚鵡石は熱海の西方三里餘のところ、丹奈村にあり。石の高さ凡そ一丈六尺餘、横六尺餘にして、人語その他一切の音聲この石に響きて相反應す。西原竹溪の鸚鵡石の記に曰く『冷聞記所稱南嶽崎峯之響石者歟』と。

熱田より海岸下田街道を傳へば、三里にして網代にいたり、なほ二里餘にして伊東にいたる。網代にいたる間に多賀村あり。また網代より伊東にいたる間宇佐美あり。もし舟行すれば熱海より海上二里にして網代港に達すべし。

網代は戸數四百を有する一小漁村なれども、三方に山をめぐらし、風浪の嶮なく船舶の寄泊に便なり。東京下田間を往來する汽船は往復ともに此所に寄航す。沿岸に巨岩多く、風景甚だ佳なり。熱海より小舟にて舟遊すべし。また東南方山を越えたる所に根越の観音堂あり。曹洞宗にして長谷寺と稱し、門前の眺望賞すべし。宇佐美 東北西の三方山を負ひ、南の一方海に臨みて、人家約五百を有す。字留田

に城山あり。工藤の裔宇佐美佐衛門尉に在りしと言ふ。今宇佐美氏の後裔と稱するもの同所にありて、織田信雄の宇佐美郷禁制狀、豊臣秀吉の宇佐美安堵の朱印等を藏せり。遊豆記勝の記載する所によれば、この地の春日社に一巨樟ありて、中幹を斷つこれ、豊太閤朝鮮征伐の時伐りて以て造船の材に充てしものなりと。中村敬宇の父にしてわが國造船學攻究の率先者なる中村武兵衛は實にこの地の人なり。

伊東温泉 伊東の地名は伊豆の東といふより起り、その温泉は既に疾く枕草紙に著はれたり。唯に伊東と總稱するも、松原、湯川、岡、鎌田、新井、玖須美の六ヶ村まり成り、うち温泉は玖須美と松原との二村中所々に湧出して、その松原にある猪戸の湯、出來湯、和田の湯など最も著はる。旅宿は新築にて、物價廉に氣候人に適せるも、たい惜むらくは交通不便なり。もしも汽船によらざれば、陸上は熱海へ五里、網代へ三里、修善寺大仁または韭山へはともに五里、下田へは十三里、概して山路なり。東京灣汽船會社の下田通ひの汽船に便乗すれば、普通に十二時間を要す。故に國府津

より汽船によるか、伊豆鐵道の太仁驛より下車して赴くを便利とす。大仁驛よりは冷川まで三里の間馬車及び人車を通ずるも、夫より先は路險難にして、駕籠によるかまたは徒歩するの他なし。温泉は鹽類泉にして、婦人病打傷、痔疾等に効ありといふ。土地の風俗はやゝ淫靡なり。

伊東名跡 伊東の地古へより著名にして、名跡甚だ多し。今その一二を摘記すれば日暮の森は字岡にありて、頼朝公伊豆流寓の日こゝにて祐親の女八重姫を待ちて密會せしところといふ。附近に音無の瀧、音無川あらずの森あり。届ヶ淵は字鎌田にありて、頼朝八重姫と契りて擧げたる一子千鶴丸を祐親こゝに投じたる所なりといふ。故に兒ヶ淵、恩ヶ淵等の稱あり。稻荷山東林寺は岡にありて、河津三郎の冥福を修するため伊東祐親の建立するところ、祐親の墓は同寺の近傍なる地藏原の山上にあり。また同所に延喜式久豆彌神社あり。伊東城址は字和田の山上にありて今は田園となれり。佛光寺は同じく和田にあり。伊東八郎朝高の邸地にして、弘長元年日蓮上人この國へ

流されし時、朝高悪病に罹り人事を辨せず、その族綾部正清等日蓮に請ひて加持を行ふに、病忽ちに癒ゆ。乃ちこの寺を草創せりと。寺の後山に朝高及び正清の墓あり。

●柏峠 伊東港の西、鎌田の西北にあり。曾我物語に曰ふ『伊東祐親狩すでに畢りて各柏峠に集り、幕打ち駄餉竹筒を出だし、大器を以て杯酒を進むるに、敢て三献を辭する人なし。こゝに土肥實平申されけるは、如何に大庭殿、今日の御遊興老期の御思出たるべし。實平に於ても同意なり。かやうの義二度有るべしとも存せず候、然らば酒を過し給へかし、山路醉眠歸去晚といふ詩にも協ひ候はんと、これより大醉にいたり遂に相撲の興に及ふ。』

●蓮着寺 伊東の南對馬村大字篠海浦にあり。寺傳に據ればこの浦は日蓮上人の伊豆へ流されし時、初めてこの地へ着し、上人歿後小田原北條氏の臣今村若狹守この地を領して深く上人の徳を追慕し、堂宇を建立し、爾後や々衰頽に傾きしを萬治年中日靈上人再興して海岸山蓮着寺と號せり。その海岸中に斗出せる所を日蓮ヶ崎といひ、埠

頭の巨岸を祖岩といふ。これ船守彌三郎が上人の將に海中に沈まんとせしを救助せる所なりと。なほ附近に題目岩、大師窟、轟岩等あり。孰れも佳景なり。なほ伊東よりこの地にいたる海岸に、かの和田胤長が頼家卿の命を享けて大蛇を屠りしといふ洞穴の跡あり。また八幡三郎が祐親の嫡子河津三郎を射殺せる舊跡も、このあたりにあれといふり。

●最勝院 伊東の西方、中大見村大字宮上にあり。曹洞宗永平寺末にして、境内二千九百三十餘坪、本堂、開山堂、經堂、鐘樓、奥書院、庫裡、山門、總門等の建物及び火防眞殿、辨天堂等の堂塔あり。寺傳に曰ふ、永享五年管領上杉憲清その祖父憲實の菩提の爲めこの地を相して一字を創立し、妙高山金光明寺最勝院と扁し、吾實禪師を請じて開山始祖たらしむと。寺寶として、毘首竭摩の作本尊釋迦佛像、僧最澄の唐より携へ歸りたる佛舍利、無銘古梵鐘、支那鼓山道沛禪師書一軸、陳嘉言畫三幅、紺紙金泥法華經、北條氏綱の楚制狀、北條氏康寄附狀、豐太閤禁制狀等あり。歴史美術の叢

考に資すること少からず。また附近に日蓮宗實成寺あり。僧日尊の開創にして、本尊日蓮の尊像名あり。なほ最勝院の南方土中よりは、時々埋れ木を發掘することありと。

○北伊豆伊豆鐵道沿線 即ち狩野川の流域なり。伊豆鐵道は官設東海線の三島驛より岐れて、北伊豆地方最も豊饒なる狹長なる平野（狩野川流域）を北より南に駛り、三島町、大場、原木、北條、南條、田京の六驛を経て大仁に達す。此間は源頼朝の崛起せし地にして、處々に其の遺跡を存せり。北條氏また此地を其の出身地と爲す。海岸には戸田海水浴場あり。大仁の西南一里に修善寺温泉あり。大仁より下田街道は益益南し、五里にして天城山下に至る。山麓に湯ヶ島温泉あり。其他此附近に温泉場多し。天城山は絶大なる深谷を成し、頗る幽深を極む。

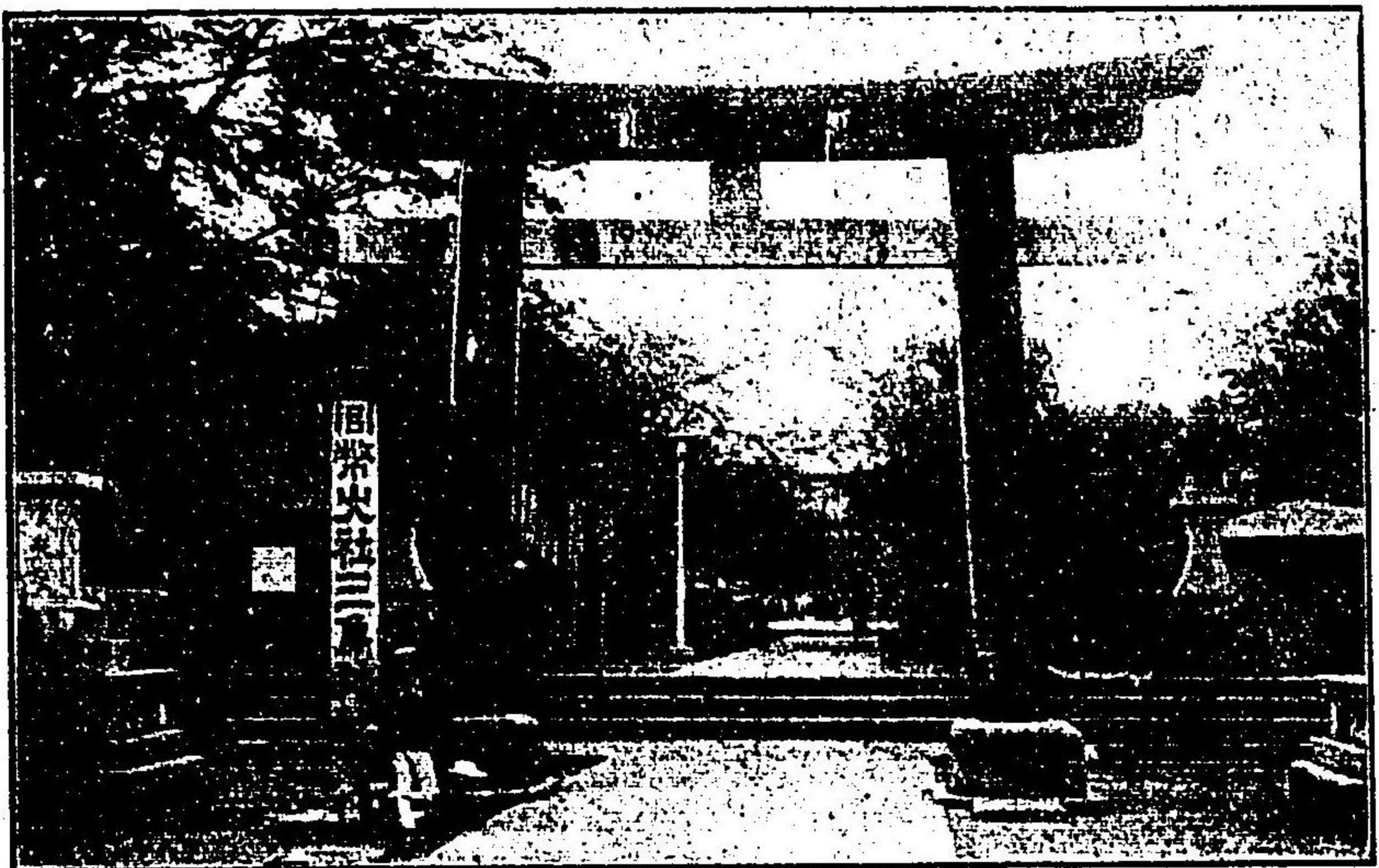
三島町 東海道五十三次中、北には箱根連山を控へ、東は黄瀬川を隔て、沼津に對し、南は伊豆に至る街道の衝に當れるを三島町とす。東海道鐵道は町の北約十五町の

地、駿河國長泉村に停車場を有し、伊豆鐵道線は、町の南端に車驛を置く。前者を單に三島停車場といひ、後者を三島町停車場と稱す。町は東西二十町、南北一里、戸數七百餘、人口四千八百を算し、田方郡役所、警察署等の官衙あり。むかしは國府の所在地として、はた箱根西麓の休息驛として、諸侯參勤交代の人馬絡繹たりしも鐵道開通以來大に寂寞の境に向へり。東海道に關せる諸紀行、軍書等ほとんど三島を言はざるはなし。

小濱 町の西北少許の地にあり。今、小松宮殿下の御別邸となる。庭前に大池あり。富士山の溶雪水と稱し、寒冷比なし。駿豆十八ヶ村の用水に使用する。

本覺寺 小濱にあり。應永三十一年僧日出の草創にかゝり、日蓮宗に屬す。嘉永以後地震及び火災にかゝりて、大に衰ふ。寺に菅公眞筆の大乗妙典、北條早雲及び氏康の手簡を藏せり。

富士見瀧 一に鮎壺の瀧といふ。三島停車場の西二町、三島園の背後にあり。水色



藍の如く、淵潭また甕かめに似たり。二丈の飛瀑怪巖に觸れて、泡沫雪の如く、また瀧壺たきうに香魚群游せり。

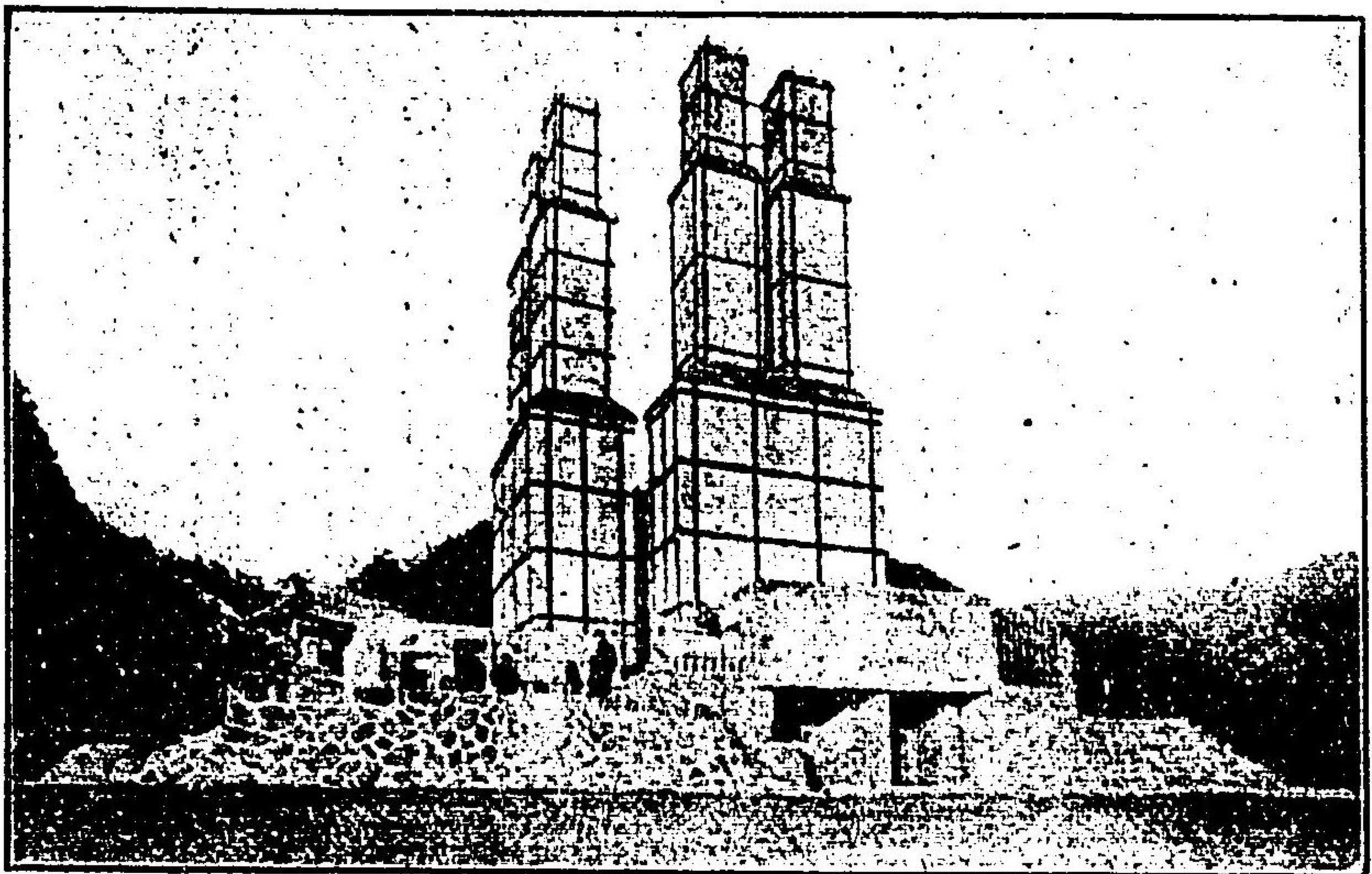
三島 三 頼朝御座石 町の西二十餘町を隔てし田圃の間まにあり。傳へて言ふ、治承四年源頼朝こゝにありて、奥州より來れる義經と對面せりと。その西方一町の所に八幡の祠あり。

三島神社 東海道中熱田あつたに次ぐの大社と呼ぶる、三島神社は三島町の中央にあり。おほやますこのみこと命を祀りて、官幣大社に列し、伊豆線三島町驛よりはわづかに五町を隔つる

に過ぎず。社は聖武帝の天平五年に勸請くわんしやうしたる古祠にして、往古より朝廷の崇信すうしん厚く、源頼朝徳川家康等また神館しんくわんを寄附せることあり。石の大華表は海道おほしづみの傍らに立ちて、本社まで二町を隔つ、四境廣濶老樹多く、大池あり、樓門あり、社殿はことに壯麗を極む。大祭は八月十六日にしてこの日に勅使參向あり。山車やまぐるま、踊屋臺等を出して市中の賑ひ一方ならず。また一月六日に御田打祭みいたうちまつりなるものあり。古へはこれを三島祭りさんしままつりと稱し、農民等思ひくおもひくの服装ふくさうをなし、假面を被り鋤鍬を肩にして町内を踊り歩くの使なりしが、近世その事廢れり。寶物として御服、刀劍の類六十餘點古文書數種あり。就中、尼將軍政子の奉納せし蒔繪まきゑの櫛笥くしげは今國寶に算入せらる。

北條盛衰記の一節に曰ふ「永祿十二年武田信玄の先手の者ども、三島明神の社壇を打破り、斗帳とちやうをぬすみ取り、神殿を見るに神鏡の外本尊なし。諸勢も申しけるは、三島は海道に聞えける大社なるに、何とて本尊なきならむ。かくの如き神かみなき宮に、何の罰あらんとて、寶藏をも打ち破りてけり。」

妙法華寺 三島町の東、錦田村大字玉澤たまはらにあり。徳治中風間信昭の開基にして、高



獨り舊の如く、風に咽ぶ浙瀝たる松籟は遊子をしてそらろに今昔の感に堪へざらしむ。この地の豪家にしてまた徳川氏以來時代の代官としてこの地方に臨みたりし江川氏の舊邸はまた城址の近傍中村にあり。その邸宅は保元年中の建築にかゝると稱す。破風造りにして柱板皆な斬痕を留め、最も古風なり。されば明暦年中幕府が江戸本丸を修理せし時にも、この家が百年來舞馬の災なき嘉祥を祝して、特に命じて棟木を献せしめしといふ。屋内に反射爐あり。これ實に江川太郎左衛門英龍が、幕末の際に出で

反 射 爐

て、海外の事情を察して君國の前途に憂ひ、専ら兵事を研鑽し大砲を鑄造したりし遺蹟なり。今東京靖國神社社内、大村兵部の銅像下にある大砲の如き實にこゝにて鑄造せしものに係る。なほこの反射爐は實に今の陸軍砲兵工廠の濫觴にして、かの木戸孝允、佐久間象山、黒田清隆をはじめとして、大山巖、伊東祐磨、の如き皆な英龍の下にありて、各種の兵式砲術を習練せしものといふ。また幕府の洋人と下田港に會見するや、往々にして英龍に交渉を任命せりといふ。その他豆相人に種痘の術を傳へし如き、英龍また一代の傑物たるを失はず。心あるものは荒草寒烟の間、反射爐の舊跡を訪ひて彼が當年の抱負を偲べ。

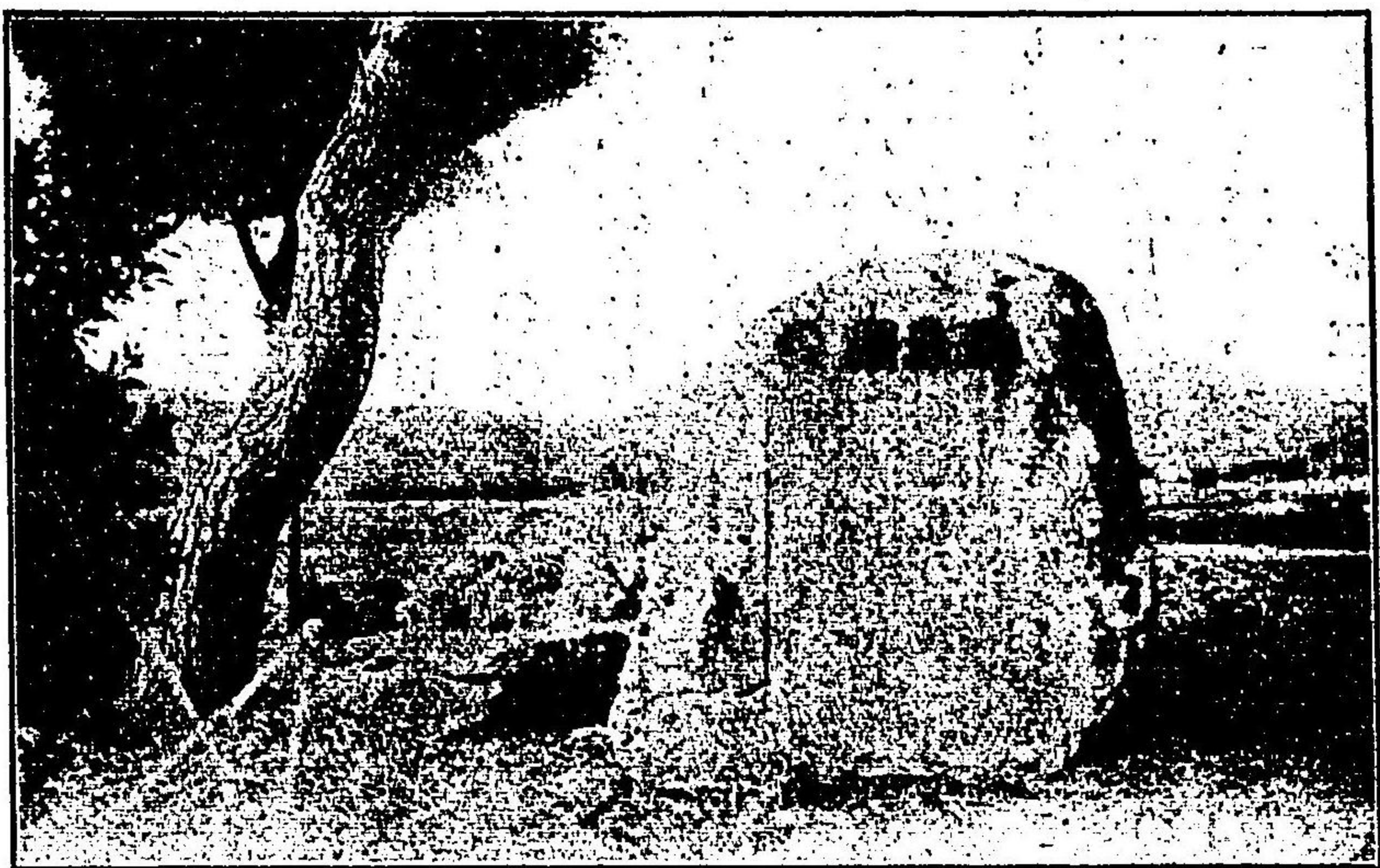
蛭小島 源頼朝配流の地として史乘に名高き蛭小島は、葦山城址の北方五町餘にあり。この邊往昔は狩野川の流湛えて一孤島と成したるものといへど、今は流れを變じれば昔日の餘影もなく、草田の間わづかにその名目を留むるのみ。今孤松の下に一碑と立て、その紀念とせり。東鑑に曰ふ『永暦元年右兵衛見流干伊豆蛭島、治承

蛭山小島の遺蹟

四年八月十七日、士卒競起、可行蛭島通者、
 歟騎馬之儀不可叶、仍各奔向於蛭島通之堤、
 昔不及騎馬、入山本館、兼獲隆首』と。葦
 山の地なほ名蹟渺なからず。堀越公方政知
 の居館たる御所の舊跡は字堀越に、平兼隆
 の館墟は字山木稱念寺の西域にあり。孰れ
 もその事蹟を擧げて東鑑等の書に詳し。
 また山木に香山寺あり。字寺家に願成就
 院あり、信光寺あり。

更に厚木驛にもどりて鐵路にかへれば南條停車場の
 南方十五町に古奈温泉あり、田京村に藏春院あり。

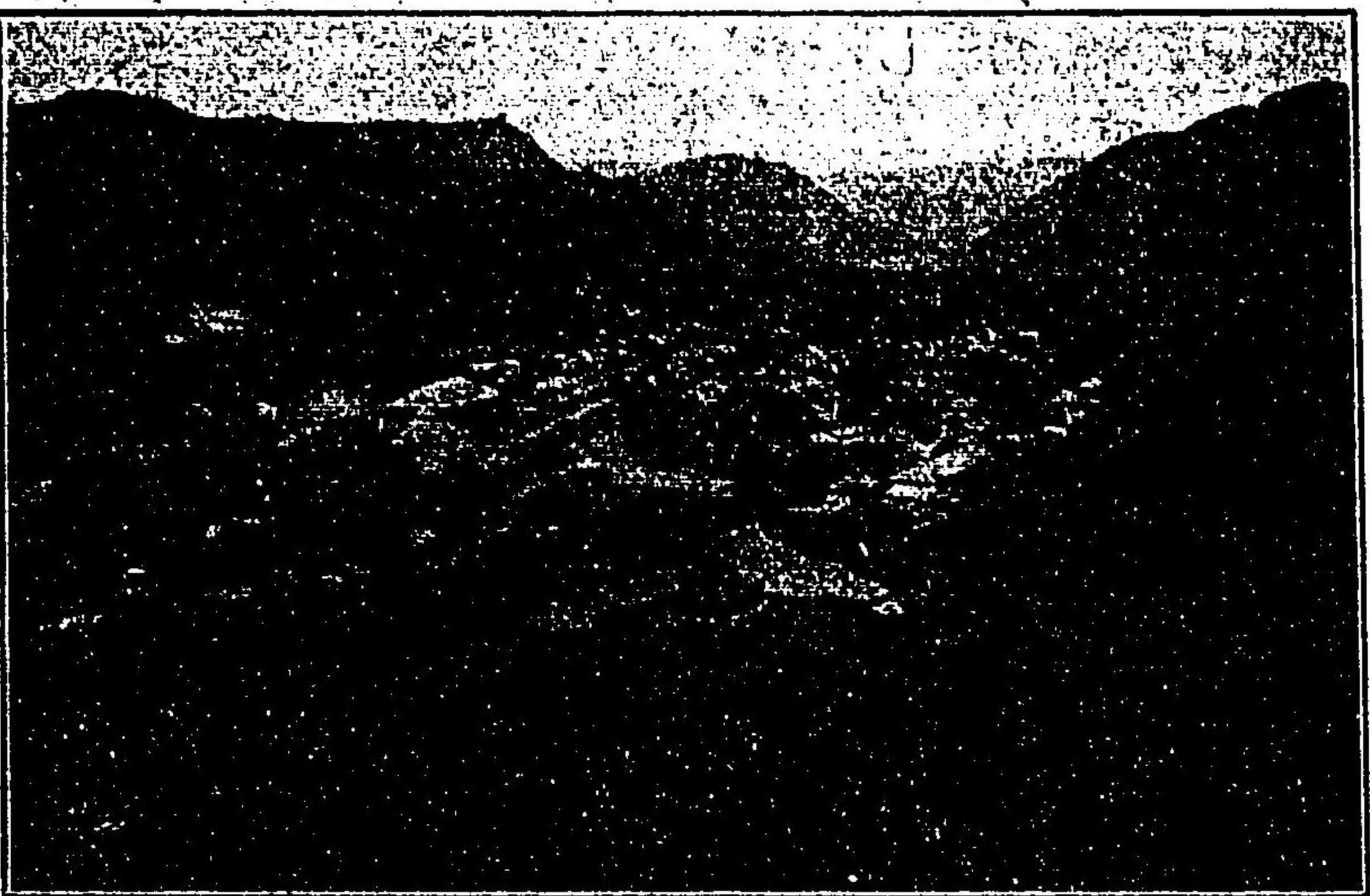
藏春院 田中村大字田京に屬す。曹洞宗



永平寺末にして、上杉憲實足利持氏の冥福を修するため建立するところと傳ふ。寺
 境二千百七十餘坪にして、十七の堂宇あり。その地村落を距ること十三町にして、青
 松繁茂せる山徑を経て一小阜あり。老杉修竹相交り、その間一條の清流を通ず。山に
 挾まれて頗る幽寂なる一名刹なり。式内深澤神社は同じく田京にあり。

大仁 は伊豆鐵道目下の終點にして、狩野川沿岸にあり。この地より修善寺までは
 僅に十餘町の道程にして、馬車及び人力車あり。地に狩野川橋あり。修善寺道にあた
 る。水晶山の奇觀あり。

修善寺温泉 伊豆の温泉多々あれども、その境幽邃なるは蓋しこの地を以て最とす
 べし。大同年中僧空海この地を相して一寺を草創し、修善寺と號せしより、遂に村名
 を爲すに至れり。地は郡の東北に位し、南北は山を以てこれを圍み、わづかに縷の
 以き路を東西に通ず。而して桂川の清溪は村中を貫流して狩野川に注ぐ。温泉その
 川中に湧出し、温氣沸々と騰る。湧き口に河原湯、眞湯、杉の湯、箱湯、石湯、珍の



湯等の目あり。無色透明にして、微かに硫黄の氣を帶べり。而して湧き口の溪流岩石に富み、水のこれに當りて奔飛跳踉するさま、思はず人をして快哉を叫ばしむ。川に架する橋二つ、一を虎溪橋といひ、他を渡月橋といふ。人家はすべてこの川の兩岸に列し、旅舎の設備は概ね都風にして、よく都會の紳士をして淹留數日なほ都を思はざらしむ。有名なる鑄鉛湯は桂川の中流に湧出して、磐石を穿ちて浴槽となし、板を以てその中を劃し、冷湯、温湯の二所に分つ。岩上に石標あり、形鑄鉛の如し。これ、天

修善寺温泉

明中修善寺の僧大鼎和尚の建つるところといふ。その他、眞湯、河原湯等皆な肺炎胃加答兒等に宜し。地に産する抄紙は古來著名なり。いまこの地より近村への里程を擧ぐれば三津へ三里、栗島へ三里七町、吉奈温泉へ三里、蛭小島へ三里、堀越御所へ三里なり。

日本鑛泉志に曰ふ「修善寺温泉は十六ヶ所、皆な鹽類性に屬す。その鑄鉛湯、溫度百四十度、眞湯百二十度、河原湯百四十七度、箱湯百八十五度、石湯百八十五度、杉湯百四十度、兒湯百五十四度、瀧湯百五十三度、花湯百三十四度(硫化水素を含有す)、瀧湯百五十九度、岩湯百四十度、菖蒲湯百二十二度、保生湯百十四度、菊園湯百四十度、明治湯四十五度等云々」

●●●●● 修善寺 肖廬山と號す。桂川の北岸丘上にあり。大同二年僧空海の草創にして、はじ

めは福地山と稱せしが、建長鎌倉中より來住せし宋人劉蘭溪はこの地の故國廬山に肖たりとて、肖廬山と改め、また橋名を虎溪と稱し、門を三笑關と號せり。建久三年源範賴梶原景時に襲はれて此所に自殺し、後ち北條義時また頼家をこゝに幽閉し、終に浴室に於て暗殺せしは廣く人口に膾炙する所、源平盛衰記以下の書にこれを細説せり。

今、頼家の墓は桂川の南岸丘上にありて、北岸なる範頼の墓と相對せり。頼家墓の東隣を三州園といふ。これ、古への指月の岡にして、かの尼將軍屢しばしばこゝに來りて源將軍のことを追懐し、月に對して嗚咽せりといふ。今遊園となりて、園内に貸席あり。また近傍に指月殿あり。その他桂川の南北に御庵洞、範朝の碑、日枝神社、蝦蟇ヶ淵、太白山、稚兒ヶ淵、不越院、白糸、水篋及び紙谷瀧等の諸勝蹟あり。修善寺の寺寶として、尼將軍寄進の經卷、空海將來の香爐、日蓮眞筆の法華經、北條早雲の手箱、豊太閤の教書等あり。

正覺院 修善寺の西方一里ばかりの山間にあり。峻けはしき崖を削りて洞窟となし、茲に一字を建立せしものにして、むかし大同年間弘法大師の降魔場なりと云へり。三伏の日もこの寺にのぼれば涼風輕く面を撲ち、夏日修善寺に遊ぶもの、常に訪ふところと言ふ。堂後に一清泉あり、また阿呼の瀧、驅込の谷、驅込の岩等の奇あり。九華山の瀧 修善寺の西方西浦村大字河内の禪長寺境内にあり。むかし源三位頼政

の瀧を射し時、賞として賜はりし官女菖蒲あやめこゝに來りて、頼政追弔のため一寺を創立し、禪長寺といひ、山を九華山と號せりと。今なほ後丘に菖蒲の前の墓を存せり。瀧の高さ十丈餘、飛泉鞆たづなとして匹練を下すが如く、壯觀なり。旭瀧 修善寺の南方にして、田方郡太平村にあり。水源を池の洞に前し、狩野川に入る。落下實に三十餘丈、幅一丈五尺を有し、中央より二段となりて二口に分れ、東面して旭光に映ずるよりその名あり。

以上にて修善寺附近の名勝はほゞこれを説けり。九華山の瀧附近より達磨山、月田、土肥等伊豆の西海岸方面は近けれど、今估らくこれを措き、修善寺より南下して下田港に至るまでの勝蹟を擧げん。その街道は天城山をこゆるものにして人車を通ず。又馬車あり。船原温泉 太平より松が瀬、青羽根の二村を経て達す。鹽類泉なり。更に狩野川に沿ひて南行すれば、門野原に嵯峨温泉あり。旅舎一戸、浴客は多く田舎客なり。吉奈温泉は嵯峨澤温泉の北方數町の地より、西に徑路を行くこと十餘町にして達す。旅舎

數戸、泉質は單純泉にして、地方屈指の名湯なり。

湯ヶ島温泉 嵯峨澤温泉の南二十町ばかりにあり。旅舎數戸、中一戸は建築甚だ壯麗なり。地勢、南は天城山を負ひ、其餘脈蜿蜒として北に馳す。温泉は實に此一大溪湖中に位し、狩野川の急湍淙々として村内を貫流し、土地の幽靜なるはむしろ修善寺に優れるが如し。泉質は鹽類泉にして、狩野川の岸頭岩石の間より湧出し、湧き口に西平、世古、木立の三ヶ所あり。西平は川の東岸に位し、木立はむかし源頼朝この地に遊び木太刀を以て穿ちしものなりと俗説す。

淨蓮瀧 字淨蓮寺にあり。瀧の高さ八十尺餘、溪間より下りて巖石に激し、飛沫雪の如く、一見人をして心骨冷然たらしむ。また村の東方は輿提峙あり。これ、藤原鎌足の裔上杉龍若丸の輿を提げて通行せし古跡なり。同人の墓はその麓にありて俗に東原觀音と稱せり。字金山に金坑あり。豊臣氏の時大久保某それを領し、その當時不動像を安置せり。故に不動山と云ふ、不動の瀧あり。

これより天城山の西方四所を越え、湯ヶ野より小鍋、須原、立野を通ぎ、遂に半島の南端下田港に達す。その途上に湯ヶ野温泉、小鍋温泉、鎌倉寺温泉等あり。中鎌倉寺その最にして、旅舎數戸あり。

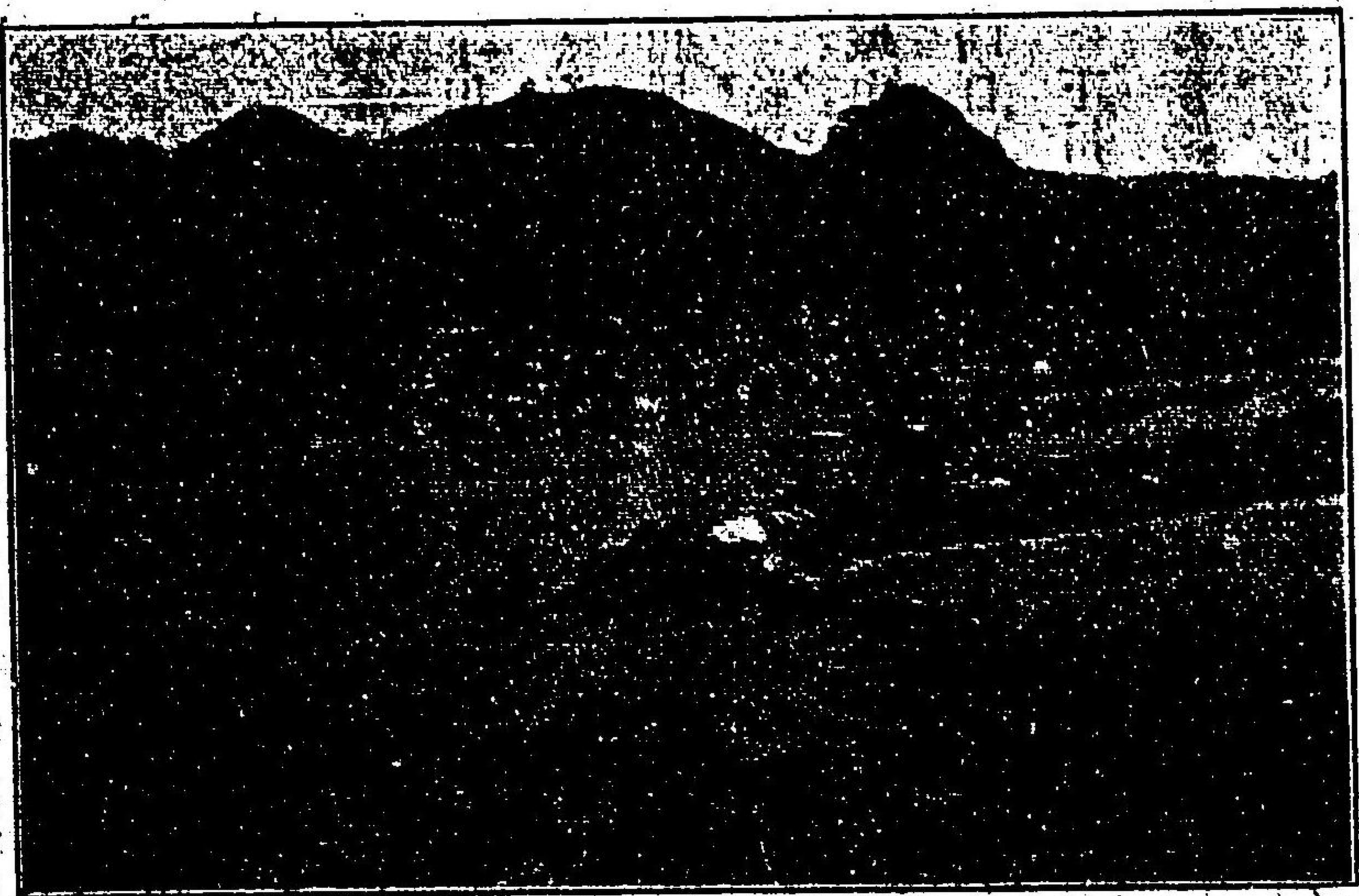
○南伊豆地方 天城山以南の地を總稱して南伊豆といふ。山脈處々に岐れて、溪谷をつくり、其の間に市街村落發達す。就中、河津川の谷最も豊饒なりと稱せらる。下田港のある處は少許の海岸平野を作れど、丘陵處々に起伏し、海岸には處々に徒崖を作れり。石廊岬は風光のすぐれたるを以て聞ゆ。松崎は西海岸の一名邑にして、沼津町を發する汽船は下田航行の途次寄港す。又東京を發して下田に至る汽船あり。

河津温泉 賀茂郡の下河津村に屬せり。地は河津三郎の古跡として名高く、また青石及び薪炭の供給地として多少都人士の耳に入れり。東京灣汽船會社の舟便をかりて、下河津村の内なる見高に着し、それより温泉場まで凡そ十數町、漁船又は徒歩して往たるべし。土地偏鄙なれども、人情は質樸なり。遙かに伊豆七島を隔て、南太平洋に面し、北には天城の大山を控へて河津川の清流中部を貫流す。空氣清涼氣候溫和に

して大抵熱海に相均し。伊東へ十里、下田へ三里半を隔てたり。

●白濱神社。河津の南、濱崎村大字白濱にあり。孝安天皇元年の草創にかゝり、縣社にして、伊吉奈比咩命を祀る。この地は上古著名にして、萬葉以下の集に詠歌多し。三穂崎一帯の白砂皓雪の如く、千年の老松古柏相交りて蟠生す。北には火達野を望み、東北の間には古根濱、神船、檜磐等ありて、まことにこの地方海濱の一名勝なり。これより下田町は西南方少許の地にあり。

●下田港。今、戸數二千人口五千餘を有して、伊豆半島第一の都會なり。地勢東に須岬を控へ、西に城山を帯び、金島灣の前面に横はりて、よく風浪を保障するに足るを以て、船舶常に輻輳す。地に賀茂郡役所、區裁判所、稅務署等あり。また城山の麓に下田船渠會社あり。船渠の長さ百四十七尺を有す。往時帆船時代にありては、遠州洋の東端にて、一度下田の地を去れば、志摩の鳥羽港まで七十五里の間碇泊所なく、またこの地より江戸に赴くにも、品川まで五十里の間碇泊所無かりしより、東西往來の



船舶は皆なこゝに寄航して、久しく滞在したる所、今は汽船時代となりて且つ地の交通不便なるが爲め、昔の如き繁華を有せざれど、夏時は毎日一回東京を往復する東京灣汽船會社の汽船と、日々に伊豆の海岸の各所に寄港して沼津にいたる伊豆浦汽船會社の汽船とあり。されど一旦風浪の高きに逢へば數日間航行を止むるを以て、未だ信賴して以て、此便に頼ること能はざるは憾むべし。曾て維新前開港のはじめ、徳川幕府は米國使節と協商し、下田と函館とを以て開港場とし、米國は一度領事を此の地に

派遣して駐在せしめ、長州の俊傑吉田松蔭が、密かに米船に乗込みて海外に赴かんと企て、捕へられたるはこの地なり。その他嘉永二年英船の下田に來りて上陸し、同五年露西亞の船長ジンテンベルフのこの地に來りて肥前の漂民を置き去りたる如き、下田の地の明治文明史に關係することや深甚なり。

海善寺 下田町にあり。浄土宗にして、天正年間僧照善の中興に係る。本堂、庫裡、

山門、地藏堂等あり。また寺に狩野探幽筆出山釋迦の大幅を藏せり。

鵜島 町の西南端にあり。島は中古北條氏築城せし所、今開きて公園となし、

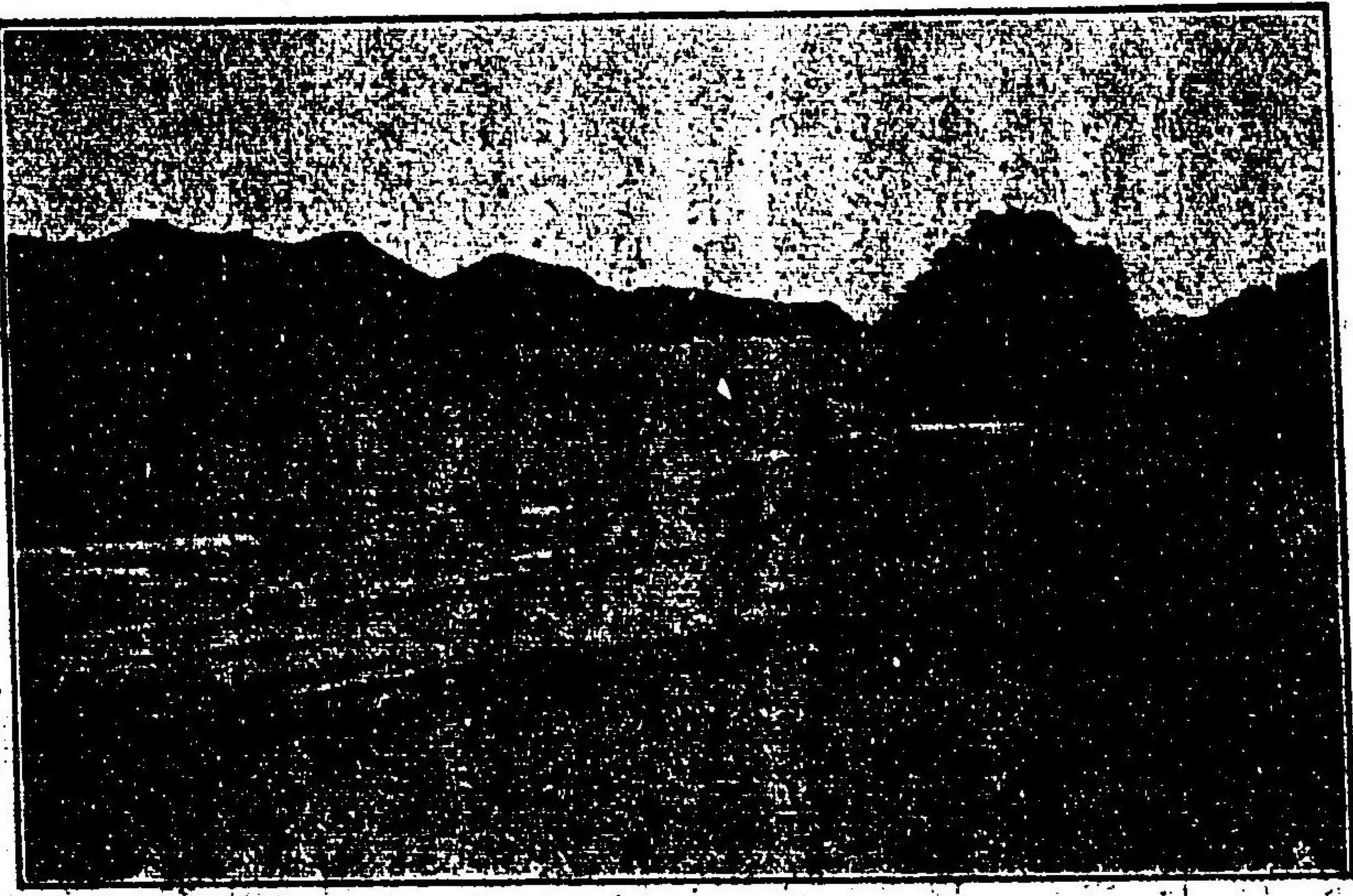
城山と呼べり。室林御料林に屬し、老松古杉鬱鬱として繁茂す。登臨の風景甚だ佳に

晴日にはよく伊豆七島を天末に髣髴すべし。

下田港より伊豆半島を西に傳へば、その海岸多くは徒崖をなし、風景のすぐれたる

所尠なからず。今、下田より取次にこれを數へん。

彌陀窟 下田より西南二里、日野川の河口の小島にあり。その岸、洞窟をなし、湖水



の干満と日光との加減によりて、中に彌陀尊の如き光影を見るを以て有名なり。また附近海山の風景甚だ凡ならず。遊客の一遊すべき所なり。

彌 橋南翁の東遊記に曰ふ「この下田より西の方に手石
陀 浦といふ所あり。こゝに奇異の巖窟あり。山の辰己
窟 に向うて指出たる出時にありて、岩窟の口狭ければ、
潮高き時は舟を入れがたし。故にこの巖窟に遊ぶも
の、潮引つめて巖窟のあらはれ出でたる時を考ふる
ことなり。余が友塘雨霜月の初めにこの地に遊びし
に、折ふし風強く浪荒かりしかば、天氣を見合せ、潮
を考へて十五日まで逗留し、十五日にぞかの窟中に
遊びし。これは小潮にてはまた入りがたければ、朝霧
の大潮を待居けるなり。その日はこゝ上空はれ風な

さまりて、海上波なく疊の上の如くなりしかば、その頃の地に有合せし諸國の旅客六人船頭二人を合はせて都合八人、晝前よりわづかの小さき獵船に棹して、海上十町ばかりを経て、かの岩窟にのぞむ。舟人やがて舟を取直し、艫の方より逆しまに窟中にさし入る。これは穴の内狭ければ船のふり廻しならざる故、出すべき時に順になるべき爲なり。さて六七間も入るほどに、穴の口のおかりさすゆゑ、物の色目さやかに見ゆ。それより右に方に折れ廻れば、日の光りも届かず、闇夜の如く、穴の口狭けれども、南海を受けたれば浪、とに高く、穴の内の岩石にあたり砕けて、水玉飛散り、雨の降ることく身にそいぐ。舟二たけ三たけばかり入るよと思ふ頃には、向ふの方岩高くして、舟をゆり上り下す。くらさはくらし、浪の音は穴の内にひびきおびたしき、その恐ろしさは言はんかたなし。同行の者ども、各念佛するばかりなり。然るに忽然として向ふの岩壁きらめくよと見るほどに、さしもにくらかりし穴の内、忽ち白晝のごとく明らかに成り、打上ぐる浪、玉ちる水までも皆な金色となる。船中一同に驚きあつといふ程に、また忽ち眞の間となりて見る物なし。人々これほど茫然たる所に、又しばらくして金色の光發すること前の如く、この時心を留めて見るに、向ふなる屏風を立てたる如き石面に、三尊の彌陀ありくと現じ給ふ。中尊の御長けは一尺五六寸ばかり、上は後光の形にして、下は雲に降り給ふ像なり。前にならび給ふ觀世音と拜み奉る御像は、一尺一二寸ばかり、また少し前にはなれて勢至菩薩と見え給ふは七八寸に過ぎず。世にいふ來迎引接の尊體現然とたしかに拜まれさせ給ふ。まことに目出度ありがたきこと心肝に銘す。その不思議は筆頭舌端の及ぶところにも非ず。舟頭やがて舟を出すに、濤雨はなほ今一度拜まん、うしろに向ひて居たりしが、暫の内にまた初めの如くなりしに、

見る所少しも遠はざりし。さて穴より外に出で見るに、天日いまだ正午にあり。出で、後同行のものに問ふに、皆な拜みたる體相は同じけれども、或は佛の御長けを四五尺と見たるもあり、或は二尺三尺ばかりなと色々に云ひ、また光明の赫々たるに餘りに恐れ驚きたるものは、佛像をしかと見定めざるもありしなり。さてその現れ隠れつするは如何なるゆゑぞと思ふに、佛にいます岩に浪打かゝりて佛を覆へば隠れ、浪遠く引退きて引根まで出れば、佛のいます岩あらはれしゆゑ、佛體見えて穴の内明かになるなり。それゆゑ三月節句ごろ大潮干のころは佛を高く拜み、岩根高くあらはれ、佛體に浪打ちかゝり覆ふことなければ、佛體常にあらはれて穴の内明らかなりとぞ。」

●石廊崎 手石よりとある峠を越し、南崎村にいたれば、海岸奇石突出して、前に神子元島の燈臺を認む。これより一山を越え、長津呂灣をめぐれば、伊豆半島の最南端に石廊岬突出せり。石廊一に石室を作る。岬端に燈臺の他、海岸望樓及び電信局の設けあり。而して岬端の半腹、日夜断えず外洋の怒濤に洗ひ去られて、皮肉剥げ、唯だ巖骨の峙立するのみ。その懸崖の屏風の如くに峙てる半腹を穿ち、權現祠を安んず。式内の古祠にして、半ばは石窟の中にあり。故に石室權現と稱し、岬を石室と呼ぶ。長

津呂より石室まで馬脊の如き半島の頂上に、一條の細逕、榛莽の間に通ずるもの十八町、海岸望樓は白く綠樹の上に聳峙す。身を岬端の巖上這ひ松の間に置き、眈を放てば右方は遙かに遠州御前崎と對して、遠州洋を眼下に下瞰し、左方は相模洋を隔て、三浦三崎と相對し、前面は茫茫たる太平洋、近く神子元島の燈臺を望み、遠く七島中の大島、利島、新島、神津島を指點し得べし。東海航行の汽帆船は、皆な日夜この岬上と神子元島の兩燈臺を目標として航路を急ぐなり。燈臺の下、石室權現社にいたるには、獅子の怒るが如き巨巖の脊を踏み、腹を攀ち、紆餘曲折して下れば、巖の最も突出する所、水面十丈の所にありて、懸崖の下、深潭の底、蛟龍棲み、鯨鯢潛むかと疑はる。遠く水天直接するのほより崩れ來る怒濤は、大山の崩るゝが如くに懸崖を打ち、咆哮怒號、聲は萬雷の轟くが如く、凄壯言ふばかりなし。蓋し、本邦海岸中稀に見るの大景か。

石室より仲木灣を過ぎ、妻良子浦を経て、三里餘にして松崎にいたるべし。その間沼津、下田通ひの汽船は所

々に寄港し、その寄港地は皆な多少の繁華を保てり。

松崎 下田以北駿河の沼津にいたるまでの間最も殷賑なる港町にして、人口三千を算し、百五十噸以下の帆前船の常碇泊所なり。下田通ひの汽船の他にこの地と沼津との間にも別に汽船の往來あり。その地勢、天城山に發源したる中川の河口に位して、川に臨める地に一旅館あり。

仁科海岸 松崎灣の北方一里、仁科の海岸は岩石多く、絶壁高く、怒濤掀翻、石廊と相俟つて、風光絶佳なり。

堂ヶ島洞窟 仁科村字濱に屬せり。村より西北に赴くと數里にして由流木橋あり。長さ三間に過ぎざる小橋なれども白楨を以てこれを造り、崇神天皇の御宇初めてここに架せしものと言ふ。傍らに一字の草堂あり。薬師堂と稱し、行基作薬師如來を本尊とせり。この堂より望めば前面一帯の海水は灣をなし、南方には青松白砂と連り、東には庚申山の屹立するあり。海中には小出地、比叡、飛龍、龜巖の諸岩島基石を散ら

せしが如く點在して、灣口を扼し、灣内殆ど湖水の觀あり。もし船を舥して灣外に出づれば眺望更に濶大にして南に龜の子崎、雪見ヶ嶽を觀、西に高島の二島嶼を眺む。高島と陸地との間に三四町の濱洲ありて海水を劃し、海潮の干満に従ひ、その洲自然出沒す。これを瀨濱と言ふ。北に三足島、矢立島、俵島等の奇巖あり。その傍ら天窓山の絶壁に一大洞窟を開く。これを本洞の南口とす。洞口高さ二丈幅六間ばかり、入ること七八十間にして洞上に天然の窓と穿つ。長方形にして殆ど厨の引窓の如く、日光こゝより注射して能く洞中を照らし、水中魚介の遊泳するも數へ得べし。洞道や、折れて北東に行くこと二三十間にして、小濱あり。由流木橋の水こゝに注ぎて潮水に會す。また洞口より十四五間の所に第一の岐洞あり。西に向つて馳せ、終に西岸を貫きて海に通ず。その入口を西口と言ふ。また本洞窓下北に第二の岐洞あり、西に走ること二十歩ばかりにして、漸く、窄くこゝに至てまた闇黒なる二洞を分つ。その深さ極まりなく、里人その奥を知らずといふ。たまく波浪のその中に寄進することあれば、

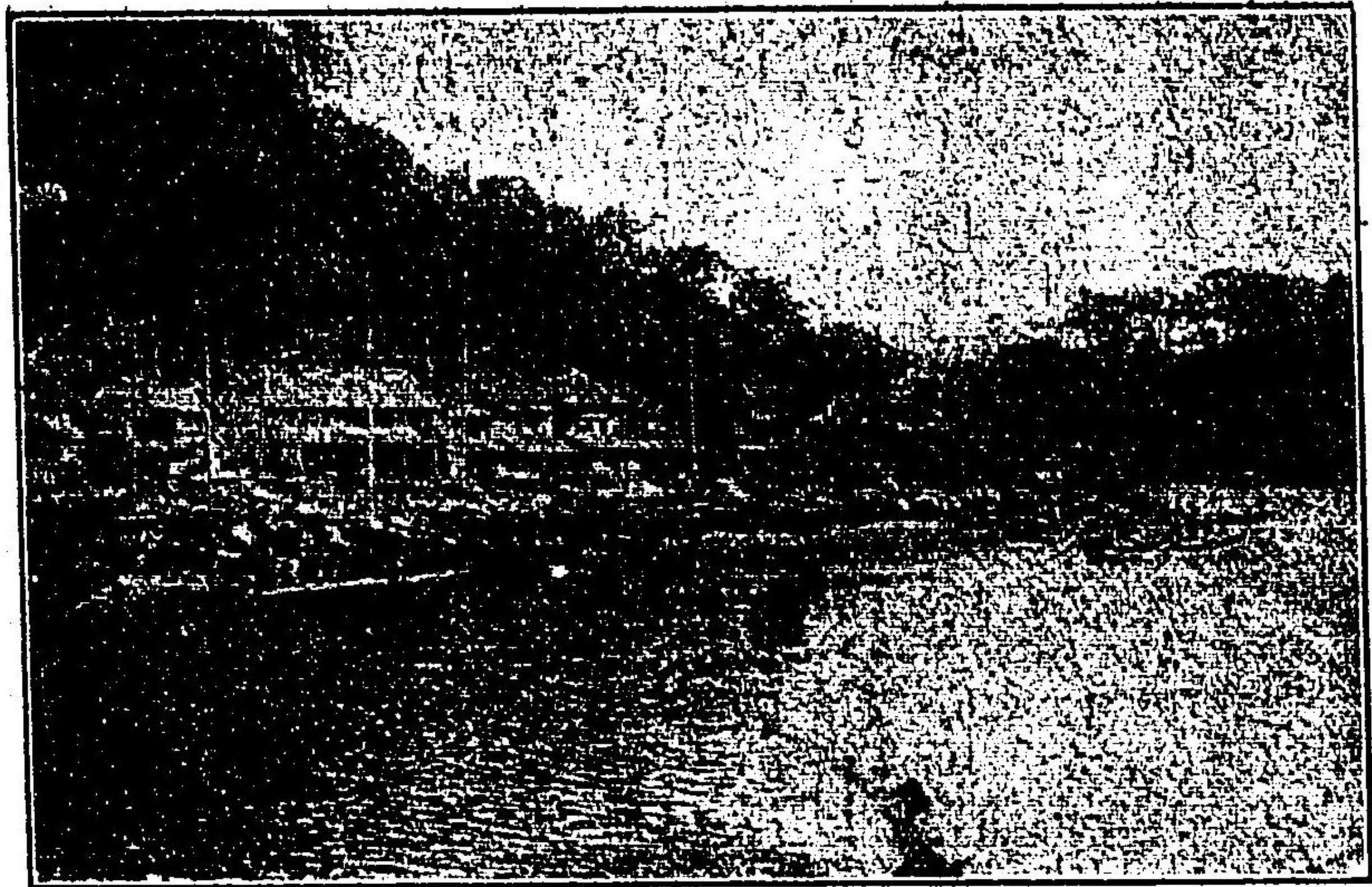
反響を呈すること宛かも大砲の轟然として耳を掠むるが如しと。右方の洞中に白沙の濱あり。蝙蝠その中に棲めり。またこの洞口より迂回して直ちに南方に走り、遂に西洞と相會するものを副洞と云ふ。本洞は廣くして副洞はや、狭く且つ水淺きが故に、満潮の時ならざれば舟を行りやがし。然れども干潮の折には紅蛾多く洞中に棲み、手足を以て自由に獲り得べし。もしそれ盛夏の日この洞中に入れば清爽の氣人を襲ひ、肌粟を生ずるものあり。まことに豆州の一名勝と言ふべし。たゞ地僻遠にして廣く世人に知られざるを恨む。もしこの地に遊ばんと思はば、沼津より下田通ひの汽船に搭じ、その途上松崎に上陸すれば、陸路三十町にして濱村に達すべく、同所にて洞廻りの小舟を僦ふて縦覽せらるべし。

●歸一寺 松崎の東、中川村大字船田にあり。萬法山と號し、一山國師の開基に係り、徳川家康會て寺領を寄附せらるることあり。またその北三十町ばかりの大字門野に寶藏院あり。曾て弘法大師の住したる古刹にして、境内に大師の舊蹟多く、地僻遠にして

達磨山 戸田の西にして、同地と修善寺との間にあり。眺矚の佳を以て世にあらはる。山の絶頂は九百四十米突、眼界洞達にして、遙かに駿河灣を双眸の中に收め、富岳の倒影はこれを田子の浦の清波に望み得べく、三保の松原は寸碧を浮べて灣上に突出す。風光恰も圖畫に對するが如し。また山の南に並立する山を伽藍と言ふ。山中石楠花多く、沈香谷の稱あり。

○伊豆諸島 此處に伊豆諸島を記すべし。

大島 伊豆七島の一にして、東京を距ること三十二里、伊東港より往來するを以て便となす。島の周圍凡そ十里餘、山勢峻しからずして白田九十町あり。分ちて新島、岡田、泉津、波浮、差木地、野増の六村となし、戸數凡そ二千七百餘、人口五千を有せり。名高き三原山は沙濱中に屹立して、二千五百十二尺の標高を有し、常に硫烟を吐けり。ことに夜間は火坑より噴出する燄光輝き、晴天に於ては著名の目標となり、晝夜ともに數十里の遠所より遙望し得べし。山に延喜式穗都佐和氣命神社あり。また



新島に曹洞宗の寺院あり、天正中の草創と言ふ。且つ同村に鎮西八郎爲朝の館址と言ふものあり。島中最も繁華なる村にして、島廳のあるところ、全島の首村なり。波浮港は島の東南隅にある噴火坑の跡にして、灣口狭、水深く、風波を避くるに便なれども港内狭少なるを以て、五百石以下の日本形船の他は碇泊することを得ず。島の空氣洋の影響を受けて温和なれども、風非常に強きを以て山上の樹木は成長すること能はず地上に偃臥す。降雨は四五六及び九月に多く、雨量渺なきに非ざれども、全島疎鬆な

る火山噴出物を以て掩はれ、土壤乾燥せるを以て一の河流なく、水田尠なく、且つ飲料水に乏しく、泉津、波浮兩村の他は多く天水を用ふ。人口は大凡五千五百を有し、その比例は男子百人に對し女子百十一人餘に當れり。これ、三十才未満の男子は勞働せざるを以て、男子の出産を悦ばざるによるならんと言ふ。家事は勿論、耕作、伐木に至るまで皆な女子これにあたり、従つて幼兒あれば、女子の生業に妨ぐるごと大なるを以て、昔時は墮胎するもの頗る多く、人口増加率甚だ少なかりしと言ふ。島民一般に朴直親切にして、而も鈍ならず。盜賊の患なく、法律の用なし。加ふるに島民互に相親み、恰かも一家族の如し。これ、その祖先が西南地方または紀、勢半島より黒潮に乗じて漂着せし同一民族なる故なりと言ふ。島民の體格は好良にして徵兵検査合格者、三十三年に五割強を占む。ことに女子の姿勢正しく、強壯にして色白く、容色秀麗なり。男子の服裝言語は内地人と異ならざれども、女子は古來齒を染めず、眉を剃らず、未婚者は頭髮を島田に結び、養老紋の鉢巻をなし、必ず襷、前掛を着く。衣服は短かく

して下帶をなさず、前掛のひもに巾廣きものを用ひて前に結ぶ。色は黒の無地を常とし、紋付を着るもの尠ならず。縞物を用ふるは近時の事なり。物品を運搬するには水桶、薪その他悉く頭上に戴き、決して脊肩を用ひず。女子の言語は加行良行は多く波行、阿行に發音し、語調は古雅なり。物産の重なるものは林産にして、水産これに次ぎ、農業は甚だ振はず（大日本地誌）。大島の歌謡は三十一音より成り、その調頗る古雅優婉なり。その中木伐節と稱するものは尠なくとも四百年前の餘韻ありと稱し、句節ことに斧を打つ。『御身は誰が子、誰が娘、日蓮鹽屋の庄司が娘、何はなくとも鹽でもてなす』身はこゝに思ひし君はあの澳に、あまの釣舟兩手ががれし、差木地を行き來夜中にあひにで、契りはたげの露のおなさけ』などあり。著聞集に曰ふ『承安元年辛卯七月八日、船一艘抵伊豆沖島、登岸八人、長可皆八九尺、反省猿目、裸躰而纏編蒲、刺繡遍身、報大杖、而皆無言、島人以爲是鬼、乃試與之梁酒、則歌若馬飲既而見島人持弓矢而乞之、不與、即怒呼喚、杖殺五人、或被傷、島人大懼、出神弓且

射之、於是輒沒海上、船來風去、十月狀其事、而與其遺帶、上之國司、帶乃藏諸蓮華王院神寶神』と。蓋し、南洋人の黒潮に乗じて着漂せしものならん。

保元物語伊豆諸島に於けるは爲朝を叙して詳し。今その一節を引かんに『さる程に永萬元三月、爲朝大島の磯に出て遊びけるに、白鷺青鷺二つ連れて、沖の方へ飛び行くを見て、この鳥の飛様は定めて島ぞあらん、追ひて見んといふまゝに早船に乗りて駛せて行くに、日も暮れ夜にもなり、月を簀に漕ぎ行けば、曙にすてに島影見え、船を押しあげて見給へば、たけ一丈余もある大童の色黒く牛の如くなるが、多く出でたり。島をめぐり給ふに、田もなく島もなし。いかにして魚鳥をとるぞと問へば、魚は自然と打ち寄せらるゝを拾ひ、また穴を掘り身をかくし、聲をまなびて鳥を呼べば、鳥多く飛び入るを、穴の口ふさぎて聞取りにするといふ。童身に着くにものは網の如くなる太布なり。島の名を鬼が島と申す(今の八丈島これなり)しかれば汝等は鬼の子孫か、さては聞ゆる實あらんと宜へば、むかし正しく鬼神なりし時は、船なけれども他國へもわたりて人の生をも取りけり。今は果報つきを實も失せ、形ちも人になりて、他國へ行くことも叶はずといふ。さらば島の名を改めんとて、太き葦多ければ葦島とぞ名付け、この島俱して伊豆七島知行す。然ればなほ奢る心や出で来けん、國人もかくては如何なる謀反を起し給はんすらん、など申しけるを、預り奉る伊豆の狩野介傳聞して、この由を京に奏聞しければ、後白河院驚き聞し召して、當國並に武藏、相模の勢を催し、發向すべき由宣旨をなされければ、五百餘騎、兵船二十余艘にて、嘉應二年四月に大島の館へ押寄せたり。御

曹司思ひもよらず、沖の方に舟のけのしけるは何舟ぞ、見て參れと宣ふ。商人船やらん多く連り候ふと申せば、よもさにあらじ、我に討手の向ふやらんと宣へば、案の如く兵船なり。さては定めて大勢なるらん、よし一萬騎なりとも、撃ち破つて落ちんと思はば、一まづは鬼神が向ふたりとも射拂ふべけれども、多く軍兵を損し、人民を惱さん不便なり。勅令を背きて終には何の詮にあらん。この上は兵一人も残るべからず、皆落ち行くべし。物の具も皆な龍神に奉れとて、落ちゆくものに各形見を興へ、烏冠者爲頼とて九歳になりけるを喚寄せてさし殺す。これを見て五になる男子、二つになる女子をば、母抱きて失せにければ力なし。さりながら矢一つ射てこそ、腹をも切らめとて立向ひ、最後の矢を手淺く射たらんも無念なりと、一陣の舟に水際五寸ばかり置いて、大船の腹をかなたへつと射通せば、兩方の矢目より水入りて、舟は底へぞ巻き入りける。爲朝、これを見て、保元の古へは矢一筋にて、二人の武者を射殺しき。嘉應の今は一矢にて多くの兵を殺しなほんぬ。今は思ふことなして内に入り家の柱を後ろに當て腹かき切つてそ居たりける。』

利島 七島の一にして、大島おほしまの南二里餘にあり。周圍二里半、人口三百十五人を有し、七島中の最小なり。島岸は斷崖絶壁のみにして、碇泊甚だ便ならず、唯前濱に一埔頭あり。全島水に乏しく、潮水を或は漉し或は雨水を瀦して飲料に供し而してその島勢、屹然として海上に突起せる火山島にして、尖圓錐形をなし、中央の高峯を南御みなみ

新島と利島との間に富士山見ゆ。三宅島に薬師堂あり、境内ひろく椎楠など大樹し
 げりあり、巖には玉蔦苔むして、草木のたゝすまひいと物ふりたり。左右の扉に仁王
 の畫あり、佛前の欄間に龍の畫あり。共に英一蝶の筆なり。一蝶この島の阿古に流
 寓しける間、つれづれなるまゝに畫がきたるなりと言へば、なほあるべしと尋るに斷
 えてなし』。

御藏島 三宅島の南四里半にありて、人口約三百を有す。島勢洋中に屹立して平地
 なく、沿岸一帯懸崖絶壁削立して船を泊すべからず。わづかに北方大根ヶ濱は船を寄
 すべしと雖も、潮流激迅にして出入頗る危し。島の西北山腹を平けて住居を構ふ。植
 物の成育他島にまさりて、ことに黄揚木の發育に適し、島民多くこれを輸出せり。

八丈島 島も通はぬと唄はるゝ八丈島は御藏島の東南約二十里にあり。東京よりは
 約百二十餘里、横濱より特に毎月約一回小笠原島定期船の寄泊することあり。伊豆日
 記に曰ふ『凡て八丈島へわたる船は御藏島を乗りはづして、南の方はてもなき海に海

れて、ゆくえなくなりたる船むかし數多ありとなん。その流れたる舟の南の方に流る
 れば、潮は血をそゝぎたる如く紅なる故に、赤汐といふとぞ。その赤汐にながれ入り
 ては、歸ること叶はずと言ふなり』と。これ、即ち黒潮を指せるものにて、同海流は
 熱帯地方より來流して、本州南方の沖を過ぎ、御藏、八丈兩島間の附近にてはその流
 れことに著しく、平均一時間四海里の速度を有すと。一名、黒瀬川とも呼べり。今
 大日本地誌の當島を誌せる記事を引用せんが、島は瓢形をなして中央や、細く、南北
 に長く四里餘、東西に狭く二里半、周圍十里半ばかりなり。火山島にして七島中最も大
 なり。島の西北に西山即ち八丈富士あり、東南に東山即ち三原山あり、兩山の裾野に相
 會する所は一帶の低地をなし、大賀、三つ根村こゝにあり。三原山の西南に末吉、中の
 郷、檜立の三村あり。海岸ことごとく岩壁にして八重根、神港、末吉の諸港あれども
 孰れも安全なる錨地にあらず。黒潮島の近海を流るゝを以て、氣候溫和にして茄子、蕃
 椒等成熟二三年を経るも枯死せずと言ふ。全島火山噴出物より成るを以て、土壤乾燥

し泉水に乏しく、農作の進歩を害すること大なり。流水を飲用としまた灌漑に供す。人口七千五百三十餘にして、男女の比例は男百人に對し女百八人餘なり。古より女護ケ島の名あるは即ち女子多ければなり。また島にては分戸を禁じ、嗣子の外、娶らざるを以て、人口の増加率僅少なり。氣風は大島と同じく朴直親切にして、島民互に相親み、法律の用なし。體格は男女共に良好にして、殊に女子は姿勢正しきも、男子は火酒を用ひ身體を害すること大なり。男子の服装は内地人と大差なし。事ある時の女子の帯は、廣さ一尺ばかり長さ五六尺の蘇芳染の布を用ひ、老幼ともにこれを前に結ぶ。平常は細き紐を用ふ。外出する時は必ず手拭を被り、降雨にも傘を用ひず、これ風強きが爲めなり。女子は鐵漿を染むれども眉を剃らず、頭髮は島田に似たるものを頭後に結び、常に山茶油を用ふるために光澤ありて、且つ長く立ちてその膝に達するものは通常なり、長さものは地に委する一二尺のものもあり。耕地少なきを以て食物は内地より輸入する米麥を用ふるも、これ富者に限り通常は甘藷及び諸菜海藻を用ゆ

甘藷より作りたる焼酎を飲むこと内地人の茶を飲むに同じ。首村大賀村に八丈島廳、八丈島區裁判所あり。物産には内地にて黄八丈と稱する特産物あり。これ本島唯一の財源にして、その他牧畜、林産、水産等多少發達せり。屬島として小島、青ケ島あり。青ケ島は往古鬼ケ島と稱せられしもの、八丈島の東南十三里の海中にあり。周圍三里ばかり、山岳四周して中に火山口あり、海岸絶壁なりと雖も、水池浦、神子浦、西浦ありて上陸に便なり。八丈島の名蹟としては大賀村中横麻原の瀕海に源爲朝館址と稱するものあり。今城山と稱して空隍殘存す。また同村崇福寺には爲朝、爲宗父子の墓と傳ふるものあり。三つ根村外道ついで澤と、中の郷瀧澤には八郎神社あり。また大賀村の外稻葉に墓標十四基あり。中央は浮田秀家、他は子秀規及び一族の墓なりといふ。墓域に浮田櫻あり。

●小笠原島 八丈島の南方百二十里の海上にありて、東京より二百二十二里餘を隔つ。三箇の列島よりなりて、大小島九十七を算す。その中最北なるを婿島列島とし、中央

なるを父島列島とし、最南なるを母島列島とす。全島南北の一線上に列布し、北緯廿六度三十二分より、二十七度四十三分に及ぶ。全島丘陵多きを以て、谿間に多少の流水あるの他、著しき水流なし。されど飲用に供する井水は到るところに湧出ず。今各島につきこれを細説せんに、父島は列島中の中央部に位し、その面積最も大に、兄島弟島、南島等これをめぐる。西北部に二見灣あり。灣の北岸に大村ありて、こゝに小笠原島廳を置く。その南に清瀬あり。嘉永年間米艦の碇泊せし地とす。また灣の南岸扇浦に開拓小笠原島の碑あり。近傍に藤森圖高の碑あり。旭山は島中の高山にして、二見灣の東に聳ゆ。父島の南方二十海里に母島あり。姪島、妹島、姉島等その南に連る。沖村港は母島の南部にありて、乳房山は島の中央部に聳え、全列島の最高所、標高一千七百尺を有せり。その東に劔先山あり。大日本地誌曰ふ『父島の大村は全列島中の首村にして、人口千二百餘、島廳の他、父島區裁判所、郵便局、税務所、父島税關監視署、鍛冶橋監獄父島支署等あり。扇村は二見港の東南隅にありて、舊島廳のあ

りしところ、その南方に袋澤村あり。大村の東方に歸化人の根據地たる奥村あり。母島の沖村は溪間の坦地にして、島廳母島事務所、區裁判所出張所、郵便局等あり。母島の西北端なる北港の港頭に北村あり。東南一丘を隔て、東港あり。小笠原列島の總人口は四千九百六十餘にして、その中約百十の歸化人あり。本島の住民は以前歸化人と、八丈島より移住のものゝみなりしが、今はその多數明治九年開拓以後内地より移住せしものなるを以て、風俗人情共に内地と變る所なし。歸化人の多くは父島の奥村に居住し、海濱に住宅を營み、樂天的生活をなせり。世界各人種の雜種にして、容貌は男女とも日本人と變ず。衣服は洋裝の簡單なるものを用ひ、麥藁製の帽子を載き徒跣なり。かれら根據地たる奥村以外に住するものは甚だ日本に化せられたり。かれらは獵獲に長ずれば、外國獵船に雇はれ北海に赴くもの多し。物産の重なるものは農産物にして、甘蔗、香蕉、鳳梨、檸檬、甘藷等を産す。就中甘蔗は主なるものにして、全島の山坡丘陵いたる所に叢生し、これより製造する砂糖は本島の主産物なり。母島

に於ては養鶏盛なり。林投樹たこのきの葉を晒し、巻煙草入座蒲團及び手提鞆等を製し、多く外國に輸出す。而して列島はかく南方に位するを以て、氣候温暖にして、繁茂せる植物は内地とその觀を變にし、椰子、香蕉はな、蒲葵びぼう、棕櫚しゅうろ、芭蕉、林投樹等ありて、宛然南洋諸島にいたるの感あり云々。ことに棕櫚は周めぐり月三尺、高さ五六尺に成育すといふ。蠟龜ろうきまた頗る多し。

本島の沿革興味あり。今地誌載するところの大意を摘記せんに、島は今を去ること三百餘年前、信州深志城主小笠原貞頼これを發見し、その苗字を以て島名となし、しばしば往來して物産を拾收せしも移殖開拓するにいたらず。後、延寶三年徳川家綱長崎人島谷氏に命じてこの島を探檢せしむ。その後渡航中絶して人跡至らざりしかば、無人島と稱せり。天保元年伊太利人マテオマサル、英、米、丁等の國人五人及びハワイの男女十七人ばかりを率ひて父島扇浦に來往す、これ父島住民のはじめなり。同じく六年英人ブラホーをはじめ男女六人、父島より母島沖村に移住す、これ母島住民のはじめなり。嘉永六年米國使節ペルリ本邦來航に先立ち、この島に來り二見灣に繫泊し、父島兄島を探り清瀬に淀泊す。後ちペルリの別將ケルリこの列島を測量し、ペルリの命により米國合衆領とし、コックフィン群島と命名し、銅板に發見のことを記し、沖村西北岬の一樹に附せり。ペルリの勸告により島民自らピール島殖民と稱し、島中の政務を行ひしも幾もなくそれを

廢せり。ペルリの來航に際し各種の家畜を放養せり。現今諸島に繁殖せるものこれなりといふ。幕府ペルリが島民を撫順し、その本國の所轄に歸せしめんとするを聞き、開拓となふれども終に息む。文久二年外人の來航するものとすく多きを聞き、外國奉行水野忠徳、服部歸一に命じ、この島を巡檢し外人を懷撫し、新たに八丈島より男女四十ばかりを移殖せしめ、扇浦に二十餘の家屋を建てこれに居らしめ、衣食器具を給して民を優遇せり。全島はじめわが管理に歸し、耕墾の事業や、繕に就けり。後ち一旦放棄せしも、明治にいたり米人ヒース全島を據有せりとの風評あるや、外務省は再び拓殖を企て、官吏を派し、島内を探知し、幕府の舊法に従ひ人民を安堵せしむ。こゝに於て全島確然わが管理に歸し、移殖開墾の業また從て興る。内務省の所轄として出張所を扇浦に置く。明治十三年更に東京府の所轄とし、十五年本島の外人ことごとくわが民籍に歸化編入す。以後内地より移住するもの多く、十九年更に島廳を父島に置き全列島を統治せしむ。

新撰名勝地誌卷二終

明治四十三年四月二十日印刷
明治四十三年四月二十三日發行

定價金六拾錢

著者 田山花袋

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 河合辰太郎
代表者 東京市下谷區二反町一番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

新撰名勝地誌卷二
著作權所有
東海道西部 奥付

發行所

(東京市日本橋區本町三丁目)

博文館

總發行所 東京市日本橋區本町三丁目
支店 東京市本所區番場町四番地

田山花袋君編

新撰名勝地誌

四六判上製美本 正價金六拾錢
各卷銅版地圖插入 郵稅一册金八錢
紙數一册五百頁以上

本書は郡別を以て名所舊蹟神社佛閣山川沼湖温泉海水浴場等を記し遠近の順序に由りて之れを詳述す其位置名勝は悉く新町村の名を以てし里程戸口にも亦最近の調査に係るものを擧ぐ而して毎編巻首に細密なる地圖を載せ巻中に數十個の寫真木版を挿入して各地の實景を描出す之に加ふるに其地理風土を始め山河の形勢人情の厚薄氣候の寒暄物産の多寡等を記する極めて確實一國一郡一市一町悉く小地誌を備へたるを以て之を一部の大地理書として見るも決して妨げず眞に近來の一大著作なり

卷一 畿内

銅版精密地圖四葉 挿入
本文刷込寫真版五十個

卷二 東海道西半部

銅版精密地圖四葉 挿入
本文刷込寫真版五十個

卷三 東海道東半部

銅版精密地圖三葉 挿入
本文刷込寫真版五十個

(以下各道續出)

發行所 東京本町 博文館

巖谷小波君著

新洋行土産

前編 (於譽破 例日記) 久保田米僊壽伯裝釘並書

全一册洋裝新形 前定價 金壹圓卅錢
特製類美本 郵稅金 八錢
紙數四百頁

(後編近刊)

先に伯林二年の觀察を、洋行土産二卷に著はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめたる著者は此度渡米實業團に加はつて、在來三月間の見聞を新洋行土産として發表す。著者が銳利なる眼光と、輕妙なる筆致とは、世已に定評あり。而して彼の實業團の渡米や、亦本邦空前の舉なりとす。本書他の外遊記に比して、其光彩を添へるもの元より論を俟たざるべし。

小洋行土産

全二册新形美本 (下巻) 正價各壹圓廿錢
紙數八百四十頁 (品切) 郵稅各金八錢

伯林土産 戀の畫葉書 一名留學 生氣質

正價金壹圓 小包料金八錢

東京 博文館發行 本町

坪谷善四郎君著

世界漫遊案内

(再版)

全一冊四六判 特製紙函入
正金壹圓七拾錢
小包料 金拾貳錢

巖に著者自ら歐米を漫遊し、多くの洋行者が行くべき處は勿論、脚達者に駈け廻つて、筆達者に書き記し、一箇年かゝつて出来たのが即ち本書だ、兎もすれば無趣味に流れ易い案内記を、實際経験の事實で潤色して、百餘種の寫眞を挿み親切の案内記に正確の奇事、見て面白く、讀んで裨益多い、今後の洋行者には恰好の案内記で、前日の洋行者には懐想の好伴侶、又海外に往來せざる人々には坐ながら各國の地理人情の風俗を知るべく、娛樂にも研究にも趣味と實益とを兼ね備へた書である。

田村松魚君著

北米世俗觀

全一冊三六判
二百六十二頁

正價金參拾五錢
郵税金 四錢

永井荷風君著

あめりか物語

(三版) 全一冊四六判
三色版口繪入

正價金六拾五錢
郵税金 六錢

鎌田榮吉君著

歐米漫遊雜記

(四版) 全一冊四六判
四百二十四頁

正價金四拾錢
郵税金 六錢

讀賣新聞記者

松川木公君著

樺太探檢記

全一冊菊判寫眞版八葉入
正金卅八錢 郵税金 六錢

是れ著者が凍寒の樺太を踏破して其真相を描ける書なり。書中寒山あり氷河あり高嶽あり又あり氷漬の木尹乃あり。記事奇に富み文に興味多し。狄地の秘密を知らんと欲する人は必ず此少壯の勇者が齎せる此一巻を求めざるべからず。

文學博士

姉崎正治君著

花つみ日記

(三版)

全一冊菊判寫眞版卅六葉入
正金壹圓卅錢 小包料 金八錢

南イタリヤノ美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して佛敎を語り、ロマの寺院に聖敎會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる交友に接したる跡を傳ふ、天然美術の記録宗敎文明の評論として江湖の一讀を薦む。

故大橋乙羽君著

賜天覽 耶馬溪

菊半截美本 正價金四拾錢
百五十六頁 郵税金 四錢

大町桂月君著

一簑一笠

菊半截美本 正價金參拾錢
三百七十六頁 郵税金 四錢

發行所 東京本町 博文館

坪谷善四郎君著

世界漫遊案内

(再版)

全一冊四六判 特製紙函入
正金壹圓七拾錢
小包料 金拾貳錢

巖に著者自ら歐米を漫遊し、多くの洋行者が行くべき處は勿論、脚達者に駈け廻つて、筆達者に書き記し、一箇年かゝつて出来たのが即ち本書だ、兎もすれば無趣味に流れ易い案内記を、實際経験の事實で潤色して、百餘種の寫眞を挿み親切の案内記に正確の奇事、見て面白く、讀んで裨益多い、今後の洋行者には恰好の案内記で、前日の洋行者には懐想の好伴侶、又海外に往來せざる人々には坐ながら各國の地理人情の風俗を知るべく、娛樂にも研究にも趣味と實益とを兼ね備へた書である。

田村松魚君著

北米世俗觀

全一冊三六判
二百六十二頁

正價金參拾五錢
郵税金 四錢

永井荷風君著

あめりか物語

(三版) 全一冊四六判
三色版口繪入

正價金六拾五錢
郵税金 六錢

鎌田榮吉君著

歐米漫遊雜記

(四版) 全一冊四六判
四百二十四頁

正價金四拾錢
郵税金 六錢

讀賣新聞記者

松川木公君著

樺太探檢記

全一冊菊判寫眞版八葉入
正金卅八錢 郵税金 六錢

是れ著者が凍寒の樺太を踏破して其真相を描ける書なり。書中寒山あり氷河あり高嶽あり又あり氷漬の木尹乃あり。記事奇に富み文に興味多し。狄地の秘密を知らんと欲する人は必ず此少壯の勇者が齎せる此一巻を求めざるべからず。

文學博士

姉崎正治君著

花つみ日記

(三版)

全一冊菊判寫眞版卅六葉入
正金壹圓卅錢 小包料 金八錢

南イタリヤノ美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して佛敎を語り、ロマの寺院に聖敎會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる交友に接したる跡を傳ふ、天然美術の記録宗敎文明の評論として江湖の一讀を薦む。

故大橋乙羽君著

賜天覽 耶馬溪

菊半截美本 正價金四拾錢
百五十六頁 郵税金 四錢

大町桂月君著

一簑一笠

菊半截美本 正價金參拾錢
三百七十六頁 郵税金 四錢

發行所 東京本町 博文館

學生必携一教師參考

東京高等師範學校教授
東京帝國大學理科講師
東京府立第三中學校教諭

山崎直方君校閱
石渡延世君編

(發行所 博文館)

地理統計要覽

全一冊
洋裝三六判美本
紙數二百四十六頁
正價五拾八錢
郵稅金六錢

本書は地文天文の兩方面に涉り天體陸水氣界に關する數より本邦外國の國勢各國君主及其系統關係に至るまで一目の下に瞭然たらしめたるものなれば常に普通教育の教師及學生の參考書たるのみならず一般國民の座右に備ふべき書なり

鹿兒島縣師範學校教諭

田倉紋藏君著

地文學要解

全一冊
洋裝三六判美本
紙數百二十頁
正價貳拾貳錢
郵稅金四錢

●附錄最近三年間官立學校地文科入學試驗問題並に擬答

理學士 佐藤傳藏君著

日本新地理

全一冊
菊判紙數三百十四頁
並製金四拾錢
特製金五拾五錢
郵稅八錢 小包

本邦の天然地理、人事地理、地方誌の三項を嶄新の事實に據り確實の統計を基とし、組織巧妙、叙述簡潔、意到り筆隨ひ、既盡して餘蘊なし、且つ彼の臺灣と北海道とに至つては立論奇抜にして説明詳密なり、中等教育の參考書、教科書として世上他に比類あるを見ず乞ふ一本を購ふて新地理學の眞價値を評するに忘る勿れ。

萬國新地理

全一冊
菊判紙數三百十八頁
並製金四拾錢
特製金五拾五錢
郵稅八錢 小包

本書は一般人士に向つて世界新地理學の要領を會得せしめんが爲に最新の統計、最新の事實最新の組織を以て、編纂されたるものにして中等教育地理專門家を始め一般學生又は實業家の參考に最適の良書たり殊に本書の特色とする所は本邦に尤關係多き東洋地理に置き従來の撰に倣はざるにあり。

發行所 東京本町 博文館

趣味實益兼備萬有科學の研究

每編專門諸大家講述

學藝叢書

全十二册 洋裝菊判美本
每編口繪寫真版挿入
正一册金四拾錢 郵稅
價一十二册金四十四錢 六錢

人類學叢話 理學博士 坪井正五郎君講述

國語學叢話 文學博士 上田萬年君講述

植物學叢話 理學博士 三好學君講述

天文學叢話 理學博士 橫山又次郎君講述

水産叢話 理學博士 岡村金太郎君講述

地理學叢話 理學博士 神保小虎君講述

動物學叢話 理學博士 石川千代松君講述

物理學叢話 理學博士 今村明恒君講述

歷史叢話 文學博士 箕作元八君講述

地文礦物叢話 理學博士 鶴田賢次君講述

植物雜話 理學博士 松村任三君講述

海事叢話 工學博士 寺野精一君講述

博文館發行



